

●国際連合大学 2014-2015 年国際教育交流事業●

# 韓国政府日本教職員招へいプログラム

## 実施報告書

ソウル・全羅南道/京畿道・釜山

2015 年 8 月 25 日(火) - 8 月 31 日(月)

国際連合大学 (UNU)  
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

●国際連合大学 2014-2015 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

**実施報告書**

ソウル・全羅南道/京畿道・釜山

2015 年 8 月 25 日(火) — 8 月 31 日(月)

はじめに	2
1. 実施概要	4
2. 教育機関訪問	6
3. 学校訪問	18
4. スタディツアーア・ホームビジット	31
5. 成果	35
6. 今後の活動予定	49
資料	54

国際連合大学 (UNU)  
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

# はじめに

国際連合大学（United Nations University）は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、**2002** 年に主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金とともに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。**2000** 年に設立された「ユネスコ青年交流信託基金」で実施されていた「韓国教職員招へいプログラム」は、同年より本事業のもとで開催されることとなり、同大学からの委託を受けてユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施を担当し、今年まで **15** 回にわたり、**1,766** 名の韓国の教職員を日本に招へいしてきました。

**2003** 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 **10** 名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきました。これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価され、**2005** 年からは韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして、参加人数を **20** 名へ倍増し日韓教職員相互交流が実施されました。**2008** 年のプログラムからは、招へい人数をさらに倍増し、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

**2015** 年 **8** 月 **25** 日（火）から **8** 月 **31** 日（月）に実施された「韓国政府日本教職員招へいプログラム」では、**2015** 年 **1** 月に韓国の教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員および**2016** 年 **2** 月に受け入れていただく予定の自治体や学校の教職員と、公募により選抜された教職員が参加し、ソウル市、全羅南道（チョルラナムド）順天（スンチョン）市、京畿道（キヨンギド）光明（ク

アンミョン) 市・始興 (シフン) 市・華城 (ファソン) 市での学校および教育文化施設等の訪問を通して、韓国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、韓国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。

このたびの訪問が、韓国の教育や文化に対する参加教職員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日韓の教職員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、韓国ユネスコ国内委員会、文部科学省、及び全羅南道教育庁、京畿道教育庁、訪問先の学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2015年9月  
国際連合大学  
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

# 1. 実施概要

韓国政府日本教職員招へいプログラムは、**2000** 年度から実施されている韓国教職員招へいプログラムと対応するプログラムで、**2003** 年から日本の教職員を韓国へ派遣してきた。これらの交流事業の成果が韓国政府に評価され、**2005** 年からは参加人数を倍増し、韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして実施されることとなった。**2007** 年には、文龍鱗（ムン・ヨンリン）元韓国教育部長官からの招請により、中曾根弘文元文部大臣を団長として日本教職員 **29** 名が韓国を訪問した。**2015** 年までにのべ **519** 名の教職員を韓国に派遣し、両国の教職員の交流を深め、日韓両国間の相互理解と促進に貢献してきた。

今回の韓国政府日本教職員招へいプログラムでは、日本の教職員等 **50** 名が **2015** 年 **8** 月 **25** 日から **8** 月 **31** 日の 7 日間にわたり韓国を訪問した。訪問団の構成は、参加者として、1) **2015** 年 **1** 月に国際教育交流事業のもと、日本を訪問した韓国教職員を受け入れた教育委員会より推薦された教職員、2) 同年訪問した東京近郊の学校の教職員、3) **2016** 年 **2** 月に韓国教職員の受け入れにご協力いただく教育委員会より推薦された教職員、4) 公募により選抜された教職員の計 **44** 名および、国際連合大学、文部科学省、ユネスコ・アジア文化センターの同行者を含めた **50** 名である。訪問団の団長は、泊江市立泊江第一中学校の樋口豊隆校長であった。

**8** 月 **25** 日、成田ビューホテルで、訪問にあたってのオリエンテーションが実施された。国際連合大学大学院の岩佐敬昭事務局長、文部科学省の豊岡宏規国際課課長、駐日本国大韓民国大使館の崔成有参事官、ユネスコ・アジア文化センターの米島百合子人物交流部部長の挨拶のうち、文部科学省生涯学習政策局参事官付外国調査係の松本麻人氏より「韓国の教育事情」と題した講義があり、

現状や課題について具体的な説明を受けた。その後、ESD の理解を深めるためのグループワークを行い、個々の ESD についての知識を共有したり、学校での取組みを紹介したりし合う時間が設けられた。また、前年度参加者から前年度の体験談、アドバイスおよびその後の交流についての発表が行われ、参加者全員が本プログラムおよび今後の教育交流への目的意識を高めることができた。発表にご協力いただいたのは、**2014** 年度に参加した市川中学校・市川高等学校の本川梨英教諭である。その後、プログラム中の役割分担、訪問先からのリクエストに対する準備、日本文化紹介について参加者同士で打ち合わせを行った。

訪問団一行は **8** 月 **25** 日に成田国際空港から出発し、同日昼頃に仁川国際空港に到着した。同日、ソウルに移動し、ユネスコ会館にて、韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）による今回の訪問に関するオリエンテーションが実施された。また、韓国の教育講義や、韓国の ESD および ASPNet（ユネスコスクール）についての説明があり、日本教職員は韓国の教育事情や日本の教育事情との違いについて理解を深めた。翌日、A グループは、ソウル市内のユネスコスクールである龍江中学校を訪問し、B グループは、ソウル大学校師範大学付設女子中学校を訪問し、学校給食も体験した。

**27** 日から **29** 日までの 3 日間は A、B 二つのグループに分かれ、A グループは全羅南道（チョルラナムド）順天（スンチョン）市を、B グループは、京畿道（キヨンギド）光明（クアンミョン）市・始興（シフン）市・華城（ファソン）市を訪問し、各都市で教育機関・学校訪問や文化施設見学を行った。

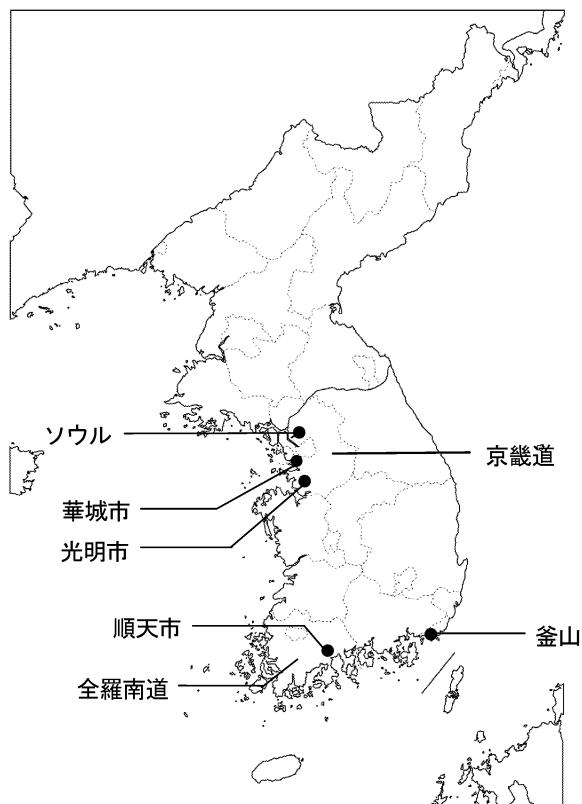
**27** 日、A グループは全羅南道教育庁訪問後、全羅南道教育研究情報院を訪問した。**28** 日はユネスコスクールの順天旺之小学校と順天八馬高等学校を訪問した。夕方からは、歓迎晩餐会が行われ、訪問団と韓国教職員が交流を深めた。**2015** 年 **1** 月の日本招へいプログラムの参加教職員が参加しており、再会を喜び、更に親交を深めている場面も見られた。**29** 日、順天湾庭園と松広寺を見学したのち、午後は、宿泊先のホテルに戻り、グループディスカッションが行われた。訪問団は韓国の教育事情について意見を交わし、理解を深めた。同日夕方、ホームビジットがありホストファミリーと交流の時間を持った。

**27** 日、B グループは京畿道教育庁訪問後、国立樹木

園を見学した。28日はユネスコスクールである鞍峴小学校を訪問した。午後は、同じくユネスコスクールである京畿自動車科学高等学校を訪問した。夕方から歓迎晚餐会が行われ、京畿道教育庁の歓迎を受けた。29日、世界文化遺産である華城（ファソン）を見学した。午後は、鞍峴小学校に移動し、訪問団によるグループディスカッションが行われ、様々な意見を交わした。同日の夕方からは、ホームビジットが行われ、ホストファミリーと有意義な時間を過ごした。

30日、A、B両グループ共に釜山へと移動した。同日の宿泊先である海雲台グランドホテルに到着後、同ホテルにて報告会及び閉会式が行われた。続いて、日韓国交正常化50周年を記念して、日本国文部科学省、韓国教育部共催の日韓教育交流サミットに出席した。同サミットには、黄祐呂（ファン・ウヨ）副総理兼教育部長官や下村博文文部科学大臣が出席し、韓国の高校生オーケストラと訪問団が歌を披露した。訪問団の代表がパネリストとしてパネルディスカッションに参加する場面もあつた。

8月31日、一行は帰港先ごとに成田国際空港、関西国際空港、福岡空港に向け、帰国の途に着いた。



## 2. 教育機関訪問

韓国ユネスコ国内委員会  
全羅南道教育庁  
全羅南道教育研究情報院  
京畿道教育庁  
日韓教育交流サミット

今回の教育機関訪問は、ソウル市、全羅南道(チヨルラナムド)、京畿道(キョンキド)の計 3 機関で行われた。ソウルへ到着すると、ユネスコ会館 11 階のユネスコホールにてオリエンテーションおよび開会式、韓国の教育事情に関する講義、韓国のユネスコスクール紹介が行われた。8月27日には、Aグループは全羅南道教育庁と全羅南道教育研究情報院、Bグループは京畿道教育庁を訪問した。8月30日には、釜山で本プログラムの報告会・閉会式が行われ、その後日韓国交正常化 50 周年を記念して開催された日本文部科学省、韓国教育部共催の日韓教育交流サミットに出席した。

### 韓国ユネスコ国内委員会 8月25日

代表: 関東石(ミン・ドンソク)  
ソウルに到着した訪問団は、ユネスコ会館にて韓国の教育に関する講義を受けた。また、韓国の ESD およびユネスコスクール(ASPnet)についての説明を聞き、理解を深めた。

日時 平成27年8月25日(火) 16:00~18:00  
場所 ユネスコ会館 11 階ユネスコホール

#### <韓国の教育に関する講義>

韓国教育開発院企画所長の尹鍾赫(ユン・ジョンヒョク)氏より韓国の教育政策について講義があった。

現在韓国では、創意人材の概念で施策を実施している。2015年5月、世界教育フォーラムが開催され、韓国の教育成果が報告された。韓国の教育は長所もあるが、入試に焦点を合わせた教育が行われ、問題

とされている。これからは幸せを目指す教育ということで、人間性、知識、競争優位性を兼備し、能動的、創造的に問題解決能力を育てるなどの創意人材という教育を行っていく。韓国の創意力量教育は 5.31 教育改革から始まっており、創意性を重視する教育課程である。

次に、韓国教育がどのように変化を遂げたか次のように説明があった。

1980 年代は児童生徒数が 1 千万人台だったが、今は減っている。幼稚教育を重視しており、幼稚園教育には多大な成果があると今後も期待している。今は少子化であり小学校の数に変化はないが、幼稚園の数は増えている。学級数も同様である。児童生徒数だと小学生が大きく減っており、ここ 5 年間で 50 万人くらいが減っている。逆に、教員の数は若干増えている。児童生徒数は減っているが、教育環境を整えるため教員を増やしている。教員一人あたりの児童生徒数は、大都市を中心に改善が求められている。

4 年制の一般大学、2 年制の大学などを合わせた高等教育機関は 340 校ある。4 年生学部課程は 290 万人、大学院は 33 万人。大学進学率は 80% 以上で世界最高水準だが、課題は教育と就職をどのようにつなげるか、ということである。

人材育成のための創意人材教育モデル学校について、創意人材教育と人間性教育とを合わせることを重視している。日本の ESD では食育が強調されているが、韓国でも食育は重視している。2015 年 7 月から人間性教育振興法を策定し、教育界ではそれを実践している。

永県(ヨンヒョン)小学校の創意人間性教育では、THEMA(テクニック、ヘルス、エフオート、マインド、アート)という教育を実施している。具体的には、科学探究大会の開催、スポーツクラブ、伝統礼節教室などを実施している。

中学校での自由学期制について、日本ではゆとり教育が強調されたが、それと似ている部分がある。2013 年から試行実施し、来年度からは全国の中学校で実践する。教科中心の教育から脱却し、生徒の全人的な育成を目指すための教育の革新である。自由学期制とは、全ての生徒が 1 学期間は学習を軽減し各種体験活動などを行い、全人教育を行うことである。生徒個人の夢を生かして、創意人間性教育を実施するものである。

自由学期制の事例としては、①生徒の適正と興味を生かしてクラブ活動を実施、②生徒が自分たちの

好きなこと、芸術や体育の実施、③試験の負担がないので、教科学習と連携した選択プログラムを実施、④生徒自らが自律的に放課後の活動を実施、などである。

自由学期制は従来の教育のパラダイムを転換することになるため心配する人もいる。政府もそれを把握しており、大学入試などの負担がない中学校のうちの1学期間だけ実施するようにしている。

今の韓国には「中2には触るな」という言葉がある。中学2年生は思春期の真っただ中であり、束縛を嫌う。そこで、そのような時に自由を与え、自分たちで活動を考える。入試の負担がない時に自分の進路を考えたり、自分の適性を認識したりするのが自由学期制の大きな利点である。来年からは全ての中学校で義務化される。この教育は創意性を育む教育であり、今後が期待されている。

最後に今後の課題について、韓国の教育革新は未来社会の発展について、創意性をどのように身に付けるかという点にある。今まで説明した創意人間性教育、自由学期制の成功事例をベンチマークとする方向で進めていければ成功すると考えている。韓国政府が欲を出しているのかもしれないが、児童生徒たちには優秀な学力と創意性との両方をもって欲しいと考えている。全ての学生がスティーブ・ジョブズになることを願っている。

質疑応答では、次のような質問が出た。

**Q:**自由学期制について、入試重視から活動中心へ変えるには授業のやり方を変える必要があったと思われる。現場の教員には戸惑いも多いのではないか。教員の反応はどうであったか。

(A-11 中川とも子)

A: 試行段階では、もともと情熱をもった限られた教員だけが試行してきた。または、教員が情熱的でなくとも校長が情熱をもっていた。韓国では校長の言ったことは何としてもやり遂げなくてはならないことであり、校長がやると言った場合、教員は何としても創意的な授業を考えなくてはならない。校長にとつても教員にとつてもやり遂げることでメリットがある。来年からは義務的に全ての教員がやらなければならないため、心配はある。中学1年生の1つの学期だけ行うが、その際教員は献身的な役割を果たすことになる。今年は2つの方法で行っている。この実践成果を広めたり、韓国政府が作成するマニュアルを配布したりすること

で推進したい。生徒たちには、1学期だけでも学習の負担が減ることから、大変好評である。

**Q:** ゆとり教育と似ているということだった。日本ではカリキュラムの内容が減ったが、韓国でのカリキュラムの変更はどうなのか。(B-14 三田村剛)

**A:** 自由学期制を行う期間は自分の進路を考え、体験学習をすることで組み替えられる。自由学期の期間にできなかった学習は他の学期に行う。6学期中の内一つが自由学期であり、他の5つの学期に自由学期の期間に勉強できなかった分を組み入れることになる。

**Q:** 各プログラムは学校に任せられているのか。学校だけでそのプログラムを実施できない場合はどうしているのか。(B-13 横田雅江)

**A:** プログラムについては、地域社会によって雰囲気や条件が違うので、学校の事情、教員の力量、道の実態に応じて作っている。例えば、ソウルなどの都市であれば、芸術の企画者と連携してプログラムができる。地方の場合は、鉱山や漁協などと連携できる。また、学校だけで実施できない場合は外部と連携している。地域社会、企業、地域団体、NGOなどとMOU(Memorandum Of Understanding)を締結して教育を行っている。例えば、韓国教育開発院もMOUを締結して学校を支援している。私は国際協力に关心があるので、教育ODAを理解してもらえるような教育プログラムを用意している。



尹鐘赫氏による韓国の教育事情講義(ユネスコ会館)

#### 〈韓国のユネスコ活動及びユネスコスクールの紹介〉

続いて、韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)教育チームの趙佑眞(チョ・ウジン)チーム長より、韓国のユネスコスクール(ASPnet)紹介があった。

##### ●ユネスコについて

日本も第二次世界大戦の経験があり、平和への教

育に関心があると聞いたが、韓国でも第二次世界大戦、朝鮮戦争の経験により、ユネスコに関わってきたという歴史をもっている。先週、韓国で地雷爆発の事件があり緊張状態であったが、今週は新たな展開があった。韓国社会では平和についての解釈の仕方は様々であるが、単に戦争がない状態だけでなく、社会の葛藤を解消し、朝鮮半島が統一されることを平和だと考えて教育している。人類社会共通の異文化問題、環境問題、非暴力的な論点などを含めて教育を行つてている。

#### ●ユネスコスクール(ASPnet)について

ユネスコスクールは、1961 年の 4 校から 2015 年は 408 校に増えた。最近、持続可能な開発のための教育（ESD : Education for Sustainable Development）拡大のため日本でも多くの学校がユネスコスクールに加盟し、2015 年 8 月現在 939 校が加盟していると聞いています。世界で 1 万校あまり、そのうち日韓で 15% を占めている。15% を占めているのだから、日韓のユネスコスクールの活動の中で、両国だけでなく世界的な友好を高められることを期待している。

ユネスコスクールのテーマのうち、日本では国際理解教育（EIU : Education for International Understanding）を多く実施していると聞くが、EIU は平和教育、環境教育など様々なものを含むものとして使われてきた。最近では EFA (Education for All)、万人のための教育が言われている。開発途上国で開発事業の一環として EFA が行われている。

ESD は国連で議決され広まり、2015 年世界教育フォーラムにおいて、世界市民教育の 1 つとして国連事務総長にも認められた。本年 9 月末に開かれる予定の国連総会において 2000 年にできた未来教育の新たなものを掲げることになるが、ここで ESD や EFA など新たな概念が提出されるだろう。このような成果の流れを背景に、2015 年韓国では 3 つのテーマを掲げている。

- ① 地域社会との協力の強化
- ② ユネスコスクール支援プログラムの多様化
- ③ 優秀活動校の国際交流や参加支援

KNCU では地方機関と協力し、自発的に進められるようにしている。日本では奈良や京都で世界文化遺産を活用して ESD を行つていると聞いた。韓国にも世界文化遺産が多くあるので、地域の文化を活用し、奈良や京都と連携して ESD の活動を行つていただきたい。昨年本プログラムで訪問した江原道では平和教育を

行つており、地域の特性を生かしたユネスコスクールの活動を行うよう支援している。

ユネスコスクールの支援プログラムとして、児童生徒がどのような分野に关心があるか、それを基にプログラムを作成することにしている。教員にも研修を実施し、教員や生徒への支援を行つてている。

優秀活動校への支援としては、ユネスコスクールへの加盟がある。韓国でユネスコスクールに加盟するためには 2 段階ある。まず国内のネットワークに加盟し、2 年間くらい活動してから国際ネットワークへ加盟するようしている。具体的には、韓国では 1 学期が 3 月にはじまるが、3 月に全国のユネスコスクールの校長や教職員を招き説明会を実施している。私立校では問題はないが、公立校では 5 年くらいで教員が異動するため、ユネスコスクールに加盟していても参加意欲が減退する場合がある。そこで、全国大会を開くことで、校長や教職員の参加意欲を高めている。また、地方や地域にある学校の校長や教職員が活動プログラムを作成し、それを KNCU が確認し、予算や活動への支援を決定している。

ユネスコ青少年地球市民プロジェクトとして韓国で盛んなのは、レインボープロジェクトというものである。7 つの色から 1 つまたはいくつかを組み合わせて、KNCU に企画を提出する。代表例としては、漢陽大学師範大学附属高等学校の「2013 ともに生きる社会のために」、ハンソル中学校の「都市農民プロジェクト」、虎元（ホウォン）小学校の「持続可能な開発のためのホウォン人のユネスコデー運営」、保山（ボサン）小学校の「MCF (Multi-Cultural Friendship) プロジェクトで作る 5 色のハーモニー」などがある。

教員交流プログラムでは、2001 年以降 2,000 人以上が交流に参加してきた。また、ユネスコ教員海外研修として、最近関心が高まっているネパールに韓国の教員が行った際には、ネパール地震の募金活動を行つた。

日韓はアジアにおいてユネスコ活動をリードできる存在である。開発途上国に対してユネスコ活動を通じて日韓が支援できるようなことを考えていきたい。KNCU では、韓国の国立公園管理公団、エネルギー公団、青少年活動振興院など様々な機関と組んで、ESD についてのプログラムを実施している。

かつてユネスコでは、政治、軍事、外交だけでは和平を守れないということで教育に力を入れてきた。ユネスコの設立初期は無知・偏見・誤解などをなくすため、理解するための学習が主であった。次に実践、行

動するための学習として、持続するための学習へと流れが移った。EIU や環境教育、ESD が登場し、ともに生きるための学習、変化するための学習が行われている。教育を受けたら何か変化がなくてはならない。最近は変化するための教育に力が入れられている。

ユネスコスクールは教職員に重きを置くだけではなく、子どもたちのためのものである。

日中韓の教育では正解が重視される傾向にある。ユネスコ活動によって今後目指しているのは、正解はまだ存在していないが、児童生徒が協力して、課題を解決していくようなプログラムである。

今、ユネスコスクールでは、

- ①平和や持続可能性のための変化
  - ②平和と持続可能性のための教育
  - ③平和に行く道はない、平和がその道である
- という事を大切にしている。

ESD をしっかりと実践することが大切である。

(泊江市教育委員会 統括指導主事 細谷俊太郎)



趙佑眞氏による韓国のユネスコスクールの紹介

(ユネスコ会館)

### 【参加者の感想】

**楨田雅江**…………趙佑眞(チョ・ウジン)教育チーム長が話された、韓国における平和の概念が非常に印象的であった。戦争がない状態が平和なのではなく、世界の葛藤がなく、皆が安心して暮らせる社会を平和だとおっしゃっていた。韓国が平和教育に対して強い思いをもっていることがよくわかった。また、平和という観点も、自国の平和という狭い視野ではなく、世界の平和という大きな視点で考えられていくことに感銘を受けた。これこそ、ESD で伝えていきたい地球市民としての視点だと感じた。

**新子慶行**…………韓国の教育について、またユネスコの概要について詳しく知ることができた。社会がめま

ぐるしく変容する中、教育の目的や方法も柔軟に修正していくかなければいけないと感じた。

## 全羅南道教育庁

(A グループ)

8月27日

代表者名:張萬彩(ジャン・マンチェ)

特色:「夢を育む教室」という教育ビジョンを掲げ、以下の5大施策を打ち出している。**1.学びが楽しい学生、2.情熱を持って教える教員、3.皆が幸せな学校、4.皆が1つになる教育コミュニティー、5.児童生徒を優先する教育行政。**また、重点課題として、読書・討論授業の活性化や高校教育力の向上に力を入れている。

### ①あいさつ

はじめに、羅東柱(ナ・ドンジュ)全羅南道教育庁教育振興課長が、韓国政府日本教員招へいプログラムとして、両国の懸案を理解する機会を与えてくれたユネスコに感謝する。また、同プログラムに参加された教職員や文部科学省からの訪問団を心から歓迎する、と述べ訪問団を歓迎した。

羅課長は、**21世紀は、コミュニケーションを通じて全人類の幸せを目指す時代である。**未来的な教育を担う教育者は、意思の疎通と理解を図ることが必要であり、日韓の教職員が交流し、両国の懸案について理解を促進する本プログラムは有益である。各学校で ESD を教育理念に据えて取り組み、両国の教職員がネットワークでつながることで、両国の明るい未来が期待できる。日本からの訪問団を迎えて、本道の優秀な実践を紹介したいと考えている。**2002年**年に始まった、本プログラムが益々発展し、直面している教育課題を克服するきっかけとなるよう、滞在中は健康に留意し、幸せな時間を過ごしてほしい、と述べた。

次に、訪問団を代表して、長野県教育委員会教学指導課の春原秋夫グループ長があいさつした。

春原グループ長は、今回の訪問には日本各地の小・中・高等学校や教育委員会で、教育実践や教育施策に携わる教職員が参加している。韓国では、英語教育や ICT の推進といった優れた実践がなされていると聞いている。これらの具体的な取組に触れ、是非、学んで帰りたいと考えている。また、子ども達の「生きる力」をのばすための教育施策について、お互いに意見交換をしたいと思っている。

今年は、日韓国交正常化 50 周年の節目の年でもある。互いを理解し、未来につながる交流についていくことを願っている、と述べた。

#### ②教育概要説明・事業説明

あいさつに続いて、全羅南道の教育概要説明の DVD を視聴した。DVD では、地域拠点高校、専門高校、一般高校の教育について、また授業優秀教員の表彰制度、行政業務を削減し専門性を向上するためのバックアップ、農山漁村教育、地域ぐるみの教育活動(地域社会や家族と共同しての学校作り)、エコスクール、差別のない教育福祉、教育長窓口の設置などについて説明があった。

事業説明では、韓民族の足跡を追い、共同体意識を育成することを目的に実施される、「船上虹色学校」で、毎年 200 名の中学生が日本を訪問することや高校生を対象とした読書討論列車学校などを実施しているとの説明があった。

#### ③教育振興課による施策説明

その後、教育振興課の施策説明があった。同課は、保護者支援、虹色学校教育、幼児教育、国際教育等を行っており、5 チーム 28 名で構成している。同課の主な施策は以下である。

- ・保護者の学校参加事業やモニタリングの実施
- ・幼児教育として、3~5 歳の幼児プログラムの支援
- ・特別支援教育 8 校と病院学校 2 校の運営
- ・国際教育チームでは、外国交流、国内事業の支援、外国語会話授業のサポート
- ・青少年体験プログラムや教員の海外派遣

#### ④質疑応答

続いて、質疑応答が行われた。

##### 〈日本側からの質問〉

Q: 保護者サポートチームとあったが、具体的に保護者にどんな支援を行っているか。

(A-24 岩佐敬昭)

A: 保護者の教育的関心は高いが、学校への保護者の参加が少ないことが課題。そのため、保護者への研修等、保護者への教育を中心に支援している。

Q: スクールカウンセラーの配置状況及びスクールソーシャルワーカーの状況について詳細をお聞きしたい。(A-09 宮田里枝)

A: 全ての学校 825 校で教育相談を受けられるシステムになっている。2 つのタイプがあり、中学・高等学校に配置されている相談員は、生徒からの進路相談等を中心に相談業務にあたっている。また、教育庁に交代制で配置しており、ウィーセンター(Wee Center: 相談室)に相談員が入り、学校生活の悩みをサポートする。

Q: へき地への優秀教員の配置の工夫について。日本では、学校の統廃合が進んでいる。小規模のへき地校を大切にしようとする施策には、どのような意義や効果があると考えているか。

(A-11 中川とも子)

A: 地域性として島が多いため、短期間の異動を繰り返すと教育の質が安定しない。そのため、10 年以上異動なしで勤務できるシステムを模索している。その他、小規模校を生かす支援プログラムを立ち上げて、進めているところである。へき地校を守る施策は、児童生徒を守るだけでなく、地域から離脱する住民を防ぐことにもつながる。学校を守ることで地域を守る、という理念にもとづいている。現在、農漁村の学校保護のための予算を確保し、放課後教育等を充実できるよう、国会の法の制定も打診している。

Q: 教員の専門性を高めるために行政業務を削減するとは、具体的にどのようなものか。

(A-18 田中福人)

A: 教員が生徒と一緒に過ごす時間を増やすことと、質の高い授業の実践の確保を目的として実施している。具体的には、業務従事者として、日常的な事務業務を担当する人員を確保する。また、収益性の落ちるプログラムを 2 割ずつ削減するなど、業務方法のプロセス改善や不要な決裁、重複するプログラムを削減できるよう支援している。

Q: 保護者への教育や家庭教育支援の具体的な内容について、また 6 か月の英語研修等の対象者はどのように選んでいるのか。(A-12 中嶋たや)

A: 保護者は共同体として学校を受け入れる素地が薄かった。学校を中心に生徒の問題を解決するため、教育共同体という理念が広がっているが、保護者を共同体として受け入れるには、そのための教育が必要だ。32 機関で支援プログラムを運営しており、具体的には、保護者の役割訓練や安全教育指導、進路指導、食育といったことを行う。保護者に来てもらうプログラムは参加率が低いので、こちらから足を運んで研修する形も取り入れている。日本

でも、教員の専門性を高めるためのプログラムがあると聞いている。全羅南道の先生を海外に派遣するプログラムには、**2か月間と1年間**のプログラムがあるが、英語に限っていない。

**6か月**の英語研修は英語科に限定しているが、学習研究生は全教科の教員が対象である。学習研究生は、自発的にテーマを決めて、海外で研究するシステムであり、その他、全科目の教員を対象とした**6か月**の短期プログラムもある。

#### 〈韓国側からの質問〉

Q:学校における評価システムについて知りたい。

A:小学校**6年**と中学校**3年生**の対象とした全国学力学習状況調査のこと。この結果について、地域別で学力の推移や課題をみるとことにより、施策に生かしている。毎年、算数・数学、国語の**2教科**で実施しており、理科は**3年に1回**の実施である。

(A-23 西川太郎)

⑤最後に、羅教育振興課長と春原グループ長が記念品を交換した。

(和歌山県教育委員会 指導主事 宮田里枝)



羅東柱全羅南道教育庁教育振興課長を囲んで  
(全羅南道教育庁)

#### 【参加者の感想】

春原秋夫…………教育庁では、学校に業務担当者を**2名**配置し、教員の行政業務を軽減して授業に打ち込める環境を整備するとともに、親としての役割を教育するため、保護者の職場や家庭を訪問するプログラムを実施している。いずれの施策も、日本の教育にとって必要なものであり、できるところから採り入れていければと思う。

田頭賢太朗…………韓国における教育の在り方や、目

指している方向性を、解りやすくプレゼンテーションして頂いた。特に興味深かったのは、農山漁村の小規模校に対する施策だった。日本では採算のあわない小規模校は統廃合という「合理化」が進められているが、全羅南道では学校が無くなると、その地域自体が衰退するとして、農山漁村の学校を維持していた。教育・学校こそが地域社会の中核であるという矜持を感じられた。今の韓国がそれぞれの地域で何に力を入れて教育しているのかということを実際に知ることができた。

和田恵子…………今回、全羅南道教育庁でお話を聞くことができて本当に良かった。特にすばらしいと思ったのは、教員の事務的な業務の軽減施策、保護者への教育、農山漁村教育への支援である。私も、業務軽減してもっと生徒たちと接し、授業の準備をする時間を増やせたら、どんなによいだろうと思った。さらに、保護者への教育支援についても必要性は感じていたが、仕事で忙しい保護者に対してどのようなことがなされているのか、もっともっと知りたいと思った。また、私は初任教師がへき地の島の高校であったので、農山漁村で**10年**勤めてくれる教員という発想も、とても納得がいく施策であった。交流した順天八馬高等学校の生徒たちは、口々に「自分たちの町は穏やかで、住みやすい町だ」と自信を持って話してくれた。全羅南道の教育が浸透している証拠だと感じた。私も、生徒が自分の町や国のこと愛し、誇りを持つような教育をしていきたいと改めて感じた。

## 全羅南道教育研究情報院

(A グループ)

8月27日

代表者名:金炳佑(キム・ビョンウ)

特色:全羅南道教育研究所情報院(JNEI)は、全羅南道教育庁に属し、1,384の学校と22の教育支援庁、13の直属機関の電算情報を管理する。全羅南道のすべての教員と生徒のための情報化教育を支援している。教育現場(学校および教育機関)に教育研究や教育の情報サービスを支援、提供するために設立された機関である。院長のもと、教育研究部・教育情報部・総務部・全南教育政策研究所の4つの部署から構成される。施設は、地下1階・地上6階の7階建てである。

### ①訪問内容

カンファレンスルームに入室後、全羅南道教育研究所情報院院長のク・ヒテ氏よりあいさつがあり、次に概要説明の映像を視聴した。映像が終わると、教育情報部長のイ・ヒヨニ氏より、概要説明があった。その後、約 200 台のコンピューターが 5 つの部屋に配置されたコンピュータールームやサーバー室を見学し、最後に記念写真を撮って、訪問を終えた。

### ②JNEI で行われていること

JNEI では、教育研究力の強化の場、教授・学習の支援の場、そして、教育政策開発の場として、新しい教育方法を必要としている児童生徒、教職員、保護者がいつでもどこでも多様な教育情報を活用できるよう、また、教育研究や情報の支援を通して教育現場の人材を育成しようとしている。詳細については、以下の通りである。

#### 1)充実した教育課程の運営を支援するために

- 1.教育現場を改善する学校評価を推進
- 2.現職の研究員制の運営を通じた教科用図書ならびに教育課程の支援、資料の開発・普及
- 3.教育課程・授業・児童生徒中心の研究学校の運営と指導
- 4.教職員の専門性の伸張や教育風土の情勢などの推進

#### 2)個々に合わせた教授法・学習を支援する

- 1.個に合わせた教授法・学習資料の提供で授業の改善を支援
- 2.快適な e-Learning コンテンツ開発、普及で学力の向上を支援
- 3.創意性ある教育情報化の研修を通じた教授法・学習方法の改善を支援
- 4.農山漁村中心のサイバー学習の運営ならびにオンライン授業の活性化
- 5.情報分野の人材発掘や創意性ある人材育成を支援

#### 3)現場密着型の教育政策の研究・開発をするため、全羅南道教育政策研究所を運営

- 1.全羅南道教育の懸念課題と主要政策に対する総合的かつ体系的な研究
- 2.全羅南道教育の未来の力量強化に向けた中・長期的な発展法案を作成

#### 4)対象者中心の教育行政サービスをするために

- 1.最適な情報システムの構築と安定した維持管理
- 2.学校ホームページのウェブホスティングシステム運営による教員の業務軽減
- 3.全羅南道スクールアプリサービスを通して教育に対する保護者の参加を誘導
- 4.地方公務員会計システムの研修強化ならび情報化実務能力の向上

### ③2015 年 JNEI の主要業務の要約

#### 1)教育研究部

- 1.学校評価推進: 828 校(小・中・高・特別支援学校)
  - ・定量評価、選択定量評価ならびに定性評価、評価の結果後のコンサルティング
  - ・学校評価、各地域別の研修会実施
  - ・学校評価の結果を還元、学校教育の質を高める

#### 2.現職の研究員制の運営: 15 課 112 人

- ・専門家の諮問委員 46 人の組織運営
- ・全羅南道教育の質的水準の向上並びに教員力量の向上

#### 3.教科用図書・教材開発・普及: 4 課 9 チーム

- ・小学生「全羅南道の生活」、「楽しい 1 年生はじめの一歩」、小・中学校用「保健」
- ・効率的な教育課程の運営を支援

#### 4.教育課程の支援資料の開発: 7 種 7 チーム

- ・小学校用進路資料、小学生用読書討論の学習資料、中学校自由学期制運営の資料、中学 3 年数学ヒストーリーテリング、国語科の習熟度別学習資料の開発など
- ・多様な教育資料の開発・普及で現場での活用度向上をはかる

#### 5.研究学校の運営と指導: 小・中・高校 97 校

- ・計画・実行・報告・段階別による研究学校の運営指導と評価

#### 6.定期刊行物 2 種: 全羅南道教育、授業研究

#### 7.文献情報室の運営: 1 室

#### 2)教育情報部

- 1.全南教授学習支援センターの運営: 48 人
  - ・品質管理要員や評価項目の開発要員を運営
  - ・全南教授学習支援センターのプラットフォーム、コンテンツ機能の高度化

2.教員教育情報化の研修運営:2分野、23課程、  
3,650人

- ・教員のための教育情報化の研修を運営  
(集合=off line、遠隔=on line)
- ・研修、学習管理システムの開発

3.全羅南道サイバーファミリースクールの運営:2,500余り  
のクラス

- ・農山漁村中心の学級運営、自主学習クラスの  
活性化
- ・オンライン学習の運営:約 200 クラス

4.全羅南道情報英才教育院の運営:3過程、6  
クラス(初級・中級 各 90 人)

- ・創意的なプログラムの運営でグローバルな人  
材を育成

5.多様な情報関連大会を運営:2分野、8種  
・ITエリートの育成とIT関連大会で生徒ならび  
に教員を表彰し激励

6.教育映像資料製作室(Media Center)の運  
営:2室

- ・教育映像コンテンツ(Educational Movie  
Contents)開発 216 本
- ・全羅南道教育 News 製作 48 本

3)全羅南道教育政策研究所(Jeonnam Institute  
of Education Policy)

1.全羅南道教育政策研究課題の遂行:12課題 1,  
500部

- ・虹色学校の運営成果の分析など現場と密接な  
課題の遂行

2.教育政策研究の関連事業を推進

- ・全羅南道教育問題&政策を発刊 6回
- ・教育希望フォーラム 2回
- ・教育費軽減教育アカデミー1回

4)総務部・行政情報科

1.情報システムの構築・管理:3分野 14種

- ・大容量サーバーの管理、技術支援
- ・教育・校務ポータルサーバーシステムの運営、  
活性化

2.学校ホームページのウェブホスティングの運営と  
サポート:847機関

- ・現場中心の様々な教育行政サービスの提供と  
活用

3.地方公務員会計システムの研修で IT 実務能力  
を向上:7課程

#### ④施設見学

・6階:コンピューター室

5室にコンピューターを置いてある。生徒や  
教職員が利用できる。

・4階:サーバー室

傘下機関バックアップのサーバー室。

・2階:映像資料作成室

授業で活用できる映像や資料を作成できる  
部屋。様々な機器が設置されている。

(奈良教育大学附属中学校 教諭 中嶋たや)



ク・ヒテ院長によるあいさつ(全羅南道教育研究情報院)

#### 【参加者の感想】

**琳慎一郎**…………この施設見学でまず驚いたのが、情報機器の環境整備の充実ぶりである。各教室に設置してあるパソコンは、すべて1つのサーバーにつながっており、どこで使用しても同じ情報や学習資料を提供できるため、教育の平準化が図られるのではないかと感じた。またeLearningのコンテンツ開発や普及が学力向上に貢献している点が魅力的だった。さらに韓国政府がバックアップしている点が日本との相違だと感じた。

**内海まゆみ**…………「教育は未来のための投資」を高らかに謳い、①教員の指導力向上のために教員研修への支援、教員の行政業務支援②農山漁村教育への支援③親の役割教育のために保護者への支援④サーバーによる教育情報の一括管理等の施策について伺った。目から鱗が落ちるようであった。

**田中福人**…………ICT教育に力を入れていることは事前に耳にしていたが、それを象徴する施設であったように思う。日本の学校の中でも、特に岡山県の学校はICTの活用が遅れているので、その違いに大変驚いた。学校現場がICTの活用に積極的

に動くだけでなく、教育機関の強い後押しがあつてこそ、韓国の ICT 教育が現在のような高水準に達していると感じられた。

## 京畿道教育庁

(B グループ)

8月 27 日

代表者名：第二副教育長 ムン・ビヨンソン

特色：京畿道教育庁の学校を所管する教育行政機関。本教育庁には教育長が 1 人、他の庁舎に 2 人の副教育長がいる。北部庁舎は現場支援、教育共同体支援を行い、南部は行政事務を行っている。庁舎内には障害者の職業トレーニング用のカフェやセミナールーム、庁舎裏にはカフェやレストランがありとても新しく綺麗な建物である。

はじめにイ・ソクテ教育次局長より、歓迎のあいさつがあり、訪問団の皆さまを歓迎し、日韓の教育のネットワークの構築を祈念する。韓国にも解決すべきたくさんある問題があるが、それらを解決するためにいろいろな活動を通して解決することができるよう努めている。ESD の実現のための日韓教育交流の窓口として推進役になりたいと思う。皆さんのがその先駆者となることを望む、と述べた。

続いて、訪問団を代表して樋口団長があいさつし、3 日間韓国で韓国の教育・生活・自然文化を学ばせていただいた。私たちは日本全国から集まった教職員だが、韓国の教育から学ぼうという気持ちは 1 つだ。京畿道を通じて韓国を学ぶことをうれしく思う、と述べた。

続いて、学校教育政策課政策官のパク・オンギュ氏が京畿道の教育概要を以下のように説明した。

これまでの競争を目的とした競争教育は青少年を踏みつける結果となつた。そこで 1995 年 5 月 31 日から韓国の教育改革は始まつた。セウォル号フェリー沈没事件以降、革新教育(教育改革)が社会から求められ加速している。革新教育では競争から人中心の教育へ、学校は勉強するところから人と人との関係から学びと成長の場への転換を図つてゐる。児童生徒を自律した主体的な人間と見るため、授業時間についての考え方を変え、これまでの入試準備としての問題を解く授業から、個々人の考えを深める時間にしなければならない。そのためには教員中心の授業か

ら生徒中心の授業への転換を図らなければならないが、容易ではないため、さまざまな取り組みを行つてゐる。一番は教室の革新、つまり教員と生徒が出会う場の革新である。そのためには教員の心の革新が大事である。そのためのモデル学校である革新学校を指定し、先行実践を行い全国に広める取り組みを行つてゐる。革新学校の取り組みに共感し革新教育に取り組む学校のことを革新共感学校といふ。京畿道での革新学校は「幸せな学校」を目指す。「幸せな学校」になるためには知的満足、つまり大きな喜びを得られる学習が行われなければならず、大きな喜びを得るために授業の仕方を変えなければならない。具体的には教育課程の運営を変えるが、そのためには教員の自発性を刺激しなければならない。そのためには校長の民主的リーダーシップが重要であり、学校の民主主義が実現されなければならない。京畿道では話し合いを中心とした民主的な学校運営がなされている。

また教職員・児童生徒・保護者の 3 者は倫理的教育共同体である。この中で教職員は近年個人主義になつてゐる。そこで京畿道では「会議のときに傾聴する」、「貧富や学力で生徒を差別しない」等の倫理規約を作つてゐる。

さらに民主的な学校運営のため学校文化を変える取り組みとして、専門的学習共同体を作り、授業・評価・生活指導について教職員の共同研究を通して授業の仕方などについて話し合つてゐる。京畿道教育庁はこれらに取り組む革新学校を支援するのが役目であり、これらの取組みを始めて 6 年が経つた。

この 6 年間の取組みにより、全体の 9 割が革新共感学校となつた。革新共感学校では学校民主主義の実現のため、学校運営共同体が学校の基礎を作り、倫理的な取組みとして生活共同体が朝のあいさつの実践(指導をせず、温かく児童生徒を迎える)、教室では児童生徒に敬語を使う、賞罰をなくす、教職員も生徒も自ら約束事を決めて守るなどの取組みを行つてゐる。

京畿道教育庁は、革新共感学校へ行政支援として校長・教頭指導を行つてゐる。学校長地区支援協議会には教育長や奨学官(日本の指導主事)も参加し、話し合いや討論を行つてゐる。

〈日本側からの質問〉

Q: 革新教育による具体的な変化はあるか。

(B-11 小出一也)

A: 競争教育から授業への参加が図られている。それ

により幸福度が向上し、学力も向上している。

**Q:**競争教育から人間性の向上を目指す中で、入試制度の変更はあるか。(B-03 青鹿吉洋)

**A:**入試制度の改革は国の仕事である。京畿道教育庁としても入試制度改革の研究・検討会は行っている。人物中心の教育に価値観を変えられないことが一番課題である。依然、競争はあるけれども人物中心の教育は有効であり、ぜひ革新教育の現場を見ていただきたい。

(多摩市立多摩第二小学校 教諭 佐々木哲弥)



革新教育について説明を受ける訪問団(京畿道教育庁)

#### 【参加者の感想】

**池田康人**…………「革新教育」への取組が印象に残りました。教員中心の授業から子ども中心の教育への転換。私が所属する学校でも、「授業の主役は子ども、準備の主役は教員」を合言葉にしています。ですので、韓国も日本も同じ教育理念であることに感銘を受けました。

**神藤恭光**…………革新教育を施す教員もまた、厳しい競争教育を受けてきた人なのか、ということが知りたかったです。今回あの大きな教育転換にあたり、教員への研修や義務化していることなどはあるのか、またそれはどのような内容なのかお聞きしてみたかったです。韓国の教育改革について講義していただきました。韓国の教育は日本がやろうとしている教育と共通点があると感じました。大学入試のための、問題を解くためだけのトーク&チョークの授業から、児童生徒主体の教育への変換を行っていると感じました。違うところは、自由学期制を取り入れているところだと思います。中学校1年生の1学期間を使って、日本でいう総合的な学習を取り入れ、生徒に将来にやりたいことを考えさせることです。果たして、日本の中学校1年生で同じ事をして、将来のことが考えられるのか、また

残りの2年半で中学の課程を詰め込まれるか、難しいことだと感じました。韓国は、大学入試制度は変わっていません。日本は大学入試制度を変えようとしています。日本の方が少し前を進んでいるのかもしれません。でも、人を育てようとしていることは日本も韓国も同じだと感じました。

## 日韓教育交流サミット

8月30日

**代表者名:黄祐呂(ファン・ウヨ)**

**概要:** 日韓国交正常化50周年を記念して、日韓教育交流サミットが釜山市にある海雲台グランドホテルレスカイホールで行われた。釜山国際高等学校の生徒や日本教職員招へいプログラム参加者による祝賀公演に始まり、大韓民国副総理兼教育部長官の黄祐呂(ファン・ウヨ)氏、文部科学省大臣の下村博文氏によるあいさつの後、教育交流の成果と意義について、両国の代表者3名ずつのパネルディスカッションが行われた。

はじめに大韓民国副総理兼教育部長官の黄祐呂(ファン・ウヨ)氏があいさつし、過去の悲劇を繰り返さないため、日韓は歴史の事実を公平に受け入れる必要がある、日韓両国の学生が正しい歴史認識を持つことが大切である、と述べた。次に文部科学大臣の下村博文氏が、日韓は最も身近な隣国として、政治・経済・文化などあらゆる分野で交流してきた。今年は日韓国交正常化50周年という節目であるとともに、新たな未来を切り開くスタートの年であると思う。日韓相互に理解を深め、互いに貢献し合う中で、教育交流はそれらの礎になるものであり、ますます重要である、とあいさつした。

次に、祝賀公演があり、釜山国際高等学校の生徒17名によるオーケストラが、「アリラン」や「久石譲メドレー」などを演奏した。続いてオーケストラの伴奏のもと、日本教職員のBグループ23名が、「アルムダウン・セサン(美しい世の中)」を韓国語で披露した。

公演が終わると、黄長官および下村大臣と合唱を披露したBグループの教職員、釜山国際高等学校の生徒が記念撮影を行った。

続いて、パネルディスカッションがあった。パネラーは、日本側韓国側とも、大学教授、教職員交流プログラム参加者、キャンパスアジアプログラムを通して日

本または韓国への留学を経験した学生の 6 名であつた。訪問団からは、関東国際高等学校の田頭賢太朗氏が教員交流プログラム参加者代表として参加した。

田頭氏は以下のような発表をし、この教職員交流プログラムの意義や成果、同校での韓国語学習状況を紹介した。

#### 【田頭氏の発表】

関東国際高等学校では、2008 年と 2010 年に韓国教職員招へいプログラムで韓国教職員を受け入れた。本校での韓国語を中心とする授業見学や教育に関する質疑応答や活発な議論交わされ、特に、韓国の先生方が日本の教職員の職場環境に強い関心を持っていたことが印象的であった。

関東国際高等学校は、普通科と外国語科と演劇科があり、外国語科は英語コースと近隣語コースに分かれる。近隣語コースは、中国・韓国・タイ・インドネシア・ロシア・ベトナムの 6 つの言語から入学時に選択する。韓国語コースは各学年 40 名程おり、1 週間あたりの韓国語の授業時間数は、1 年生で 5 時間、2 年生で 6 時間、3 年生で 4~10 時間である。韓国語の教員として、ネイティブ 2 名、日本人 1 名がいる。

交流の柱に、30 日間の韓国短期留学があり、2 年終了時の春休みに、ソウルの現地提携校での授業の他、史跡巡りや地元高校生との文化交流会を行う。事前学習として、韓国の歴史や文化について学び、民族楽器の練習などを行っている。また、韓国の高校生のホームステイとして、1 週間程度の受け入れをし、小旅行やフィールドワークなどにより同世代間の相互交流を図っている。

本校の交流活動は韓国語を習得に寄与することが大前提であり、成果は語学力の向上として表れる。韓国に関してバックグラウンドのない生徒も、韓国語技能検定 5 級取得や各種作文コンテスト、スピーチコンテストに参加し、駐日韓国文化院主催の韓日交流エッセイフォトコンテストの韓国語エッセイ部門で最優秀賞を受賞した。

また、交流の中で、良い意味で日韓の関係をニュートラルにとらえることができるようになったことがより重要だと考える。本校生徒は、韓国を単なる国名ではなく、それぞれ個性を持った友人がいる国と捉え、韓国と日本を相対化して見ることができるようになった。こういう人材が数多く育つことで、将来、韓国と日本の関係は必ず生産的なものになると見える。

最後に、韓国と日本の歴史認識に関する相違は避

けて通れない問題でもある。ことあるごとに、両国の歴史認識の相違が問題にされるのは周知のことだが、韓国・日本の高校生がお互いの相手の国の歴史をどのように認識しているかを議論する場面を設定したい。お互いの教科書の読み比べなどから、若い世代のお互いの歴史認識を正しく知ることで理解が深まる。

パネルディスカッションの後レセプションがあり、訪問団は過去のプログラム参加者や釜山国際高等学校の生徒と軽食をとりながら、お互いの交流を図り、親睦を深め、今回のプログラムを締め括った。

(奈良教育大学附属中学校 教諭 中嶋たや)  
(ノートルダム清心学園清心中学校・清心女子高等学校 教諭 田中福人)

#### 【参加者の感想】

田之上寿宏…………パネルディスカッションでキム・サンジョン教授から、「日韓には共通点がある。それは歩いて外国に行けないことだ。しかし、他の国は陸続きで簡単に出国できる。ヨーロッパなどは容易く移動でき多様な文化に接することができる。だからこそ、我々日韓にはスキンシップが大切であり、関係がよくない時こそ教育の交流が大切なのだ。」とのコメントに目から鱗が落ち、交流の必要性を再確認した。また、ファン元教諭からは、以前訪問した岡山のユネスコスクールで行われた地域の素材を通して、問題解決を図る ESD が行われているのを見学し、このプログラムを通して様々な成果を得ることができたことが紹介された。私たち現場を預かる教員は、このような教育実践を、交流を図りながら進めていかなければならないことも再確認した。



教育交流サミットで意見を述べる田頭氏  
(左から 2 人目、海雲台グランドホテル)



下村文部科学大臣(2列目右から8人目)、黄祐呂総理兼教育部長官(同9人目)を囲んで(海雲台グランドホテル)

## 3. 学校訪問

### A グループ

龍江中学校

順天旺之小学校

順天八馬高等学校

### B グループ

ソウル大学校師範大学付設女子中学校

鞍峴小学校

京畿自動車科学高等学校

**A グループと B グループに分かれ、学校訪問を行った。**

A グループはソウルと全羅南道にて、B グループはソウルと京畿道にて各 3 校を訪問し、活発に授業見学や教職員、児童生徒との交流を行った。

### 龍江中学校

(A グループ)

8 月 26 日

代表者名: 韓奉熙(ハン・ボンヒ)

特色: 1968 年に開校した都市型男女共学校。教育課程・修学旅行・修練活動の優秀校であり、自由学期制度の有功校として表彰を受賞。様々な外部協力機関と連携したクラブ活動を実施し、台湾の明華中学校との国際交流活動、オーケストラ活動、多様なスポーツクラブを実施し、体力増進と共に、人格教育を目指す。また、ユネスコスクールとして地球市民教育(GCED)活動に参加している。色々な形の進路探索活動を通じて、生徒たちの夢と才能を啓発し、保護者たちが学校活動に積極的に参加している。

学校に到着した一行は、日本語の歓迎の横断幕が校門に掲げてあるのを目にして、温かい気持ちになった。その後、韓奉熙(ハン・ボンヒ)校長の歓迎の言葉に続いて本プログラムの担当教職員や学校の概要が紹介された。龍江中学校は約 47 年の歴史があり卒業生は約 2 万人に及ぶ。優しさを大切にし、生徒の自主性を重んじた教育活動を展開している。同校は、生徒数 800 名・31 クラス、教職員は教員 57 名、クラブ活動支援員等 31 名、

行政管理職員 17 名、他給食職員を合わせ約 100 名である。

続いて春原秋夫グループ長より、訪問団が紹介され、日本における韓国の教育事情の認識や、龍江中学校で行っている国際交流活動やユネスコスクールの活動について賞賛の辞が述べられた。また、日韓国交正常化 50 年の節目の大切な時期に招いていただいたことに感謝するとともに、今後も互いの理解を深めていきたいと述べ、記念品を交換した。

学校紹介では、同校グローバルリーダーのキム・ソン氏が学校の特色について、カリキュラムに工夫があり、生徒の能力に応じて授業を 3 つのコースに分けて行っていること、また個別学習が充実していることを紹介した。また、進路模索博覧会という時間を設定し、外部からゲストティーチャーを招いて話を聞いたり、高校入試のための面接や入試説明会を開いたりしていること、自主的活動も行っており、学校暴力予防委員会の結成や、自発的・民主的な運営で選挙も行っていることについても説明があった。国際理解教育(EIU)については、例えば海外の学校と姉妹校締結し、インターネットで台風被害への支援をしたり、海外から先生を招いたりして、海外の文化を学んでいること、ICT を積極的に導入し、校内には Wi-Fi 環境が整備されていること、放課後教育が充実しており、受験科目以外にも音楽などの英才教育も行っていることが説明された。さらに、特色の 1 つとして、保護者や地域住民も参加できる授業を設けており、学校行事に関しては生徒の自主企画の行事があり、合唱大会・学年祭等があること、毎年 10 月に行う学園祭は、生徒の自主企画であり、学園祭は、クラスやサークル等で参加することが紹介された。

続いて日本教職員と生徒との懇談会があり、学校における国際交流について、塾や放課後学習についての質問が多く飛び交った。その後、校舎案内及び授業参観が行われた。学内には、トロフィーが多く飾ってあり、中には、教育庁から優秀校として同校が表彰された際に贈られたトロフィーもあった。美術の授業では、生徒はグループになり、折り紙を用いた制作に励んでいた。また、家庭科の授業では、電子黒板を用いて授業を行っていた。電子黒板に関してはすべての教室に完備されていた。韓國の中学校の 3 分の 1 の学校には教育相談員が常駐しており、同校の相談室にも教育相談員が常駐していた。相談は、生徒を中心として保護者も対象としている。相談内容は、友人関係や学習の悩みなど多岐に渡る。昼休みは開放しており、生徒は自由に出入りできる。理科の授業は、生徒 1 人ひとりが PC を用いて授業に臨

んでいる。訪問当日の理科の授業は理科室ではなく、スマート教室と呼ばれるPC専用の教室で行っていた。スマート教室の使用に関しては、4月にオリエンテーションを開き、全教員が適切にPCを使えるようにしている。体育の授業は、体育館にて参観した。女子生徒がダンスの練習をしていた。体育館にはエアコンが4箇所装備されていた。また、室内であるが外用靴で入って良いことになっていた。また、昼食は給食室で全員が食べることになっている。音楽室はオーケストラ部が使用しており、現在68名で活動している。楽器に関してはほとんど自分の楽器である。部活動はあるのだが、参加する生徒が少ないとのことである。訪問の最後には、図書室にて日本人教職員と韓国人教職員の懇談が昼食を兼ねて行われた。

## &lt;日本側からの質問&gt;

Q:龍江中学校は他の学校より行事が多いと感じた。行事を通して大きく変わったと思ったことは何か。  
(A-11 中川とも子)

A:台湾の学校と交流することで、他国の文化と触れ合うことができた。また、文化祭を通じ、他の生徒に紹介することで、他国の文化に触れることができたのがよかったです。

## &lt;韓国側からの質問&gt;

Q:国際交流はどのような活動を行っているか。  
A:小学校では、総合的な学習の時間に地域在住の外国人の方から踊りや食文化を学んでいる。姉妹都市交流を行っており、手紙などの交換も行っている。  
(A-14 野木雅生)  
中学1年で留学生を招いて相互文化の紹介を行ったり、夏休みに日本から生徒が公州(コンジュ)に行ったり、冬に公州から招いたりして交流している。  
(A-12 中嶋たや)

Q:大学入試について、韓国には修能試験と随时試験の2つの試験がある。日本にも一斉試験があるのか。  
A:日本では、AO入試として、面接や小論文等による試験もある。大学が個性を重視しているのと、少子化が原因である。韓国と同様の試験として、センター試験という一斉テストも実施されている。また、2021年から入試制度が変わる予定であり、これは、高校在中に大学入学のための試験を行うものである。  
(A-16 田頭賢太朗)

Q:韓国では熱心に日本語教育を行っている学校がある。

日本にも同じように韓国語教育を行っている学校はあるか。

A:自分が勤める関東国際高等学校では6か国の言葉を学ぶことができる。韓国語の人気は高く、ほとんどが女子生徒で、K-POPも大変人気である。1、2年生は週5時間。3年生は週10時間行っている。ホームステイも行う。(A-16 田頭賢太朗)

Q:日本における塾はどのような存在か。

A:地域によって異なるが、神戸ではほぼ全員の生徒が塾に通っている。(A-20 和田恵子)

Q:日本には、韓国のような放課後学習はあるか。

A:高等学校では補習学習があり、希望者が受講している。3年生で塾に行かない生徒は学校に残って学習している。3年生の途中まではクラブ活動が中心で、放課後学習を行っている生徒は少ない。

(A-20 和田恵子)

中学校の放課後は、ほとんどが部活動に費やされる。部活動には、様々な運動や文化の活動がある。これらの活動は自分で選択し、3年間行う。

(A-19 内海まゆみ)

Q:高校進学を支援するための特別なプログラムがあるか。

A:日本の多くの中学校では特別なコースは設けていない。首都圏の学校の一部で、進学塾と連携して学習を行っている学校がある。(A-05 細谷俊太郎)

Q:韓国の場合、生徒たちの進路探索をサポートするために、1年生向けに自由学期制を実施しているが、日本にもそのような制度があるか。

A:国レベルでは、自由学期制はない。ただし、進路模索に関して、特別活動や総合的な学習の時間の中で行っている。韓国の自由学習で行われている討論形式の授業は、総合的な学習の時間やアクティブラーニングとして授業の中で取り入れている。  
(A-23 西川太郎)

Q:日本の学校は、校則や規律が厳しいか。

A:学校によって幅があるが、スカート丈は膝丈まで、アクセサリーは禁止の学校がほとんどである。ルールはルールとして守るように指導した上で、人権は人権として大切にしている。(A-12 中嶋たや)

Q:中学校を卒業した後、職業学校に進学する生徒はあるか。

A:日本には約5,000校あり、その中の約3割が専門学科を備える学校である。高校生の内、専門学科に通う生徒は全体の2割程度であり、中途退学者も多いことが課題になっている。そのため、中学校での進

路指導の充実を図るとともに、企業等と連携して魅力ある学校づくりに努めている。(A-09 宮田里枝)

Q: 日本の学校はユネスコ関連活動や地球市民教育に積極的に参加しているか。

A: 日本では、環境教育や防災教育など様々な教育が行われている。学校ごとに研究テーマにそって、週に1~2時間、あるいはまとまった時間を設定して学習している。例えば、宮城県の小学校では、「海にかかる環境教育」をテーマに学習を行っている。1~2年は野菜の栽培、3~4年生では野菜を育てる土づくり、5~6年生ではカキの養殖など、6年間を通して学んでいる。また、大田区立大森第六中学校では、毎週金曜日に近くの池の清掃や花壇の清掃、年に数回、避難所開設訓練を地域住民と一緒に取り組んでいる。学校ごとに創意工夫があり、各教員が日々努力している。(A-19 内海まゆみ)

玄関前で記念撮影をし、訪問を終えた。

(白石市立白川中学校 教諭 高橋 松雄)



美術の授業を見学する日本教職員(龍江中学校)

#### 【参加者の感想】

針谷健太……自由学期制の取り組みを学ぶことができた。中学校の段階から、生徒の進路探索をサポートする体制を整えていることが分かった。口紅やスカートの長さといった生徒の身だしなみの指導を、生徒の人権的な側面から行わないという点から、日本との人権の認識の相違を垣間見ることができた。

野木雅生……全羅南道でどのような教育を行っているのかを理解することができた。特に印象に残っているのは教員の研修についてだった。教員は授業スキルを身に付けるために研修を行い、行政も力のある教員を評価しているというスタイルは教員のモチベーションが上がる要因の1つであると感じた。

高橋松雄……日本の中学生と比較することができた。ICT化が進んでおり、どの先生方も使いこなしていることに驚いた。日本でも現在ICT化が進められている。ICT全てが良いとは思わないが、多忙感を解消して生徒に接することができると実感した。また、学校外学習や入試の問題は日本でも同じであることも分かった。これを解決するためには我々教員が入試のための学習ではなく、「学ぶ喜び」を伝えることが重要であると感じている。

## 順天旺之小学校

(A グループ)

8月28日

代表者名: 金聖烈(キム・ソンリヨル)

特色: 2000年3月2日開校。2015年3月1日に金聖烈(キム・ソンリヨル)校長が着任し、今までに計3,533名の卒業生を輩出した。「自律と創意の中、お互い協力し、配慮を実践する幸せな学校」を教育ビジョンとして掲げ、児童が自ら判断し、自ら決断し、共同体の一員として他人への配慮を実践することを重視している。そのため、基礎・基本の学力を備えた創意的な児童、適性を開発することにより未来を開くことのできる夢がある児童、体を鍛え、心身が調和する健康な児童を教育目標としている。特色ある教育活動として、虹色学校で「幸せな学校」作りを実践し、7つの人間性を中心に児童たちが正しい人間性と体力を獲得するようにしている。

順天旺之小学校に到着した一行は、歓迎式がある視聴覚室に案内された。そこでは、併設幼稚園の園児や学校ダンス部員によるダンス、小学校5、6年生による合唱によって迎えられた。続いて、金聖烈(キム・ソンリヨル)校長があいさつし、順天への日本教職員の訪問を歓迎し感謝する。全羅南道は天の恵みに恵まれている場所である。本校は自律と創意の中で互いに協力し未来を実践する幸せな教育を作るために、様々な活動をしており、ESDの実践研究校である。今日は日韓の教職員同士の有意義な交流ができる事を願っている、と述べた。春原秋夫グループ長は、訪問団の構成は、小・中・高校の教職員や教育委員会で教育施策に携わっているものであり、韓国のICTや英語教育など優れた実践を学びたいと考えている。特に、ESDの研究開発校という同校のESDには関心があり、学びたいと思う。また、学校の厚意により、日本人教職員による文化交流授業の時間を頂いたことに感謝し、お互い隣人として互いの文

化を理解し、未来に続く教育を実践していきたい、とあいさつした。

記念品の交換が行われた後、学校の概要が以下のように紹介された。

順天旺之小学校は**2000**年に開校、現在までに**3,000**人以上の卒業生があり、教職員は**72**人である。自律と創意の中、お互い協力し、配慮を実践する「幸せな学校」を教育ビジョンとして掲げ、児童が自ら判断し、自ら決断し、共同体の一員として、正しい人格を持つ勇気ある子ども、基礎力のある子ども、心身健康な子どもを目指している。また、ESDの研究学校としてもプログラムを開発している。未来の主人公である児童の育成を行い、ESDの力量を高めるため、エコファームなどを実施している。サークル活動も盛んに行われており、子どもたちがやりたいことを自ら決め、自分たちが友達などを誘う活動を教員がサポートしている。家で使わなくなったものを物々交換したり売ったりするエコフリーマーケットも生徒によって運営されており、収益は募金することになっている。他にも、協力・配慮する力を伸ばすためスポーツ大会の実施やユネスコ活動、民主市民実践キャンペーン、環境の日キャンペーン、ウズベキスタンなど外国人との文化教室などを行っている。国際交流体験として、中国の学校と交流しており、韓国の児童が中国を訪問したり、中国の児童が韓国を訪問したりしている。

学校の紹介が終わると、一行は、施設及び授業見学に案内された。児童会室、英語教室、Wee Classという教育相談室など施設見学と授業参観を行った。児童会室、英語教室については、日本の学校のものと大きな差異は感じなかつたが、Wee Classについては、日本より設備を含めよく整備されていることが分かった。また、教育相談室には常駐のカウンセラーがあり、教育相談体制が充実していた。授業は、授業形態や内容に日本との大きな差異はないが、ICT環境が整っているため、教員によってはICTを活用した授業を展開していた。また、驚いたことに教員の授業分析を自動で行う設備が4つの教室に備えられており、授業の様子は全羅南道教育庁のサーバーに録画として保存される。保存されたデータは自動で分析され、教員や児童の発話の割合、授業スタイルなどが明らかにされるそうだ。金聖烈(キム・ソンリヨル)校長は、全ての教室に設置したいと考えているが、高価な設備なため、実現できていない。授業分析のできる教室については、教員の話し合いで使用者を決めているが、使いたがらない教員もいるそうだ。

日本教職員は、日本の文化を紹介する文化交流授業を**12**学級で実施した。授業内容は、授業者の自己紹介

及び日本や所属校の紹介、日本の伝統的な遊びや日本文化の紹介が行われた。伝統的な遊びの紹介では、けん玉やコマ、福笑い、割り箸鉄砲作りや折り紙などを韓国人児童にも挑戦してもらった。日本文化の紹介では、都道府県の代表的な伝統文化・文化遺産の説明や、風呂敷の紹介もした。どの学級も和やかな雰囲気であった。

その後一行は視聴覚室に戻り、教職員との懇談会が開かれた。その際の質疑応答の内容は以下の通りである。

<日本側からの質問>

**Q:**どの授業でもICTを活用していたが、ソフトなどは教員がそれぞれ用意するのか。それとも、教育委員会が用意しているのか。(A-04 針谷健太)

**A:**教員が作ることもあるが、授業の資料を共有するサイトがあるので、それを使っている。サイトは国で運営していて無料で使えるもの、企業が作り有料のものなどがある。より良い資料が提供されているのは、教職員間で共有しているサイトである。

**Q:**日本ではグループ学習・ペア学習による課題解決型の学習を行っているが、韓国では個別学習とグループ学習、どちらが多いのか。また、日本では宿題を忘れた生徒は居残りをするが、韓国ではどういう指導をしているのか。(A-17 高橋松雄)

**A:**グループ学習が活発に行われている。特に数学、社会で活発である。教員もそのような教育をするよう努力している。宿題忘れについては、どこでも同じ状況であると思われる。以前は宿題を忘れると体罰をして、強制的にやらせていたが、今は日本と同じように居残りをしている。

<韓国側からの質問>

**Q:**日本では児童の自治活動はどのように行われているのか。

**A:**児童会活動で学校の代表が集まって自治活動を行っている。5、6年生がリーダーシップをとり、月に一度、学校での過ごし方を検討したり、体育や保健給食などの委員会活動をしたりしている。また、地域や近くの中学校、幼稚園などとも挨拶や募金活動などでつながっている。(A-14 野木雅生)

**Q:**本校では市民意識を高めるためキャンペーンを行っているが、日本での市民意識を高める活動はどのようなものがあるか。

**A:**生徒、教員、保護者が同じテーブルで話し合う機会

を設定している。話題としては、「学校を PR するにはどうすればいいか」、「携帯電話の管理をどうするか」などである。(A-13 楠府暢子)

(泊江市教育委員会 統括指導主事 細谷俊太郎)



記念品交換を行った春原グループ長(左)と金校長(右)  
(順天旺之小学校)

#### 【参加者の感想】

**新子慶行**…………韓国的小学校で実際に授業をするというのは、非常に貴重な経験であった。自分が担任しているのと同じ5年生だったこともあり、日本の子どもたちとの共通点や相違点を多く発見することができた。

**宮田里枝**…………各学級における ICT 設備や図書館の蔵書および廊下の掲示物などから、恵まれた教育環境とそれを最大限に活用して実践に生かそうとする教職員の姿勢が伺えた。交流授業を通して、子ども達が平素から集団生活する上での規律を守り、意欲的に授業に参加しようとしている様子も実感できた。

**山地陽子**…………私は文化交流授業を行ったわけではないが、順天旺之小学校での文化交流授業は大変に意義深いものと感じた。紙鉄砲を作る授業のサポートとして入ったが、韓国小学生がとても嬉しそうに紙鉄砲を作る姿や、完成した紙鉄砲で何度も繰り返し遊んでいる姿をみて、交流することの意義を体感できた。音が鳴らなくて悔しそうにしている児童がいたり、得意げに音を鳴らしている児童がいたりする様子はほほえましく、自らの幼いころと変わらなかった。日本の伝統的な遊びをこんなに喜んでもらえるのだと嬉しく思った。また、けん玉や福笑い、割り箸鉄砲などの伝統的な遊びや、風呂敷、新幹線など日本で作られたものの紹介をするなど、他の日本人教職員が準備した授業の内容を聞くことで、日本文化を再発見する機会を持てた。

**川崎恵子**…………歓迎会で、児童のみなさんが素敵な伝統衣装を身につけて、素晴らしい踊りや歌を披露してくれ

ださったことに感激しました。また授業を見せていただいた各クラスの先生方が、ICT を効果的に活用して授業をされていることに大変感心しました。そして何よりも、高校教員の私が校種の異なる小学 2 年生のみなさんに、日本文化の授業をさせていただいたことが貴重な体験となりました。私が韓国語で自己紹介をした時の児童のみなさんの歓声、そして折り紙とけん玉を教えた時のキラキラとした瞳や一生懸命に取り組んでくれた姿が、一生忘れられない思い出となりました。

## 順天八馬高等学校

(A グループ)

8月 28 日

代表者名:許順行(ホ・スンヘン)

特色:急激に増加する順天(ソンチョン)市の高校生を受け入れ、公立高校の数が足りない地域の教育環境を改善するために、2006 年 12 月に認可を受け、2007 年 3 月に開校した男女共学の公立高校である。持続可能な発展・生徒中心の教育を追及し、実現するために努力している。「夢のある学校」「実力のある学生」「正しい心」をモットーとする。2014 年ユネスコスクールに加盟。「八馬世界文化発表会」「八馬世界主要紛争地域研究発表会」の他、「八馬ユネスコクラブ」「八馬 green supporter」など、ESD の活動を精力的に展開している。

順天八馬高等学校に到着すると、はじめに視聴覚室での開会式があった。開会式では、開会宣言から始まり、許順行(ホ・スンヘン)校長あいさつおよび来賓者の紹介、春原秋夫グループ長あいさつ、記念品交換、学校概要説明、質疑応答があった。

学校概要説明では、8 時から始まる自習の時間の後、授業を 1~7 校時に実施し、夕食後には、自主学習を 2 時間とることになっていることや、読書活動や進路と連携した体験活動にも力を入れていることが説明された。品性教育は、瞑想・人文学・文学紀行などを実践しており、特に、詩の暗唱は低所得層の生徒に効果が出ている。また、進学情報センターを設立し、様々な進路プログラムを用意している。66 のサークル活動があり、グリーンマレイージ、自治法廷、パネルディスカッションなどの活動にも力を入れている。

続いて施設、授業見学が行われ、ユネスコルームを見学した。室内には、生徒の募金活動や学校暴力撲滅キャンペーンなどの ESD 活動の写真、ポスターなどが

掲示され、生徒の手作り自然石けんも展示が見られた。相談室と特別学級では、特別な配慮が必要な生徒の対応について説明を聞き、見学することができた。各クラスには、すべての教室前方にディスプレイが設置されており、ICTの活用ができる。ほぼ全ての授業で、デジタル教科書や画像、動画が映されていた。廊下には、顔写真や名前とともに、モットー、将来の夢、それを実現させるための短期目標が、生徒全員分掲示してあった。また、クラス分けは、学業に集中させるため、1、2年次は男女別クラスという方針をとっている。

続いて、一行は視聴覚室へと戻り、懇談会が行われた。懇談会では、文部科学省の西川太郎氏による日本のESD活動及びユネスコスクールの概要のプレゼンテーションが行われた。その後、教職員の意見交換、記念撮影が行われ、訪問を終えた。意見交換の内容は以下の通りである。

#### <日本側からの質問>

**Q:**生徒の進路に連携した66のサークル活動とは、具体的にはどのようなものか。(A-21 山地陽子)  
**A:**木曜日の6~7校時に全生徒必修で行う。徹底して進学(進路実現)と連携させる。生徒は、美術・音楽・体育の他、志望と連携した分野を選択でき、複数選択もできる。活動の実績は「生活記録簿」に記入されるため、大学入試の際に有利になる。

**Q:**放課後の補習や塾に行く生徒達の数について。  
 (A-24 岩佐敬昭)

**A:**塾に通う生徒が多いのは、日中韓の共通点だが、本校で塾に通う生徒はあまり多くない。本校では、音楽・美術・体育の塾を除き、平日の塾通いは禁止している。そもそも、韓国では私教育に多大なコストが割かれている現状があり、公教育でそれを補う必要がある。放課後や週末には、他校と連携し、論述練習などを行う。

**Q:**卒業生の進路について。(A-10 水野鉄也)

**A:**ほぼ100%が専門学校を含む大学に進学する。クラスが文系と理系に分かれるので、専攻はそれに依るが、たまに別の系列に進学する生徒もいる。

**Q:**この場にも保護者会の代表をはじめ、保護者が複数来校している。日本にはPTA活動というものがあるが、共働きの家庭が増えたため、保護者には負担感もある。韓国で、保護者を巻き込んだ活動には、どのようなものがあるか。(A-11 中川とも子)

**A:**保護者の活動は大きく2つある。1つは、学校の発展のために法的に設定された学校運営会、もう1つは

保護者会である。韓国でも共働きの家庭が増えているため、保護者会の活動は、平日の夜間に行われることが多い。講師を招いての講演や、ものづくり、キムチ作り(寄付する)、禁煙キャンペーン、給食点検、図書館司書ボランティアなど、保護者同士の関わりや、生徒及び学校へのボランティア活動が中心である。

#### <韓国側からの質問>

**Q:**日本や韓国以外の国では、ESD活動はどのように行われているか。  
**A:**2010年にアメリカを訪問し、ESD活動を見学したが、学校によって活動内容にかなりの違いがある。印象としては、韓国の方が、国として統一して色々なことに取り組んでいる。(A-02 新子慶行)

**Q:**日本の高校生は、夜遅くまで学校に残って自習しているか。

**A:**日本の場合は、学校によって違いがあるが、18時30分頃に下校時刻が設定されている。また、生徒は塾や予備校で勉強する。もちろん、放課後の補習がある場合もあるが、日本の生徒は韓国の生徒のようには夜遅くまで学校に残ることはない。

(A-20 和田恵子)

**Q:**日本の教育制度について。

**A:**広いテーマなので、大学入試制度に絞って答える。日本では、一般入試の他、1990年代からAO入試が導入された。学科試験ではなく小論文やプレゼンテーションなどで学力をはかる。知識の詰め込み教育の害を排し、多様な学生が欲しいということ、早い時期に学生を集めることができることで、盛んに取り入れられている。また、現在は大学入試センター試験が行われているが、2021年頃から、これに代わる新たな選抜試験が行われる予定。ただし、詳細についてはまだ明らかになっていない。

(A-16 田頭賢太朗)

**Q:**日本の高校生の進学率について。

**A:**日本の中学生の99%が高校に進学する。高校は、全国に約5,000校あり、約330万人の高校生がいる。全体の7割が普通科で、次いで工業科、商業科の順に多い。高校卒業後は、約5割が大学に進学し、約18%が就職する。(A-23 西川太郎)

**Q:**日本の高校でも韓国語を学ぶ機会はあるか。

**A:**私の勤務校では、6ヶ国語を学ぶことができ、韓国語は一番人気である。各学年、週5時間~6時間、最大10時間韓国語の授業がある。時折、教室に黒いものが落ちているのは、生徒が韓国海苔をおやつに食

べているためである。(A-16 田頭賢太朗)

Q: 私達は放課後にユネスコスクールの活動を行っているが、日本の生徒達はいつ活動を行っているのか。

A: 教育課程の中に「総合的な学習の時間」が週 1~2 時間あり、そこで全員が活動を行っている場合もある。私の勤務校では、以前、韓国教職員訪問団の方が約 30 名来校したが、生徒達は、その準備として、御神輿かつぎ、日本の歌や三味線の練習、プレゼントするしおり作成などを行った。(A-19 内海まゆみ)

Q: 日本ではどのような教科・科目を学ぶのか。

A: 高校では、国・社・数・理・英(外国語)・音・美・保健・家・情報の 10 教科である。さらに、例えば国語は、現代文・古典(古文・漢文)というように細かく分かれている。(A-18 田中福人)

Q: 高校生の話題はどのようなものが中心か。

A: 基本的には、韓国の高校生と同じように、友達のことに関心がある。その他、テレビ・アニメ・マンガなどについても関心があるが、今の生徒は SNS でやりとりをしているので、教員にはその詳細が見えづらくなっている。(A-10 水野鉄也)

Q: 日本の高校生は韓流に興味があるか。

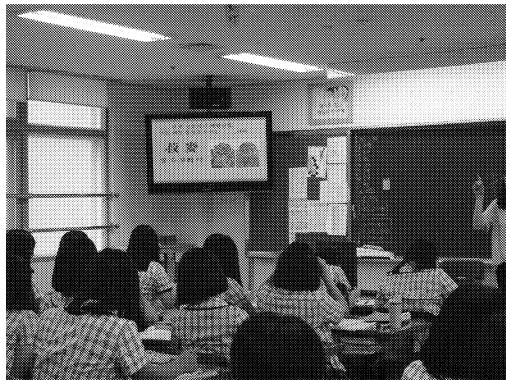
A: 日本でも、韓流スター や K-POP が好きな生徒が多い。私自身も、チャン・グンソクのファンで、ファンミーティングのために韓国を訪れたり、最近は韓国語を習い始めたりしている。(A-08 川崎恵子)

Q: 日本ではここ数年、民族衣装である浴衣が、若者の間でブームになっている。韓国にも民族衣装はあるが、古いものという感じで、今ひとつ若者のブームにはならない。なぜ日本では、浴衣が若者のブームとなつたのか。メリットはどのような点にあるのか。

A: 日本における若者の浴衣ブームの理由は、3 点あると考える。①季節感を楽しみたい。②非日常感を味わいたい。③ファストファッションの後押し。私の教えている女子高校生たちも、夏の行事である花火大会に、いつもと違う可愛い浴衣を着て彼氏や友達と出かけると、季節感と非日常感が味わえ、気持ちが盛り上がる。浴衣を買うためにアルバイトをするほどだ。また、皆さんも知っているユニクロは、近年安くて可愛い今時のおしゃれな浴衣を売り出した。これがブームに火をつけた。私は韓国の民族衣装も素敵だと思うが、安くて可愛い今時のおしゃれなものが売り出されれば、ブームになる可能性は大きいと思う。

(A-11 中川とも子)

(神奈川県立有馬高等学校 教諭 中川とも子)



ICT 機器を活用した授業(順天八馬高等学校)

### 【参加者の感想】

石田恒平……私は美術を担当しているが、順天八馬高等学校で行われていた美術の授業を観ることができ、大変有意義であった。生徒たちが熱心に取り組んでいる姿が大変印象的で、自身の授業に生かしていくヒントが得られた。また、以前から韓国では英語教育に力を入れていると聞いていたが、生徒が「母国語はもちろんであるが、英語が話せないと世界で通用しない」と言っていた。日本と韓国では英語教育に対する考え方方が違うように感じた。ユネスコ活動については、展示室での生徒たちのユネスコ活動の様子はとても感銘を受けた。本校でも取り入れたいと思った。

水野鉄也……自分自身の勤務校と同様「高校」ということもあり、さまざまな点に着目しながら観察できました。カリキュラムの違い、放課後の活動の違い、「Wee クラス」のような相談室の違いなどの施設だけでなく、実際の授業の様子を通じて高校生の姿を見ることができたことが一番の成果でした。更に、ユネスコサークルに所属している生徒とも交流を持つことができ、とても有意義な時間になりました。

細谷俊太郎……ユネスコスクールとしての地球市民教育(GCED)の一端を垣間見ることができた。「八馬ユネスコクラブ」「八馬 green supporter」を中心に幅広い活動を精力的に行っていた。また、順天湾庭園、松広寺を生徒とともに見学したこと、韓国の高校生の実態に直接触れることができてよかったです。

地引千尋……日本との教育制度の違いをたくさん発見し、また高校生の勉強量の多さに驚いた。29 日の文化施設視察の時に、案内してくれた順天八馬高等学校の生徒と、日常生活について話ができる。教員との話し合いの場があると更に見習う点や改善点が見えてきたと思う。

中川とも子……ICT 活用の様子や授業規律の保持も含め、韓国の高校における日常的な授業風景をフリー

に参観させて頂くことが出来た。また、直接の QA や翌日の散策などで、韓国の高校生の生の声を聞くことが出来たのも、非常に思い出深かった。

## ソウル大学師範大学附設女子中学校 (B グループ)

### 8月 26 日

**代表者:ト・根(ボク・ワングン)**

**特色:教育科学技術部指定の常設研究学校として研究推進しており、ソウル大学師範大学 4 年生約 100 名を対象に 4 週間教育実習指導している。自己主導学習能力の育成、活気ある一日を計画する生活録、24 人の専門家による進路の日の運営、朝の瞑想による人格教育、ユネスコスクール総会参加、CCAP(Cross-Cultural Awareness Program)授業実施、持続可能な開発のための教育(ESD)実施など、さまざまな教育プログラムを持つ。**

「学校によこそ」という日本語のメッセージに迎えられ、一行は校門から学校に入った。小学校が中学校に隣接しており、都心にある学校だが校庭は広く、生徒たちは窓から、こんにちはと大きな声で挨拶してくれ、心が和んだ。

まず図書室に案内された。そこでは、学校概要が紹介され、教育の 4 つのモットーや教職員を世代別に見ると 30~40 代の割合が多いこと、教育課程について詳しく説明を受けた。また、特色ある教育について説明があり、1 年生では中国語を学び、3 年生では日本語を学ぶ。この日は 3 年生がボランティア活動に行っており、会うことはできなかった。また、1、2 年生では進路探索活動を取り入れており、先進的な活動が行われていた。ユネスコの活動も紹介され、全校で異文化理解を行い、世界に向けてボランティア活動も積極的に行われていることも紹介された。毎月 ESD クイズを行って、生徒に環境や人権を考えさせる機会を設定し、広めている。

その後、体育館に移動し、生徒による歓迎公演が行われた。まず、伝統衣装を身に着け、伽耶琴(カヤグム)という韓国伝統楽器の演奏を鑑賞した。「アリラン」という曲が演奏され、メロディーを口ずさむことのできる素敵な演奏だった。次は、テコンドーが披露された。蹴る等の足技、突く、取る等の手技を使って板を割るといった韓国の国技を見ることができた。

公演後、校内を見学した。実力の高いチアリーダーの

練習場や、夏休みの宿題の発表会が行なわれている音楽室を見学した。理科室では、1 年生の顕微鏡を使った植物の観察の授業、マルチメディア室では、3D プリンターが設置され、ICT 機器の活用した授業に積極的に取り組んでいることが分かった。国語の授業では、文学に触れ、気に入った詩について絵や文章で解釈することをまとめるという課題に取り組んでいた。授業見学の間も校長先生の詳しい解説を聞くことができ、その熱意を感じた。

その後、図書室に戻り、樋口団長と川崎グループ長があいさつし、質疑応答の時間となった。

<韓国側からの質問>

Q: 日本の生徒たちの学校生活について。

A: 韓国の生徒との違いは、部活動が挙げられる。朝や放課後に部活動に取り組む。放課後は、16 時~18 時 30 分まで活動している。(B-20 谷脇光)

Q: 理科の授業の実験の比重について。

A: 中学では体験や実験を重視し、高校では教科書にない実験を取り入れるなど、少し異なっている。日本は、高校で理系コースを取り入れたりしている。女子を増やす傾向にはあるが、一方で、理工系離れも進んでいる。科学に対する興味が薄くなっていることも挙げられる。

(B-3 青鹿吉洋)

Q: インターネット用語などの新しく生まれた単語についての教育について。

A: 学ぶ機会は大きく 3 つある。①用語集など活用をして、塾や個人で対策する。②授業では、主に情報・技術の時間に教えることが中心。国語でも、外来語やメディアリテラシーの分野で教えることもある。③警察や大手の携帯会社などに来てもらい、インターネットの使い方について講演してもらうこともある。

(B-22 山本瑞絵)

Q: 読書教育について。

A: 9 割の小・中学校で始業時間前の 10~15 分の読書時間を設けている。1 年に 1 回ある全国的な読書感想文コンクールに応募する学校も多い。夏休みには、お薦めの本を紹介することもできる。また、自分の読んだ本を記録していく。いろんなジャンルを読んでほしいので、3 分間程度の読書紹介の時間を設けている。「ビブリオバトル」を通して、優れた本の紹介者を決めて表彰していく。本を読むことに加え、どのように読み、どのようにその面白さを伝えているかということを重視している。(B-22 山本瑞絵)

Q: 教職員および生徒の服装について。

A: 教職員の服装は、基本的に男女ともスーツまたはカジュアルな服装で勤務している。入学式や卒業式では、フォーマルな服装をする。また、小学校の担任は体育も行うため、運動着を着ていることが多い。生徒の服装は、中学校では学校が推奨している標準服を着ている。男女ともブレザースタイルが多くを占め、セーラー服スタイルもある。女子は、アイドルの影響を受け、スカート丈を短くする傾向があり、生徒指導の先生の悩みの種となっているようだ。小学校では、15.6%が制服。地方によって差があり、東京都では、わずか2.5%となっている。

(B-2 川崎貴志)

懇談会後は、食堂にて昼食をとった。メニューはご飯、みそ汁、ハンバーグ、キムチ、マカロニのチーズ焼き、フルーツ。生徒たちと会話しながらおいしく食べた。その後、写真撮影が行われ、訪問が終了した。

(市川市立中山小学校 教諭 大平淑恵)



韓国生徒と給食を共にする日本教職員  
(ソウル大学師範大学附設女子中学校)

#### 【参加者の感想】

青鹿吉洋……自身の勤務校と同じ女子校として参考になった。まず先方から、科学の授業での実験の比重についての質問があり、それに回答した。個人的には、女子生徒に対する理系の指導の特殊性についても興味があり質問したが、韓国側も同様の悩みを抱えていたことが印象的であった。

原野公輔……韓国で初めて訪れた学校だった。各教室にある電子黒板や大型モニター、家庭科室のシステムキッチンなど、教育施設・設備の充実ぶりに驚かされた。また、多くの授業に体験活動を取り入れており、生徒がどの教科も楽しそうに学習に取り組んでいる姿が印象

的だった。給食時間には、生徒と食堂で一緒に昼食をとった。最初はなかなか言葉が通じず、苦労したが、次第に身振り手振りで何とかコミュニケーションを図ることができた。生徒の笑顔の素晴らしさが忘れられない訪問となつた。

小出一也………同校はソウル大学師範大学付設女子中学校ということもあり、校舎・施設・設備の充実は、恐らく他校に比べて群を抜いていると思われる。それらを十分に生かす少人数制をベースとした教育活動が行われていた。教育とは単に知識や技術を与えればいいというものではなく、常に時代に沿った情報や機器を用いながら、実生活にそのまま生かすことができる、また実生活をイメージしながら学ぶことができる学習環境を整える必要があるということを実感した。

山本瑞絵………校舎案内をしてくれた生徒を中心に、将来の夢を聞いてビデオに撮らせていただいた。一人は日本語で「日本の美術学校に行って、日本でイラストレーターになりたい」と答えてくれた。もう一人は「国連に携わる仕事につきたい」と答えてくれた。最後の一人は「国を守るために兵士になりたい」と答えてくれた。日本に興味を持ってくれる子、世界に目を向けている子、国の平和のために目を向けている子と三者三様だった。まず、中学2年生の段階で明確な夢を持っていることに驚いた。自分の将来をしっかりと見据えながら学習していく姿に、韓国の教育の成果を見た気がする。このビデオを本校の同じ中学2年生に見せたところ、驚きながらも、自分達との意識の違いに刺激を受けたようである。

## 鞍峴小学校

(B グループ)

8月28日

代表者名:金善惠(キム・ソンヘ)

特色:2010年3月1日に18学級で開校し、現在の生徒数は1,200名、37学級である。校長1名、教頭1名、教員47名、養護教諭1名、栄養士1名、教育行政職員5名など、計82名の教職員が勤務。教育目標は、共に素敵な夢をデザインする HAPPY SCHOOL 鞍峴小学校教育。京畿道教育委員会が指定した革新共感学校で、校長以下全ての教職員がいつも研究する姿勢で自己開発に力を注ぎ、積極的にポジティブなマインドで世界をリードする創意的な人材を育成に取り組んでいる。

はじめに歓迎会があり、5年生によるサムルノリ演奏が

披露された。太鼓と鐘による全員の息の合った力強い演奏であった。次に、申京和(シン・ギョンファ)教諭によるオカリナ演奏が披露された。**2**種類のオカリナ演奏で、とても美しいきれいな音色で「アリラン」など**2**曲を演奏され、心に響いた。その後、放課後オカリナクラスの児童によるオカリナの演奏では、児童は伝統衣装である韓服を身にまとい、「Let it be」と「ふるさと」を披露してくれた。特に、「ふるさと」の演奏では、一部の日本の教職員が自然と歌を口ずさみ始め、その歌声の輪が徐々に広がつていった。まさに、日本と韓国のコラボレーションであった。中には涙ぐむ教職員もあり、鞍峴小学校が我々を心から歓迎してくれていることを実感した。その後、鞍峴小学校の児童を代表して、**2**年生の児童が日本語で歓迎の挨拶をし、日本の祖父宅を訪れた際、日本の小学校に体験入学をしたことがとても楽しかった、と話してくれた。

続いて、鞍峴小学校の金善惠(キム・ソンヘ)校長が日本と韓国は近い国であることやユネスコスクールの活動として日本文化を学んでいることなどを紹介した。次に、樋口団長があいさつし、音楽は国境を越え、年代を越え、人々をつなぐものであることを述べ、ハッピースクール鞍峴小学校に来たことを実感していることを伝えた。最後に、鞍峴小学校の沿革や鞍峴教育の人間像、教育目標、重点課題、特色事業などとともに、ユネスコスクールとしての様々な活動がスライドを通して紹介された。鞍峴小学校が平和を抱いた学校で、世界に開かれた教室を持つユネスコスクールであることが理解できた。

続いて、**1**階から順に様々な教室を見学した。どの教室もとても充実した施設・設備のもと、児童が授業に真剣に向き合う姿が随所に見られた。施設・設備に関しては、どの教室にも大型のテレビモニターが設置しており、電子黒板による授業が行われていた。また、保健室は**4**つのベッドがあり、とても明るい雰囲気で心が癒される場所であった。廊下には、子ども達の様々な作品を展示するコーナーや、リサイクルボックスがあった。バルコニーには、子ども達が育てている白菜のプランターがずらりと並んでいた。

授業見学では、「生活科」の学習として「私たちの町の様子を見てみよう」という**2**年生の授業が行われており、自分たちが調べた町について発表が行われていた。**6**年生の授業では、政治について児童たちが熱心に討論をしたり、職業について調べたことを議論し合つたりしていた。いずれの授業も言葉は分からなかったが、自分の考えをしっかりと述べている姿が印象的だった。その他にも、保護者のための生涯学習の部屋や民間委託によ

る放課後英語教室の部屋など、日本ではあまり見られない施設があった。

引き続き、樋口団長を始めとする一行は、**4**年生**6**クラス、**5**年生**6**クラスに入り、日本文化授業を行った。各クラスとも、まず画像や映像とともに日本文化に関する話を話し、その後、折り紙やけん玉、鬼ごっこなどを子ども達と一緒に活動することで、日本文化を体験させた。中には、浴衣を着て授業に臨み、少しでも日本文化に触れさせようとしている日本教員もいた。田之上寿宏教諭が授業した**5**年**4**組では、まず、日本の小学校の運動会のダンスと体操、綱引きの様子を画像で紹介し、音楽会での合唱や合奏の様子を映像で紹介した。次に、日本のことや知っていることについて、韓国の児童に質問をすると、マンガやアニメという答えが多かった。韓国の児童からは、日本で有名な食べ物や古くからある遊びについての質問があり、食べ物については、寿司やそばがあること、遊びについては、けん玉や折り紙などがあることを紹介した。そして、古くからある遊びの**1**つである折り紙を皆で実際に体験することにした。作るものは新聞紙を使っての「カブト」だ。通訳の方の助けを得ながら、**1**つ**1**つの折り方を丁寧に説明しながら折った。全員がカブトを完成させることができ、子ども達は作ったカブトを頭にかぶり、とても嬉しそうにしていた。少しではあったが、韓国の児童に日本文化に触れ、日本文化に興味を持つてもらうことができた。

昼食は、学校の給食をいただいた。校長先生の話によると今回の訪問に合わせて、日本人が好む給食のメニューを用意してくれたそうだ。メニューは、ブルコギ、チャプチエ、キムチ、餅であった。餅は「風のお餅」といい、噛むと風が来ることから、そう名づけられたそうだ。また、飲み物は「シッケ」という消化に良い発酵したお茶であった。韓国の食文化を存分に味わうことができたとともに、「おもてなし」の心が伝わってきた。

#### <韓国側からの質問>

**Q:**ユネスコスクール及びESDの運営方法について、正規教育課程内もしくは課外授業としての運営方法、地域社会活用方法等はどのようなものか。

**A:**市川市立中山小学校は、生活科及び理科に重点的に取り組む学校で、自然を生かすことを重視している。ESDは主に**4**、**5**、**6**年生が総合的な学習の時間を中心に学習を行っている。課外では、休み時間や放課後を活用している。(B-16 大平淑恵)

**Q:**学校別、地域別の特色のあるプログラムはなにか。

**A:**大牟田市は平成**23**年度に公立のすべての小・中・特

別支援学校がユネスコスクールに加盟し、ESD を推進する拠点校となっている。各学校では、世界遺産や歴史文化遺産を学習する世界遺産学習に取り組んでいる。子ども達が主体的に学ぶための「子ども大牟田検定」を実施し、「ふるさと大牟田」に誇りを持ち、守り育てようとする、郷土愛に満ちた子どもをめざしている。(B-06 原野公輔)

Q: 日本の小学校での進路教育はどのようなものか。

A: 小学校では、具体的な将来設計ではなく、夢や希望を育み、努力することの大切さや自信を持たせることを狙いとして、全教育活動でキャリア教育を行っている。例えば、国語では伝記を読み、自分の生き方を考えたり、家庭科では、自分の成長を自覚し、家庭生活や家族の大切さに気づかせたりしている。私立中学進学の対応は公立の小学校ではせずに各家庭に任せており、児童の多くは塾に通い、指導を受けて受験するのが一般的である。(B-2 川崎貴志)

Q: 日本の小学校での生活規定はどのようなものか。

A: 大牟田市では小学校において、服装や髪型等を規定する校則はない。しかし、学校内外で守るべきルールはあり、「○○小のきまり」として整理し、年度初めに児童及び保護者に配布している。長期休暇前にも、「よい子のきまり」を配布し、規則正しい生活習慣や安全な生活のため家庭の協力を求めている。また、学校生活がより充実することを目的に、毎月の生活目標として「トイレのスリッパを並べよう」「名札をきちんと付けよう」などを設定し、基本的な生活習慣の育成をめざしている。そして、児童会を中心取組状況を把握、評価している。(B-6 原野公輔)

質疑応答の後、鞍峴小学校の金校長と樋口団長による記念品の交換が行われた。その後、グループを作り、少人数による教職員間のディスカッションが行われ、日韓それぞれの生活指導や清掃指導、体験学習等について、熱心な議論が交わされた。

最後に全員で記念撮影を行い、学校訪問を終えた。

(大牟田市立高取小学校 教頭 原野公輔)



活発に意見を交わす日韓の教職員(鞍峴小学校)

### 【参加者の感想】

**川崎貴志**…………鞍峴小学校での成果は、Happy Schoolを教育目標に掲げ、革新教育を創造的に進めている様子を見学できた点だ。また、ICT の整備及び活用状況を学んだ。所見としては、活き活きと学習に取組む児童の姿から、学校の経営目標が浸透していることが伺えた。

**竇迫浩二**…………外国の児童を相手に授業をさせていただくという貴重な体験をさせてもらった。韓国の子どもたちが日本の文化に興味を持っている様子に直接触れることができたのは、今後の「つながり」を持たせていく上で大きな成果となった。また、教職員の方々からは今後も日本との交流を受け入れてくれる温かさや熱意を感じた。「日韓の子どもたち同士をつなげていきたい」と強く感じさせる訪問となつた。

**佐々木哲弥**…………他の参加者がそう感じたように、私も最初の歓迎の会でのオカリナによる「ふるさと」の演奏に心を揺さぶられた。また日本人の舌に合わせた給食を用意してくれていて、おもてなしの心を肌と心で感じた。授業参観では、ユネスコスクール活動に焦点化した学校運営により討論重視の授業が行われており、活発な議論が行われていた。また保護者が学校活動に意欲的に参加しており、地域と連携した学校運営がなされていることを実感した。日本文化紹介の交換授業は緊張したが楽しかった。これから参加される方にもぜひ体験してもらいたい。

**谷脇光**…………オカリナクラブの児童による演奏に感銘を受けた。音楽は国境を越えるという団長の言葉通り、一生懸命な表情で演奏する児童の姿には涙が出た。本気で頑張る姿は、人に感動を与えるということを実感した。指導している先生方の熱心な姿は万国共通だった

**加藤健次郎**…………子どもたちがサムルノリ、オカリナの演奏で我々を歓迎してくれた。中でも日本の曲「ふるさと」を演奏してもらいとても嬉しかった。教員として、やは

り直接「授業」で韓国の人たちと触れあえたことが何よりの貴重な経験となった。

## 京畿自動車科学高等学校

(B グループ)

8月28日

**代表者名:韓周熙(ハン・チュヒ)**

**特色:**本校は1981年11月、9学級で開校し、現在までに計9,733名の卒業生を輩出。2009年4月、未来型自動車特性化高校に指定され、現在は生徒数約704名、24学級である。教育目標は、民主市民として恥ずかしくない誠実な人の育成、自己発展のために不斷に努力する勤勉で信頼性の高い人の育成、いつも新しいことを追及する未来の情報化時代に適応する創造的な人の育成である。21世紀の知識情報化時代に相応しい未来志向の教育環境、唯一の自動車特性化高校として、新しいビジョンを確立し、創造的な教育環境を作るために尽力している。

学校に到着すると、セミナールームで歓迎会が行われた。教務部長の洪材薰(ホン・ジェフン)先生の挨拶に始まり、アカペラ隊による友好のコーラスが披露された。続いて、韓周熙(ハン・チュヒ)校長のあいさつがあり、訪問に対して感謝の意が述べられた。そして、京畿自動車科学高等学校は、京畿道内唯一の自動車特性化高等学校であり、よいエンジニア育成のため教職員一丸となって指導にあたっていることを紹介し、就職先は現代自動車、KIA、メルセデスベンツ、BMW、そして日産、マツダであることが説明された。次に、樋口団長によるあいさつがあり、この度の学校訪問やアカペラ隊による熱烈な歓迎への感謝の意を述べた。また、国籍や言葉を超え、音楽は人を優しい気持ちにしてくれること、今日の訪問を楽しみにしていたことを伝えた。その後、記念品の贈呈が行われた。

続いて、教育課程についてのVTRを視聴した。京畿自動車科学高等学校には3つの学部がある。1つ目は、自動車科だ。自動車全般の仕組みから整備について学び、自動車メーカーに就職する生徒が多い。2つ目は、自動車IT科で、自動車にはナビゲーションシステムなど多くのITが入っており、そのプログラミングについて学んでいる。生徒の中にはコンテストに出場し、チャンピオンに輝いた者もいる。就職先は、IT関係の企業が多い。3つ目は、自動車デザイン科である。車体のデザイ

ンを学んでおり、テレビにも紹介され、コンテストで良い賞を獲得している。普通授業では、英語で書物を読んだり、討論をしたりするものがある。また、ドイツや中国の留学生を受け入れ、国際性・多様性も図れるようしている。加えて、地域への貢献として地元の方の自家用車を無料で整備しており、その評判はSNSで広まっているそうだ。

続いて、一行は授業見学に案内され、エンジンの整備と板金塗装の練習の授業を見学した。6~9名のグループによる少数精鋭の授業形式であった。さらにコンテストに出場する生徒のみが鍛錬をする教室もあった。

授業見学の終了後、質問の時間が設けられた。

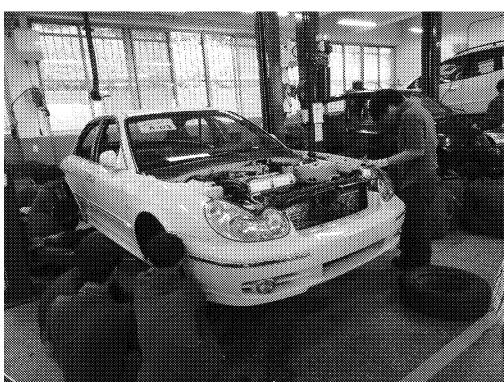
<日本側からの質問>

Q:企業との連携はあるのか。

A:3年新学期の時点で就職先は決まっており、3年生の2学期から現代自動車やKIAなどに企業実習へ行く。

Q:学区はあるのか。

A:近隣の生徒だけでなく遠方からもやってくる生徒もあり、1時間もかかる学生もいる。



実習を行う韓国の生徒(京畿自動車科学高等学校)

(北九州市立南丘小学校 主幹教諭 田之上寿宏)

### 【参加者の感想】

**樋口豊隆**………誠実、勤勉、創意の校訓や教育方針の第一に掲げられている「1人の子も放棄しない教育」に大いに共感した。また、ホ・ヨンジュ先生の「生徒のスマイル、先生のスマイルが生徒の夢を実現させる」のことば。もっともっとホ先生と語りたかった。

**新井真理**………京畿自動車科学高等学校でのボイスパーカッションの公演を本当に嬉しく思いました。音楽は世界をつなぐ、という言葉を実感しました。サポートしてくれた高校生は、私たち日本人が困っていないかを常

に意識してくれていました。日本語が話せる生徒 4 人のお話を聞けてよかったです。「夢の探し方を知りたい。」という質問が印象的でした。確かに、夢というのはいろいろな方と出会ったり、いろいろな仕事を知ったりしなければもてないのでと感じました。キャリア教育の重要性を感じました。

**堂代正道**…………技術教育の現場として、日本ではあまり見られない学校で大変興味を持ちました。実践的で先進的な教育現場であったように思います。韓国の自動車産業を支える人材を育成している教育であり、ものづくりの根底にある人づくり、それを大切にするユネスコスクールとしてのあり方を垣間見た視察でした。通っている生徒の職業に対しての意欲や将来に対して働くことへの意欲など感じることができました。

**大西義浩**…………印象に残っているのは、自分の将来の夢をしっかりと語っている生徒に出会えたこと。自動車に関わるという目的を持っているので、当たり前かもしれないが、自分の意見をしっかりと言えていたことに感動した。前向きに生きている姿を伝えていこうと思いました。

**田之上寿宏**…………「エンジンの整備」「板金塗装の練習」の授業は、6～9 名のグループによる少数精鋭の授業形式であり、能力を着実に身に付けさせていた。さらにコンテストに出場する生徒のみが鍛錬をする教室もあり、切磋琢磨する環境が整っていた。また、地域への貢献もきちんと行っており、地元の方の自家用車を無料で整備し、それが、SNS で広まり好評を得ているとのこと。教育理念を具現化しているところが、素晴らしいと感じた。また、地元の企業とのつながりが強固であり、3 年生の新学期の時点で就職先は決まっており、3 年生の 2 学期から現代自動車や KIA などの企業実習に向かう。就職の厳しい今、このような成果を出している学校は素晴らしいと感じた。校長先生はじめ教職員の皆様の尽力には頭が下がる思いである。

## 4. スタディーツアー ホームビジット

### A グループ

順天湾庭園・松広寺

### B グループ

国立樹木園

華城

### A・B グループ

ホームビジット

A グループは、グループプログラムにて訪問した全羅南道で順天湾公園と松広寺を、B グループは、ソウルにて国立樹木園と京畿道にて華城を訪問した。8月 29 日は、それぞれの地方でホームビジットが行われた。

### 順天湾庭園・松広寺 (A グループ)

8月 29 日

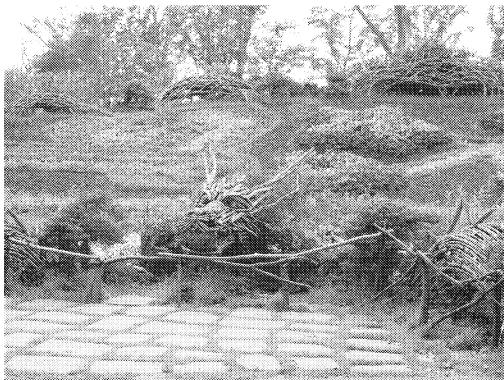
**特色:**順天湾庭園は順天市の河口に形成された沿岸湿地で、2006 年にラムサール条約にも登録されている世界 5 大沿岸湿地である。夕陽観賞スポットとしてもよく知られる。干潟 2,260 万 m<sup>2</sup>と葦群落地 540 万 m<sup>2</sup>からなり、塩分の多い土壌で育つさまざまな水生植物や、両生類などが生息するほか、毎年約 235 種の渡り鳥が訪れるほど自然が美しい場所。また「生物の種の宝庫」とも呼ばれ、生態学的にも価値が高い。

松広寺は、高麗時代から高僧を輩出し続けた、韓国仏教最大勢力の曹渓宗発祥の地である。仏教における三宝の仏、法、僧のうち、僧を大切にする僧宝寺院として知られ、現在でも世界各国から僧が修行を続ける生きた寺である。

前日に訪問した順天八馬高等学校の生徒や教職員の案内により、順天湾庭園と松広寺を見学した。カートに分乗し、日本語の説明を聞きながら、庭園内を巡回した。その後、日本人教員 3 名と八馬高等学校の生徒 3~4 名でグループを作り、庭園内を自由散策した。

続いて、松広寺を訪問した。韓国人ガイドによる日本語解説を聞きながら、本堂へ向かった。本堂周辺は、順天湾庭園と同様にグループで自由散策した。最後に集合写真を撮り、訪問を終えた。

(関東国際高等学校 教諭 田頭賢太朗)



順天湾庭園散策



松広寺にて

### 【参加者の感想】

中嶋たや…………見学先も良かったが、何より、順天八馬高等学校の生徒とフランクな交流ができたことが大きかった。こちらの韓国語の能力が低いため、日本語の達者なキムさんと交流が中心であったが、誠実に受け答えしてくれ、心遣いもすばらしく、日本の中学生・高校生もこのように対応できる生徒に育てたいと考えた。英語の達者な生徒は、同グループの英語を話せる方と交流していたが、ひとり、英語も日本語も苦手と言っていた生徒がボソンと寂しそうであったことに気づくのが遅く、別れる頃になってやっと少し話しただけになったことが申し訝なかつた。

---

## 国立樹木園 (B グループ)

8月 27 日

---

**特色:** 国立樹木園は、光陵試験林の自然林を利用して形成された。樹木園の内部には、森林に関する全ての資料を展示した森林博物館がある。国立樹木園では、植物の資源化により様々な植物の種類の確保が可能となり、世界的にも人々の関心を集めている。国立樹木園は、面積が 1,157 ヘクタールで針葉樹園、観葉樹園など 15 の専門樹木園から構成されている。山林博物館は東洋最大規模で、1,400 坪の面積を誇る。

国立樹木園に到着すると、樹木園についてガイドから以下のような説明があった。この樹木園は、朝鮮王朝の 500 年の歴史と天然の林が保護されている。世界で初めて発見された樹木もある森林で、1992 年には国家レベルで保護され、研究するために博物館が建てられ、生物種に対するデータベースを構築している。それを一般の人々に公開したり、政府と研究機関が研究したりする施設でもある。2010 年にユネスコ保全地域に指定され、活動も活発になっている。林の中にはお墓が建てられており意義深い場所である。

文化生態系について研究され、地域の発展に貢献しようとしている。その一環として ESD の取り組みについても、伝統の文化と山林の教育を組み合わせた教育を行っており、子どもから高齢者まで色々なプログラムを取り入れている。

またこの樹木園は、樹木、昆虫、野生の 500 年の歴史があり、生物多様性が世界一である。広さは 700 万坪あり、公開しているのは 30 万坪のみである。公開している場所は森として 100 年の歴史があり、残りの部分は特別な許可がなければ立ち入ることはできない。韓国の 23% を占める樹木は「けやき」であるが、植民地時代は朝鮮の 70% の樹木がなくなり、1960 年代、100 億本を植樹したという。気候は日本と似ていることもあり、昆虫の形も種類も似ていた。昔この森は王の狩場であったそうだ。また、毎年大統領が来園し、植樹する伝統もある。

説明が終わると、染色体験に参加した。草、植物、動物等などの天然の染色から染める方法である。白い布を輪ゴムでくくり絞り染めを体験した。今回はどんぐりとくちなしの染色を行い、見学・体験を終了した。

(和歌山県立たちばな支援学校 教諭 堂代正道)



樹木についての説明を受ける一行(国立樹木園)

### 【参加者の感想】

**町田直美**…………五感を使って、韓国の自然を体験することができた。また、韓国の悲しい歴史の中に過去の日本人が行った痛まれない事実が刻まれていることを知った。さらに、染色体験では、制作活動を通じて、韓国の先生に教えてもらうことで、学ぶ姿勢を理解することができた。

**三田村剛**…………日本と韓国の過去の関係について直接触れる唯一の機会であった。ガイドが紹介した書籍にあった、森林が焼き尽くされた状況は、旧日本軍の行為であることを知った。どの国にも様々な過去があるが、それらを乗り越え、未来志向の関係を築くことの必要性を感じた。

---

## 華城 (B グループ)

8月 29 日

---

**特色:** 李氏朝鮮王朝末期、正祖大王が築いた華城内にあり、水原郡の役所および王が水原に来た時に泊まる為の施設として使われた。行宮には仮宮殿の意味があり、韓国の行宮の中でも最も規模が大きく美しいと言われる。1975 年に復元工事が行われ、2003 年より一般公開が始まった。ユネスコ世界文化遺産に登録されている。

華城は、18 世紀末に李氏朝鮮第 22 代国王の正祖が、老論派の陰謀により横死した父思悼世子の墓を、揚州から水原の顯隆園に移して、その周囲に城壁や塔、楼閣や城門を築いて防護を固めたものであり、1997 年ユネスコ世界文化遺産に登録された。「イ・サン」「チャングム」など華城が舞台となったドラマが制作され、日本でも放映された。

長安門、華虹門、東将台、東北角楼・訪花隋柳亭など、

どれも堅牢で美しい造りであり、韓国の歴史の奥深さを感じ取ることができた。石材とレンガで造られた二重構造の門があり、生活しながら戦争もできるようになっている。華虹門などは川の水門になっており、アーチの大きさを変えることでうまく水を流し、農業に利用できるようになっている。朝鮮戦争の際に一部破損したが、記録をもとに修復・復元工事が行われた。現在、城郭内は市街地化しており、5kmを超える城壁が周囲を取り囲むように残されている。華城行宮内では、新豊樓や中陽門、奉寿堂、長樂堂など見学したが、正祖が直々に華城内の百姓たちに米や粥を分け与えたことや、正祖の母である惠慶宮の還暦祝いの宴、正祖の父のことや父の名誉を回復したことなど、様々な歴史のエピソードがあり、韓国の歴史を知る上で大変興味深く、改めて正しい歴史認識又は歴史教育の重要性を感じた。

(気仙沼市立面瀬小学校 主幹教諭 菅原理恵)



華城にて

#### 【参加者の感想】

**町田直美**…………韓国の歴史を知ることができる場所だった。また、過去の日本人が行った、痛まれない出来事が刻まれている場所でもあった。韓国ドラマで描かれる朝鮮時代の風景は、壮大なスケールで展開されていることが実際に見学することで分かった。

#### ホームビジット (A・B グループ) 8月29日

**水野鉄也**…………父親と高校1年生の息子が車で迎えてくれた。自宅であるアパートに到着すると、母親と娘が笑顔で私達を出迎えてくれた。私たちが持参した心ばかりのおみやげを渡すと、家族の方達はとても喜んでくれた。その後、順天のフルーツとコーヒーをいただき、兄妹が6

歳から始めたというピアノとバイオリンの演奏を鑑賞した。

その後順天湾公園へ向かい、散策を楽しんだ。日が沈むと、レストランに入り韓国料理をいただいた。食後は娘の大好物だという「雪氷」のある喫茶店へ行き、特に若者に人気のかき氷をさらに細かくした、大きな器にマンゴーがトッピングされた「マンゴー雪氷」と、きなことアーモンドに餅がトッピングされた「きなこ雪氷」をみんなで分け合った。あついう間の時を過ごし、家族全員でホテルまで送ってもらい、訪問を終えた。

**佐々木哲弥**…………訪問した家庭は、会社勤めの父親と大学で教員として勤務する母親、小学5年生の長男、幼稚園の長女の4人家族だった。母親は日本に住んでいたことがあり、日本語が堪能であった。

ご自宅に伺う前に地区の中を散策し、地域の図書館や公民館、幼稚園を紹介していただいた。すべてが集約されており、生活しやすそうであった。

自宅を訪れると家族で迎えてくださり、子どもたちはこの日のために練習してくれた日本語で恥ずかしそうに挨拶してくれた。また長男が照れながらもピアノを演奏してくれたり、自慢の模型を紹介してくれたりした。この日、父親は出張のため不在であったが、親戚が応援に駆けつけ、私たちをもてなしてくれた。夕食は一般的な韓国家庭の手料理をごちそうになった。恐らく日本人の口に合う味付けで料理を作ってくれたのだろう。焼き肉、キムチ、チヂミ等々、たくさん料理でもてなしてくれた。

私たちと母親の3人で食事をいただき、他の家族は別室で夕食をとっていた。私が子どもの頃は、日本でもお客様が来ると家長である父がもてなし、家族は別に食べていたことを思い出した。また、しばしばお祖母さんがテーブルに来てはもてなししが十分足りているかと声をかけてくれた。韓國のおもてなしの文化を肌で感じることができた。

今回の受け入れの経緯について、たまたま自分の子どもの通う鞍峴小学校から日本語ボランティアとホームビジット受け入れの募集があり、日本人との関わりを持ちたい、受け入れを希望したと話してくれた。働く女性である母親は大学教員として忙しく、子育ては実母に任せっきりであり、実母にとても感謝していること、学校での保護者活動にもなかなか参加できなかったが、今回ホームビジットや通訳ボランティアに取り組むことで、母親同士の交流をもつことができたこと等々、働く女性としての悩みを話し合うことができた。また子どものことについて、親族が受験に取り組む姿を間近で見ていて、自分の子

どもには受験勉強を頑張らせることよりも、やりたいことに挑戦していってもらいたいと思っていることなど、日本の状況も説明しながら話し合うことができた。いろいろな話題についてうちとけた雰囲気の中で話し合うことができたことはとても良い経験となった。

会食後、遠方のホテルまで私たちを車で送ってくれた。戻る時間を考えるとかなりの負担となるであろうが、最後まで私たちのことを使って接してくれたことに心から感謝するとともに、「おもてなし」の文化をともに共有する東アジアの仲間であることを改めて強く感じた体験であった。



ホストファミリーとの対面式(鞍峴小学校)

#### 【参加者の感想】

**橋府暢子**…………印象に残った理由は、直接、韓国の人々と話し、韓国の日常生活を知ることができたからです。「気を遣わないで、自然体でいます」と話されたお母さん、さりげない気遣いで私たちをサポートしてくださつたお父さん、慣れない英語で一生懸命説明をしてくれた娘さん、仲がよさそうなご家族の中でいろいろな話をしました。お母さんは、同じ家庭科の先生ということで、最後は、学校での生徒との接し方、教材研究のことなどもざくばらんに話し、共通点をたくさん見つけました。人としてのつながりや多くの共感を得ることができました。

**大平淑恵**…………鞍峴小学校の生徒の家庭に訪問させていただいた。英語が少し通じるという情報だったが、実際に会ってみると英語での会話は難しかった。言葉が通じないという不安。最初はお互い、よそよそしかった。しかし、アプリを活用し、会話ができるようになった。また、料理を体験した。私たちの喜ぶことは何か考えてくれた企画だった。一緒に料理をしながら会話が弾み、だんだん打ち解けてきた。家庭料理は、本当においしかった。子どもたちは常に、私たちを気遣ってくれた。言葉は通じなくても心を通わせることができる。家庭のぬくもりを非常に感じた幸せな時間だった。時間があつという間に過ぎてしまった。

**菅原理恵**…………鞍峴小学校 4 年生の児童のお宅にお邪魔した。父親は徳島大学に留学し、博士号を取得した方で、日本語が堪能だった。母親もいくらか日本語を話すことができた。様々なお話を聞く中で、持参した日本の学校の様子や我が家家の様子(小正月などの伝統行事等も含めて)、震災の様子などお見せすると、とても興味をもっていただき、また話が弾んだ。子どもは 3 人の娘がいるのだが、今回長女には会えなかった。次女と三女は物作りが大好きで、スライム作りをしながら遊んだ。父親と子どもの進路の話になり、語学関係の大学は非常に難しく、理系の大学であれば就職がとても良いなど、どこの国でも子どもの進路の問題は、親が最も心配するところであると感じた。夕食には母親手作りの家庭料理が並び、後半はスーパー・マーケットに行って商品の説明を聞きながら楽しく買い物をした。私たちを心から「もてなそう」としてくださっているのが伝わって、感激と感謝でいっぱいのひとときだった。

# 5. 成果

## A グループ

### ICT 教育と“face to face”

#### A-1 春原 秋夫

韓国では、どの学校でも全ての教室に大型テレビとパソコンが整備され、コンピューター室の設備も充実していた。教室では、ほとんどの教員がそれらの機器を活用して効果的に授業を行っており、韓国の ICT 教育のレベルの高さを実感した。日本では、ICT 環境が十分整備されていないこともあるが、教員の意識が低く ICT を活用した授業が進んでいない。参観した学校でも、導入当初は ICT をうまく使えない教員も多かったようだが、校内研修を地道に繰り返すことで克服したことのこと。韓国でのこうした取組を参考に、県内でも教員研修を充実させることにより、黒板とチョークだけの授業から脱し、ICT を活用した効果的な教育が実現できるよう施策を進めていきたい。

訪問した学校の校長に ICT 教育に関する所感を伺ったところ、ICT は必要だが、最も大切なのは子どもと向き合うこと=“face to face”、との回答。ここに、韓国、日本ともに変わらぬ教育の真髓にふれた想いである。

### 貴重で得難い交流・体験

#### A-2 新子 慶行

今回の韓国訪問は、私にとって非常に有意義で、学ぶところの多いものであった。現地の教育現場や各施設の訪問、韓国人々との交流を通じて、日本では知り得ることのできない情報を得ることができたとともに、国境を越えた人間同士の繋がりの重要性や温かさを肌で感じることができた 1 週間だった。特に印象に残っているの

は、順天旺之小学校で行った授業と、ホームビジットである。授業では、日本文化をどのような方法で韓国の人たちに伝えればよいか悩みながら準備をして行ったが、順天旺之小学校の子どもたちは非常に熱心に、興味を持って授業に参加してくれ、私自身も楽しみながら授業を進めることができた。あつという間の 40 分間だった。ホームビジットでは、順天市にお住いのご家族に、とても温かいおもてなしをしていただいた。町の市場に連れて行っていただいたり、生活や文化についてのお話をうかがったりする中で、お互いの違いを知り、それに興味を持って受け入れることの大切さを再認識することができた。

### 韓国での交流を通して

#### A-3 原 彩乃

今回のプログラムで、韓国についての興味関心が高まるとともに、韓国の文化を理解したり、教育事情を知ったりする機会となり、本当に貴重な経験をさせていただいたと感じている。また、実際に韓国の教員、児童生徒、現地の方々と触れ合う機会が多くあったことで、より理解を深められたと思っている。一番印象に残ったことは、小学校での授業である。児童の中には、「日本は、昔韓国と戦った国だ」と発言した子もいた。だが、日本についての写真や、小学生の様子を見せると、視線がぐっと集まり、目を輝かせて話を聞いてくれた印象があった。日本の伝統的な遊びとして、「福笑い」を伝えたが、日本の子ども達と同じように笑いながら、その過程、また出来上がった作品を見て楽しんでいた。子ども達の素直さ、純粋さ等はどの国でも変わらないのだと実感した。

今回、児童生徒、教員、現地の方々と直接関わり、接していく中で様々な発見があり、とても有意義な 1 週間を過ごすことができた。

### “Think Globally、Act Locally”

#### A-4 針谷 健太

「持続可能な開発のための教育(ESD)」はできると確信した。環境や国際理解や人権など、その基本的な考え方方は「言葉」としては難しい。しかし、人と人の交流やつながりや愛など、「行動」としてはそこまで難しくはなかった。期待通り、韓国の教育は先行していた。「ICT」「自由学期制」「国際理解」などそれぞれの学校現場の具体的な取り組みまで見学することができた。確かに大変勉強になったが、最も印象に残っているのは、各訪問地で、

実際に一緒に過ごした人たちとの思い出だった。日本へ留学するために一生懸命勉強をする高校生、日本のアニメのキャラクターの絵を描いてくれた小学生、一緒にビールを飲んだホームビジット先のご家族。言語や文化を超えて、コミュニケーションをとることもお互いを理解することもできた。

平和な社会を築くには、まず人と人との平和な関係を築くことから始まる。自分でも「持続可能な開発のための教育」はできると気付かせてくれるプログラムであった。たくさんの方々の出会いに感謝し、その関係を深化させていきたい。

### 「人間性教育」の可能性

#### A-5 細谷 俊太郎

ESD の実践を通して 7 つの能力・態度(批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的・総合的に考える力、コミュニケーションを行う力、他者と協力する態度、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度)を育んだとしても、それらの能力を望ましい方向に活用する力を育てる必要があり、実践・施策上の課題であると感じていた。今回の韓国教育機関の訪問により、韓国における人間性教育(Character Education)を日本でも実施し、Character(人間性、品性)を確立することで課題解決が図れると感じた。訪問したいずれの学校でも Character の確立に向けた教育が行われていた。龍江中学校では学校暴力予防委員会の結成やサークル活動等の自主的活動により、順天旺之小学校では教育目標に「正しい人格を持つ勇気ある子ども」を掲げ「虹色学校」を実践し、順天八馬高等学校では瞑想、人文学、文学紀行などを実践していた。

これらの貴重な実践を目の当たりにし、課題解決の糸口をつかめたことは、本プログラムに参加して得ることのできた最大の成果であった。

### 韓国で学んだこと

#### A-6 石田 恒平

韓国には以前にも行ったことはあったが、今回のプログラムでは観光では決して訪れるのできない韓国の教育現場の視察や教育機関などの訪問ができ、大変貴重な体験になった。それに加え、日本全国から参加された先生方と接し、様々な情報交換や交流が出来たことを本当に嬉しく思う。国内での派遣前研修から韓国の教育事情や前年度参加者の体験談、さらに ESD 活動など、

知りたかったことについて理解を深めることができ、大変有意義であった。

この研修で、私が生徒たちに伝えたいと思ったことは、暮らしや文化、考え方の多様性についてである。これらの日本や世界を担っていく生徒たちにとって、世界という広い視野をもった時、人種や文化、習慣など、自國とは異なる点に気付き、それと同時に同じところにも気づくであろう。他国を知り、理解することで、自国に対する理解も深まる。単に外国への憧れだけではなく、国際社会の一員として、世界にどのように関わりをもっていくかという意識をもってほしいと考えている。この経験をこれから教員人生に最大限活かしていきたいと思う。

### 韓国を見て、自分を見直す

#### A-7 地引 千尋

日本全国の教職員が参加し、日本の教職員を代表として韓国を訪問したこのプログラムには、普段見えないものや気付きが多くありました。韓国の中高学校や教育庁の様子や家庭、生徒たちの悩みなど直接、英語を交えて話ができることがとても貴重な時間でした。同時に、韓国での日本の教員同士での時間でも多く教えていただきました。どの先生も日々の仕事で忙しく日常を振り返ることが中々出来ないなかで、今回のプログラムの一週間で、上下なく同じ立場、状況で教員、教育関係者同士話が出来たことは、自分を振り返る機会となりました。例えば、教科の違う先生のアクティヴ・ラーニングの取り組みや、子どもへの付き合い方、大人数を効率的に動かす術、やるべきことを発見してさりげなくサポートする視野の広さ、好奇心の強さなど、見習うべきことが多くありました。

これからもこの縁を糧に、各県での取り組みにアンテナを張りつつ、皆さんに報告できるような ESD の取り組みを実行したいと思います。

### 未来を担うグローバル人材の育成を目指して

#### A-8 川崎 恵子

今回のプログラムに参加するにあたり、教育先進国である韓国の教育事情および ESD の取組状況を学び、韓国の教職員と情報を共有して相互理解を深め、さらに韓国の学校との教育交流を始めるきっかけを作ることを課題としていました。

韓国では、小中高それぞれの学校現場において、進

んだ EIU、ESD、IT 教育の実情を見せていただきました。特に、現代社会にある様々な問題の解決に向けて、自分たちの身近なところからはじめ、それにつながる価値観や行動を生み出す取組は大変参考になりました。順天八馬高等学校の教員と今後の交流に向けての約束もできましたし、日本文化の授業をした時の順天旺之小学校の児童たちのキラキラした瞳は一生の宝物になりました。

日韓の教職員と「教育」という共通テーマで交流できたことで、「人・地域・世界」とのつながり、「過去・現在・未来」とのつながりなど、私たちが様々な「つながり」の中で生きていること、そしてそのことが持続可能な未来への一歩につながるということを実感しました。そして、今まで取り組んできた様々な教育活動を ESD の視点から展開し、その理念や感覚を養うことが最も重要だと確信しました。今後は、「日韓の歴史・文化・価値観の違いを尊重し、日韓交流の架け橋となる人材」「グローバルな時代に対応できる国際的な感覚・資質・能力を備え、次世代を担う人材」の育成に尽力するという決意を新たにしました。未来を担うグローバル人材の育成に携わることの責任、そして喜びと幸せを感じています。

### 真の「おもてなし」とは **A-9 宮田 里枝**

これまで何度か、中国・韓国の教職員の方々の受入スタッフとして関わってきており、正直、「おもてなしとはこんなもんだろう」という思いを抱いていた。しかし、今回の韓国訪問で、私の中の「おもてなし」の概念は大きく揺らいだ。

まず、校門にて、どの学校でも、歓迎を表す堂々たる横断幕が張られ、我々の緊張と警戒心はすぐさま溶解した。英語という共通言語だけでなく、訪問団の母国語で表すことも、相手の心を溶きほぐす大切な要素なのだと気付く。次いで、普段の授業の様子や子どもの姿をしっかりと披露すること。これは、我々の主目的であり、この部分の充実がいかに図れるかが、訪問の充実度に直結する。準備の負担などへの考慮から、これまでプログラムへの組み入れを躊躇してきたが、今回の交流授業はなによりの思い出になった。こうした、直接交流をふんだんに取り入れること、そのためにも、訪問校と事前に綿密な打ち合わせしておくことの重要性を実感した。

「忙殺」という言葉のとおり、日々の忙しさに追われ、仕事の意義を見失いがちである。しかし、同じ「事前

準備」でも、前任者の踏襲と、訪問者の喜びや感激をイメージしながら行うのとでは、そのモチベーションも創造性も全く異なる。

韓国の古い言い伝えで、「お客様に対しておもてなしをしないと後悔する」という言葉があることを知った。「おもてなし」とは、相手の状況に思いを馳せ、心をほぐしてもらえるよう、どこまでも追究する姿勢である。その心が伝わってこそ、真の「おもてなし」である。次回、受入時では、これまで以上の「サランヘヨ」を持ち帰ってもらえるような「おもてなし」でお迎えしたい。

---

### 共通認識を持ち、協力して将来を創る **A-10 水野 鉄也**

家庭訪問に行った時、受け入れてくれた高校1年生が今の高校での学習の悩みを私に話してくれました。「数学が特に苦手です。その中でも図形と方程式が特にさっぱりです」韓国の言葉で書かれている教科書を見せてももらいました。文章は読めませんが、数式や図形、グラフは日本の教科書とまったく同じでした。日本の高校生も苦手とされる分野です。当たり前のことですが、どの国でも高校生の悩みは同じでした。また、各学校では、日本とのシステム上の違い以上に、同じ風土を持った両国の「子どもに対する保護者・教員の願い」や「生徒自身の将来の希望」を直に聞くことができ、深いところで日本と共通していることを確かめることができました。

このような日韓両国が、教育の分野で同じ方向に進んでいるのは決して偶然ではないことも知りました。ユネスコのプロジェクトの1つである「ESD」の観点には、「人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと」などがあります。このために、日本では生徒が主体的・協働的に活動するアクティブ・ラーニングがあるのと同様に、韓国では学び合いを取り入れた「協働的学習」型の授業があることも知りました。すべての生徒の幸せを願い、生徒が自らの力で未来を切り開けるように導いていくことが教員の仕事であることも両国に共通した認識だと分かりました。両国とも、この ESD の理念に基づいた「グローバル意識」をもつ人材を育成するために、今後も協力関係を結ぶ必要があると感じました。

---

### 誇りと自信、連帯と絆 **A-11 中川 とも子**

何より、韓国の先生方が誇りと自信を持って指導にあたっている姿が印象的だった。特に、今回初めて訪問し

た全羅南道は、島が非常に多く、全体の 7 割が小規模校だが、教育環境の維持・向上に向けて、人的配置や予算の確保、教職員研修、保護者支援など、様々な方策を講じている、教育庁スタッフのアグレッシブさに感銘を受けた。また、普段の授業をフリーに参観させて頂くだけでなく、順天旺之小学校では交流授業で、順天八馬高等学校では Q&A、散策などで、児童生徒と直接ふれあうことが出来たのが、非常に思い出深かった。出国前日のオリエンテーションも含め 7 泊 8 日のハードな日程ではあったが、日本全国の教職員、ACCU のスタッフの方々、韓国スタッフの方々と乗り切っていく日々の中で、何とも言えない連帯や絆が生まれたように思う。この得難い経験を通して、韓国の人々および教育・文化を一層理解し、自分の言葉で発信することが、私のこれから役目だと考えている。

---

### 「友だちのいる国」としての交流の大切さを実感した A-12 中嶋 たや

今回このプログラムに参加した動機は、まずは自身が身近な国である韓国について、少しでも深く知りたいと考えることであった。語学の面での不安が大きく、「好奇心はいっぱいだが何もできない。」で終わる不安があった。実際に参加して、個人のレベルで少しづつではあっても色々な方と会話し、交流できたことは間違いない。たとえば、順天旺之小学校での好奇心旺盛な少年との交流。日本の文化の紹介で出てきた言葉を「日本語ではどういうの？」と 1 つずつ確認し、ノートにハングルで書き留めていたことが印象的であった。また、歓迎晩餐会や最後のレセプションの中で、一步踏み出して話しかけた方々と、ほんの少しでも意志の疎通を図ることができたことは嬉しかった。「友だちのいる国」との小さな交流の積み重ねが、国同士の交流を作っていくのだと感じた。各学校訪問でも、席を近くして、もっと率直に話ができるから、もっといろいろな話ができ、交流が深まったであろうことは残念である。

---

### 異文化理解の原点 A-13 楢府 幟子

異文化理解において、日本と全く違う気候、風土、言葉、宗教などを持つ国々へ行き、学ぶことはその人に大きなインパクトを与え、1つの起爆剤として有効である。しかし、文化の違いは家庭ごと、学校ごと、地域ごとにも存

在する。その小さな違いに気づき、それを受け止め、身近な人々と共生していくことは、とても重要な事である。その意味で、地理的にも文化的にも近い存在である韓国訪問は、多くの共通点とその中にある小さな違いをたくさん見つけることができ、異文化理解の基本を見直すよい機会であった。また、実際の訪問を通して出会った ACCU や行政の方々、学校の先生方、児童、生徒、訪問先の家族の方々のお話、気遣い、考え方などに強く共感を覚えた。共通点が多いからこそ短期間でこの隣国について多くを知り、学ぶことができたとも思う。この訪問を通じ、自分の身近なところをしっかりと理解するという基本を改めて感じた。

---

### 韓国の児童生徒と触れ合って A-14 野木 雅生

今回の研修で一番の収穫は、「韓国の児童、生徒の声を聞けた」ということである。プログラム前の韓国児童生徒に対しての印象は、「勉強や受験で大変」という、ただ漠然としたものであった。実際プログラムに参加して、韓国の児童生徒は確かに勉強で大変ではあるが、「将来のビジョン」をしっかりと持っているのだと感じた。私が長い時間触れ合うことができた高校生は日本語を勉強していて、「将来、国連や外国で仕事をしたい」とはっきりと自分の言葉で話をしてくれた。また、通訳ボランティアも、日本人と触れ合うことができて、自分の話す日本語が伝わるかどうか判断できる貴重な経験になると笑顔で話をてくれた。そのような高校生と出会い、私が今まで出会ってきた児童生徒は「将来」についてしっかりとと考えていたのか、教員である私が児童生徒に考える機会をしっかりと与えていたのか思い悩んでしまった。小学生 1 人ひとりに「将来のビジョン」をしっかりと持たせるのは難しいかもしれないが、何かに対してしっかりと「目的意識」を持たせることは可能であると改めて感じた。このような思いを持たせてもらうことができた今回のプログラムは教員である私にとってとても大きな経験となつた。

---

### 本プログラムを通じて学んだこと A-15 淋 憲一郎

日韓国交正常化 50 周年の今年、プログラムに参加することができて大変有意義であったが、参加するにあたっては不安が大きかった。私自身韓国についての知識が乏しく、マスコミが報じる印象が強かった。しかし実際

に自分の目で見ることが大切だと思い、参加させていただいた。参加するにあたり、私は2つ目標を立てた。1つ目は韓国の教育事情を知ること。2つ目は順天旺之小学校での文化交流授業を成功させることである。

まず、1つ目の韓国の教育事情を知ることであるが、実際に学校の施設を見学する機会があり、ICT機器の充実に驚いた。各教室にはパソコンと接続された大型テレビやプロジェクターが設置されており、教員が扱いに慣れていて、効果的に教材を提示できる環境となっていた。デジタル教科書を使用した授業が行われており、教員や児童生徒の活用能力の高さを知ることができた。また中学校での自由学期制や虹色学校、みんなが幸せになるための教育など、日本とは違う教育事情を知ることができた。

次に文化交流授業を成功させることであるが、私は日本で小学校3年生を担任していて、同じ学年で授業を行うことができた。風呂敷を扱った授業を行ったが、子どもたちが目を輝かせながら活動に取り組む姿を目の当たりにして、子どもたちの目の輝きは万国共通であることを実感することができ、とても貴重な体験となった。また日本の風呂敷という文化を見直すいい機会となった。

今回の研修では、韓国の子ども達や先生方、ホームビジット先の家族、そして日本の教職員との出会いが、私にとって大きな宝となった。ホームビジット先の家族が、一生懸命に我々をもてなしてくださったり、日本の教職員とは夜遅くまで語り合ったり、人と人が直接関わること、人がつながっていくことの大切さを学ばせてもらいました。このような機会を与えて頂いたことに感謝し、今回学んだことを子ども達や日本の教職員に還元していくい。

## 韓国の教育現場を見てみれば

### A-16 田頭 賢太朗

ACCUの方の周到なサポートと、訪問受入に対する韓国側の熱意により非常に内容の充実したプログラムとなった。本プログラムの優れた点は、首都・ソウルと地方都市・順天市の双方を訪れ、また実際の教育現場である小・中・高の各学校と、教育行政の現場である教育庁の双方を見る、といった具合に、幅広く韓国の教育制度を観察できることだと思う。地域や学校によって抱えている課題や、取り組みは一律ではないからである。同時に、訪問団が多様な教職員で構成されているので、日本側も地域差や、学校差をふまえた議論が出来ることも利点であった。

韓国と日本が「似て非なる国である」とは繆々言われることだが、本プログラムに参加して韓日の教育制度の在り方が類似しており、従ってその背景にある社会の在り方も共通する部分が多いことが理解できた。それだけに制度の細部や、新しい取り組みに見出される両国の差異を調査することは、日本の今後の教育を考える上で有益な作業だと感じた。

## 私たちは地球人

### A-17 高橋 松雄

「先生、韓国ってどんな国なの？」生徒のシンプルな質問に答えられない自分がいました。答えたのは首都がソウルであることと、キムチを好む程度でした。しかし、生徒が求めていたのは表面的な情報ではなく、そこで暮らす人々や同じ年代の中学生が何を学び、何を感じているかということでした。

はじめに訪問した龍江中学校で韓国の生徒・教員と接することができたのは大きな収穫となりました。まずICT化です。本市でもICT化を進めようとしているところです。電子黒板やタブレットなどの設備導入が進んでいます。訪問した龍江中学校では全教室に電子黒板が設置されており設備が充実しているだけでなく、それらを使いこなしている教員の姿が目につきました。日本でもICTを適切に活用し教育を一層充実させるべきであると思いました。

次に英語教育の充実です。街を歩いていて話しかけると英語で何とかコミュニケーションを図ろうとする人が多いことを感じました。またホームビジット先の小学生の英語の能力の高さに驚かされ、英語教育の充実をうかがい知ることができました。2020年に日本でオリンピックが開催され、多くの外国の方が訪れます。これを機に英語教育の充実を図ると同時に、韓国の中学生と意見交流を図りたいと思います。

最後に、このプログラムを通じて人々の物事に対する根本的な考え方同じであると感じました。未来を見据え、これからは互いの国が、いや多くの国の人々が様々な形で交流することが大切であると感じました。

## 「近くて遠い」されども実際は「同じ」と感じた韓国

### A-18 田中 福人

私自身は、今回が初めての訪韓であった。昨今、歴史問題や領土問題の影響で、日韓関係は悪化の傾向

にある。ゆえに韓国は、物理的な距離は近いが、心の距離は遠い国だという印象を受けていたので、訪韓前は少なからず身構えていた部分があったと思う。しかし、本プログラム中に交流できた韓国の児童生徒達は皆、自分からコミュニケーションを図ろうと積極的で、そこに心の距離は存在しなかった。このような児童生徒が育つ背景には、教育の効果が多分に影響している。ICT 教育・国際交流活動・進路探索活動など、地球市民教育を軸として、子ども達の能力を積極的に伸ばそうとしている韓国の教育体制に敬意を払いたい。政治的な問題は存在しても、豊かな未来を支える子ども達への教育に傾ける情熱は、日韓において違わないと切に感じた。私も、日本国内において、地球市民の一員としてグローバルに活躍できる人材を育成するため、本プログラムで見てきたもの、得られた知識を存分に活用したい。

### 良き隣人として

#### A-19 内海 まゆみ

どの訪問先でも日本語の垂れ幕やパンフレットを用意して迎えていただいたとき、教育関係者のおもてなしの心に感動した。生徒の人間性や学習意欲の向上、精神面でのフォローなど教育に携わる者同士、種々の取組への成果と課題について、ざっくばらんにお話しつけ、とても参考になった。また、授業を参観した3校とも電子黒板が活用され、教員の熱意や技能の高さも実感した。

出会った児童生徒は皆明るく、礼儀正しく、積極的で、好奇心とエネルギーに満ちていた。学校が、生徒を認め、自分らしさを発揮できる場所となっていることの証明であろう。何のために学ぶのか、どの生徒も目的意識がはつきりしていて、将来の夢に目を輝かせて話してくれた。そのような生徒に育てていきたい、育てなければ、との思いを強くした。国と国との間には壁や溝がないとは言えない。しかし、今回の韓国訪問で、共に未来を築いていく仲間と出会うことができた。今後も良き隣人として学び合っていきたい。

### 交流の輪

#### A-20 和田 恵子

今回このプログラムに応募した最大の理由は、大好きな韓国のこと了解更多知りたい、韓国の方と交流したいということだった。そのため、小、中、高等学校を訪問して、先生方や児童生徒たちと交流できたことは、とても有意義なことだった。

また、文化施設見学やホームビジットで、順天八馬高等学校の生徒さんたちと長時間一緒に過ごせたことはすばらしい経験であった。いろいろなことを話題にでき、交流が深まった。生徒たちが日々に「自分たちの町は穏やかで、住みやすい町だ」と自信を持って話してくれ、私も、生徒が自分の町や国のこと愛し、誇りを持つような教育をしていきたいと改めて感じた。

このプログラムに参加して、子どもたちからパワーをもらい、いろいろな人に支えられて、多くの人々と交流することができ、これからも交流の輪を広げていきたいと強く感じた。また、お世話になった A グループの先生方も、これからも交流を続けていきたいと思う。

### 豊かな交流

#### A-21 山地 陽子

特に印象に残るのはホームビジットである。訪問する私たちのためにごちそうを用意し、大変温かくおもてなしをしていただいた。夕食を囲みながら、いろいろな話をして韓国の文化や、学校のこと、家族のことを話した。夕食後にはこちらから持参した浴衣を高校生に、訪問先の母が用意してくれたチマチョゴリを私が着て伝統的な服装の交流をした。はじめて着る浴衣をとても喜んでくれて、本人だけでなく母や兄弟も喜んで写真を撮っていたことが印象的だった。訪問前の不安もあったが、温かく接してくれる家族にうれしく思った。

政治上、日韓関係はいろいろな問題があるが、実際に交流したみなさん予想を遥かに超えてとても温かく歓迎して下さった。国を超えて人間同士の心が通いあつたという実感を得られたことが、この上ない成果ではないかと思う。韓国での熱烈な歓迎や文化交流をしていただいた恩返しに、これからも直接の交流を大切にしていきたい。

### 訪韓を終えて

#### A-22 柳川 真弓

私はこれまでに 5 回ほど韓国を訪問してきた。過去の訪韓では、観光中に韓国の方と接してみると、日本にとても興味をもっておられる方や、英語で交流できる方が多いという印象をもっていた。また、笑顔で礼儀正しく接してもらい、とても嬉しかった経験があり、このように温かく接してくださる人が多い韓国ではどのような教育が行われているのか興味をもち、今回のプログラムに応募した。

たくさんの貴重な経験や活動の中で、一番印象に残っているのは、順天旺之小学校訪問である。とりわけ韓国の児童に授業をすることに、かなりプレッシャーを感じていた。私の話をしっかりと聞いてもらえるだろうか、内容を理解してもらえるだろうかなど、様々な不安があった。実際には、韓国の子ども達も日本の子ども達も、「外国のことを知りたい」という気持ちは同じなのだと感じた。とてもきらきらと輝く表情で話を聞いてもらい、安心して授業を行うことができた。

今回、実際に自分で見て、聞いて、体感できたことは、本当に貴重な経験となった。たくさんの方々に支えていただき、充実した活動になったことを感謝している。

## B グループ

### アルムダウンセサンへ共感と理解 ともにつくる美しい世界～ B-1 樋口 豊隆

まず、本訪問の私の目的は二つあった。

①日本の中学校教育の長年の課題は、思春期の子どもたちの自尊感情や自己肯定感をいかに向上させるかにあり、本校ではこのことに全教育活動を通じて取り組んでいる。韓国では、この課題をどう受けとめ、どのような取組を行っているかを理解し、本校の校内研究に資すること。②「音楽」は言葉の違いを超えて、人の心に届くことを、外国で初めて行う授業を通じて取り組んでみたこと。

①については、東京都が開発した「自尊感情測定シート」の韓国語版をソウル大学校師範大学附設女子中学校1年生、龍江中学校2年生で実施していただくことができたとともに、訪問した女子中学校では中学2年生の生徒との会話や授業・昼休みの生徒の様子をみることができた。また、京畿道教育庁ムン・ビョンソン副教育長から、子どもたちの自尊感情のあり方や教育の方向性についてご意見を伺うことができた。②については、鞍峴小学校5年生の授業で日本の歌や韓国の歌を紹介し、訪問させていただいた全ての学校で音楽での歓迎セレモニーがあり、音楽が互いの心に温かく届くことを実感した。本プログラムに参加し、韓国との共通性、違いを直に体験することで、自分の学校経営や自分の教育理念について確信を得ることができたことが最も大きな成果である。

### 韓国の教育制度改革に触れて

#### B-2 川崎 貴志

韓国の教育事情はおろか、訪韓の経験もなく、韓国に対してほぼまっさらの知識であった私にとって、今回のプログラムへの参加は、当初、期待と不安が入り混じったものであった。しかし、実際に訪韓し、各学校の私たち訪問団への歓迎振りやホームビジットの御家庭での心温まる接待を受けていく中で、そのような不安も吹き飛んでいった。どの研修プログラムも印象に残るものばかりであったが、その中で最も有意義であったのは、京畿道教育庁の訪問であった。

京畿道教育庁は、韓国の中・高・高等学校の25%を占め、実質的に韓国の教育をリードしている。その教育庁が、「革新教育」を教育方針として掲げ、これまでの競争を基にした大学入試制度から、人生を学ぶ教育へと教育政策の大転換を図っているという説明に、韓国も日本の教育制度と同様の課題があり、その解決のために日本と類似した方法で解決を図ろうとしている点が非常に共感できた。訪問した鞍峴小学校が、HappySchoolを教育目標に掲げ、革新教育を創造的に進めている様子を垣間見ることができ、大きな刺激を受けた。

### 韓国におけるICTの普及と課題

#### B-3 青鹿 吉洋

訪問した学校全てに、ICT機器の充実をこの目で確認できたことは大きな成果の一つである。通常の授業に、機器を日常から積極的に利用している様子が伝わってきた。ある教室には3Dプリンタが設置されており、最新の設備の普及にも配慮する様子も伺えた。ただし、タブレットなどの端末は見受けられなかった。訪韓する前の印象では、ICT機器も最新のものが設備され、ますます発展している様子を想像していたが、例えば、電子教科書の導入を当初の予定を変更して、経過を見ながら対応していくという話も聞き、詳細を伺うことはできなかったが、ICT教育の課題の一つと捉えることができた。これも実際に訪問をすることでしか分からないことだと思った。現在、韓国の教育は、これまで詰め込み教育から、創意人材の育成に力点を移動し、人間性を重視しているとのこの説明を受けたが、それとICTをどのように関連させて活用させていくのか、その行く末に興味があり、今後の課題の1つにしたい。ICTは、グループ活動など討論型の授業やプレゼンテーションなどの発表型の授業を

充実させていくと予想されるが、ICT 機器の活用は、その補助的なものになるにしろ環境として整えられている現状はすばらしいと感じた。

### あたたかなおもてなし 心と心のつながりを

#### B-4 新井 真理

今回のプログラムに参加することができ、教員として貴重な経験をさせていただいたと感謝しております。韓国訪問では、小・中・高等学校を訪問して、あたたかい歓迎を受けた。チマチョゴリを着ての伝統的な楽器の演奏、オカリナでの「ふるさと」の演奏などは心にしみこむ感動があった。

鞍峴小学校での交換授業では、日本の小学校の紹介、着物と浴衣の紹介、マイうちわづくりをした。子どもたちは、私が何か話すたびに「カムサハムニダ」と言ってくれた。また、うちわの絵には日本と韓国が握手をしている絵を描いてくれる子がいた。クラスを去るとき、「I love Japan!」と言ってくれた。短い時間だったが、日本を好きだと言ってくれたことが嬉しかった。

ユネスコスクール担当として、日本の子どもたちと世界をつなげたいという目標ができた。また帰国してからも情報交換をしたり、アドバイスをいただきたりできる仲間もできた。「心と心のつながり」を作るために学び続けたい。

### 私にできること

#### B-5 堂代 正道

現在の韓国の教育政策は、自由学期制や、人間性教育といった教育方針に変換しようとしていると聞いて、韓国が大事にしている教育は何なのかを知る機会になりました。参加したプログラムは全て驚かされる内容ばかりで、私にとって韓国は大変すばらしい国であると目に映りました。日本と韓国の教育は「1人ひとりの人間性や思いやりを尊重する」という点で共通点があります。その方針を実際に指導、進めていくのが私たち教員です。私たち教員が日本と韓国の子どもたちにどうお互いの国を理解させていくか、それによって将来の日本と韓国の関係が大きく変わっていくことでしょう。その役目を私たちは担っていくことになります。今回の韓国研修で韓国の人々の温かさを感じました。そのことを私は正しく伝える義務を強く感じています。このプログラムの素晴らしさと、プログラムに

参加したいと思ってもらえるように微力ながら頑張っていきたいと思っています。

### 韓国での様々な「つながり」

#### B-6 原野 公輔

♪ムンドウクエロブタヌッキルテンハヌルルバヨ……。  
チャグンガスムガスムマダコウンサランモアウリハケムマ  
ンドウガヨアルムダウンセサン♪今でもこのメロディーが  
頭の中で鳴り響いています。この1週間、この曲を通じて  
日本の先生方、それに韓国の先生方、スタッフの皆さん  
など、たくさんの方々と「つながった」気がします。とても  
実り多かった韓国での1週間。とてもすばらしい経験をさ  
せていただいたというのが率直な感想です。

学校訪問では、教育施設・設備、特にICTの充実ぶり  
に驚き、子ども達が熱心に学習に取り組む姿が印象的  
でした。子どもが一生懸命な姿は日本も韓国も一緒です。  
言葉は通じなくても、身振り手振りで示すことで、お互い  
を少しずつ理解し合い、コミュニケーションを図ることが  
できることを実感しました。お互いの違いや共通点をよく  
知ることが必要だと改めて感じました。また、韓国の教育  
が今までの受験戦争一辺倒から、自由学期制の導入及び  
ESDの推進、討論や協働学習、体験活動を中心としたカリキュラムを編成し、人間性を重視した教育へと転換  
しているなど、大変興味深いものでした。

### 「つながり」の始まりに

#### B-7 實迫 浩二

私は本プログラムに参加して、より「韓国の人たちとつながっていきたい」という思いを強く持つことができた。そのきっかけは、鞍峴小学校訪問とホームビジットにある。

鞍峴小学校では文化交流授業をする機会をいただき、熊野筆を使った書写の授業をさせていただいた。「友」という字を一生懸命書く子どもたちの姿も印象的であったが、さらに驚いたことは、授業後に書いてくれた感想の手紙であった。その手紙には、日本語でお礼が書いてあったり、日本の国旗と韓国の国旗を仲良く繋いでいる絵が描いたりしてあった。その韓国の子どもたちの「日本に対する思い」に私は一番感動した。また、ホームビジット先の女の子も、日本の子どもに向けての手紙を用意してくれていた。ここでも日本に対する熱い思いに直面した。

このような感動と共に、自分の学級の子どもたちのことを考えた。このように他国の人たちとつながっていく機会

や平和への思いを育てる機会を与えることができていなかることに改めて気付かされた。より「つなげていきたい」と強く思えた瞬間であった。

そして、その「つながり」を持つために欠かせないものが、お互いを尊重する心であると考える。お互いの違いや似ているところを理解し、それを踏まえた上で関係を持っていく。その平和への土台作りを行いたい。本研修が韓国との「つながり」の始まりでありたいと思う。

---

### 未来を語る B-8 池田 康人

異国人を目の前にしたとき、我々日本人はどれだけそれに見合う行動ができるだろうか。私もそうだが、たいていの日本人は委縮し、異国の人たちとの会話を避けて通る傾向はないだろうか。

私が今回のプログラムで一番印象的だったのは、様々な校種を訪問したときの子どもたちのコミュニケーション能力の高さである。日本語や英語を使って積極的に話しかけてくる多くの子どもたちに私は驚かされた。「こんなにちは」、「一緒にやりましょう」、「ありがとうございます」など。中でも「日本が大好きです」、「日本で仕事をしてみたいですね」という言葉に感動した。

今年で日韓国交正常化 50 周年。過去には悲惨な歴史も多々あったであろう私たちが、求め合い、互いの教育や文化を学び、歩み寄ろうとしている。反省だけでは前に進めない。子どもたちに触れ合うことで、これからの方を語り合える可能性に、私は大きな期待と希望を感じた。

---

### 今回の韓国との交流で学んだこと B-9 神藤 恭光

韓国の教育の現状を知るという点では、訪韓初日に韓国の教育についての講義があり、さらに、京畿道教育庁を訪問し教育行政の取組について説明を受けることで、韓国がこれからどのように教育改革をしていくかしているのかがよくわかりました。また、校種の異なる学校を訪問し、子どもたちの発達に応じた授業内容や展開、ICT 機器の整備された教育環境、地域性を活かした学校作り、ESD の観点の取り入れ方等について、学校の現状を直接知る貴重な機会となりました。

鞍峴小学校を訪問したときに、日本の先生方が交流授業を行いました。前日までは、各先生方は不安そうな表情でしたが、いざ授業を始めると、生き生きとした表情

で授業をしている姿や、最後の報告会に向けて先生方が協力して前向きに取り組む姿を見て大変感動しました。このプログラムにおいて、国際交流の意義はもとより、私たちが教育に対する考え方を見直すいい機会になったと思います。

今後も、日本と韓国がよりよい友好な関係を築き、交流できるようにしていきたいと思います。

---

### 言葉は通じなくとも B-10 加藤 健次郎

昨年の 9 月、本校で中国教職員の受け入れを行いました。私は教員になる前に台湾の幼稚園で働いていたことがあり、中国語が話せたため、この受け入れの対応を行うことを決めました。これが私とACCUとの出会いです。これまで、様々な国を訪問してきたが、全く読めないハングル文字にアレルギーを感じ、日本から一番近い国であるのに近づこうといなかった自分がいました。そんな中での今回の訪韓で、やっと私の気持ちは韓国に近づくことができました。プログラムの中で様々な貴重な経験をさせて頂いたが特に印象に残っているのは、韓国のお子さんたちとの直接的な関わりです。

鞍峴小学校での交換授業では、5 年 3 組(男子 15 名・女子 15 名)の児童に、体育館で授業をさせていただいた。日本出発前に通訳なしでの授業と聞いていたため、当初は韓国語を覚えて授業をしようとも考えていた。しかし、いろいろ考えたうえで、言語での解決よりも、もっと大切なものをを見つけたい・感じたいと強く思うように私の気持ちは変化していました。私の日本語が韓国の生徒に理解できなくても、言語ではない伝わるものを感じたいと思いました。

日本のラジオ体操の音楽を流し、「1、2、3、4…」と大きな掛け声をかけながら手本をしました。生徒たちも見よう見まねで、独特な動きを笑いながらも元気よく体操してくれました。その後、けん玉、こま、折り紙といった日本の昔遊びを紹介してみんなで体験しました。児童に、どこまで私の思いが届いたかはわかりませんが、今回の訪問・授業を通して子どもたちが日本に興味をもち、何らかの刺激になってくれたら嬉しく思います。これで交流は終わりではなく、今後も引き続き彼らとつながっていけたらと願っています。さらに韓国の子どもたちと日本の子どもたちの交流を実現できたらと思います。このプログラムを通してたくさんの人にお会いしました。この出会いを、次の出会いにつなげられるようにしていきたいと思います。

---

## 韓国における学校教育の在り方と存在意義を知る機会 B-11 小出 一也

同プログラムでは ESD を実践しているユネスコスクールを中心に、韓国の目指している「人間性を養う教育」を教育庁及び諸学校の訪問を通じて実際に目にし、そして世界文化遺産や樹木園を訪ることによって韓国の歴史、また日本がどのように関わってきたのかを知ることができた。特に教育に関しては、「人間性を養う教育」の実践ということで、生徒が単なる知識の理解にとどまらない、他者とのコミュニケーションを通しての相互理解を行う教育を実践していた。また、自由学期制の導入など様々な革新的な教育が行われていた。このような取り組みに対し、保護者は一部の外国語・科学などのソウルにある大学への進学に有利な、特殊目的学校以外の学校に対する期待感は低く、放課後の進学塾に期待している様子が伺えた。これは特殊目的学校以外が無試験で公立・私立関係なく高校まで進学でき、同じ内容の教育を受けることができる平準化が行われていることが原因であるようである。「差」が生じないことは一見すると大事であることのように思われるが、大学進学や大学卒業後の就職などで「差」が生じる現状があることから見ると、教育の平準化によって「差」を無くすのではなく、それぞれの「差」(学力差等)を埋めるような各学校の実情に合わせた柔軟な教育実践が必要であることを再認識させる訪問となった。

---

## 우리 함께 만들어 가요 (私たち共に作って行こう) B-12 町田 直美

韓国招へいプログラムを振り返り、有意義だったことをあげるならば、우리 함께 만들어 가요(私たち共に作って行こう)この言葉に集約されます。

우리 함께 만들어 가요(갑니다.)私たち共に作って行こう。(行きます)この言葉は、歓迎レセプションで披露した韓国の歌の一部で、今回の訪問団の共通の想いででした。この言葉が偶然にも、訪問先の京畿道のパンフレットに書かれており、日韓国交正常化 50 周年の節目の年に、私たち訪問団が橋渡しとなって、韓国と日本が共に友好的な関係を作つて行く未来を感じることができました。

教員は、授業が勝負です。今回の交換授業では、日

本での特別支援教育の経験を活かし、韓国の子どもたちと共に分かり合える授業づくりを心掛けました。聞きわけられる簡単な韓国語を用いること、見てわかる視覚支援教材を用いること、理解度を机間巡回しながら授業をすすめることなど、日本での特別支援教育の基本である授業スタイルを心掛けました。私のたどたどしい韓国語でも、視覚支援教材を用いることで韓国の子どもたちの理解を促し、見て分かる教材を使用することで言語の壁を越える理解が生まれる等、交換授業を通して「分かり合える授業とは何か」を実感することができました。また、参加した韓国の子どもたちからの「楽しい授業だった」と言う感想文からも、分かり合える授業をすることで、国が違つても、教員の思いは伝わることが分かりました。

우리 함께 만들어 가요(私たち共に作って行こう)この言葉を今回の韓国招へいプログラムで終わりにせずに、今後、更に実現、展開させていきたいと思います。

---

## 知らぬは罪、伝える使命 B-13 槙田 雅江

今回の韓国招へいプログラムで、多くのことを学ぶとともに、はっとさせられる瞬間があった。華城訪問の際、世界遺産である美しい建物の横にフェンスに囲まれた小学校があった。不思議に思い、「どうしてこんなところに小学校が建っているのですか?」と、ガイドさんに尋ねてみたところ、「日本統治時代に、日本軍によって多くの建物が壊され、その後、小学校や警察が建築されたのです。」とのことだった。歴史上の出来事として、日本が韓国を植民地にしていたことは知っていたが、このような形で歴史が刻まれていることを、恥ずかしながら知らなかった。学校、教育庁、歴史的建造物などの訪問をする中でそこに生きる人々の温かさを肌で感じることができた。ともに手をとり、平和な未来を創つていくためには、まず互いを知ることから始まると、このプログラムで実感した。歴史的な見解の差異や、同じ出来事でも様々な立場から見ることで、少しずつズレが生じるだろう。しかし、なぜそう感じるのか、そう考えるのか、相手の状況を理解しようと努力する姿勢を、未来を担う子どもたちに伝えていく使命を感じた。

---

## 未来志向の日韓関係の構築

**B-14 三田村 剛**

韓国では、自由学期制の導入など、教育改革を積極的に進める国の姿勢を肌で感じた。中でも、競争原理を用いた教育から、違いを受け入れる他者尊重を重視した教育への方針転換に共感した。日本では急速なグローバル化の中、主張力が弱いという指摘があり、主張を明確に伝える力を伸ばす学習が増えている。日本と韓国の現状から、教育がその国の在り方を形づくる重要な要素であることを実感し、教員の責任の重さ再認識した。

一方、情報網の発達により、情報を容易に入手できる時代になったが、便利な反面、情報を鵜呑みにする危険性にも気付かされた。メディアの情報は部分的なものであり、かつ情報提供者の意図が含まれることが多い。このような観点から、批判的に情報を捉えたり、実際に確認したりすることを通じ、自分で事実を把握する必要性を児童に伝えたい。本プログラムに代表される日韓の交流を促進する事業は、お互いを尊重し未来志向の関係を構築する機会となると考える。

---

## 近くて親しみのある隣人として

**B-15 室井 明**

韓国は「近くて遠い国」と言われてきた国である。見た目も言葉も似ているし、文化的にも近いのに、心理的には遠い国のように感じる。それは、人々の交流が物理的距離の近さに比例しておらず、進んでいないからだと思われる。地理的にとても遠く、文化的にも異なるアメリカに親近感を覚えるのと対照的だ。今回のプログラムで最も有意義であった点は人ととの直接の交流ができたことである。コミュニケーションの基本は1対1の場面から始まるからだ。特に今回のように教員同士の場合はその効果はさらに大きくなる。京畿道の教育庁での話の中にあったとおり、「世界を変えるのは人、人を変えるのは教育」という言葉が身にしみた。視察させていただいた学校では、いずれもIT機器の充実ぶりが目に付いた。また教育改革に力を入れている国の姿勢の反映であろうか、子どもたちの伸びやかな姿が大変印象的だった。

このプログラムが始まって15年、延べ2,000人の教職員が交流したと聞くが、このような地道な取り組みから、もっと大きな学校単位の取り組みへと発展することが、近くて親しみのある隣人としての日韓関係の構築に繋がる

と実感した研修だった。

---

## 出会いに感謝

**B-16 大平 淑恵**

まず、韓國の小、中、高等学校を訪問することができた。子どもたちが真剣に話を聞き、学習する姿がとても印象的だった。廊下ですれ違うと、挨拶してくれる。心が和んだ。韓國の教職員との交流の場では、子どもたちが抱えている問題や現状について話をすらることができた。国や言語が違っても、子どもたちを何とかしたいという想いは同じであるということを感じた。また、ホームビズット先の家族との出会いを通して、言葉は通じなくても、打ち解けてくると笑顔で接することができるようになった。家族のおもてなしの心は、韓國も日本も同じだ。本当に貴重な経験だった。そして、一緒に過ごしたメンバーとの出会い。語り合った時間は忘れられない思い出だ。「アルンダウンセサン」の歌をみんなで何度も練習した。披露すると、韓國の方々が一緒に歌ってくれた。歌詞にあるように、美しい世の中になるように。そして、出会いに感謝している。

---

## 夢を語れる教育

**B-17 大西 義浩**

「日本で働きたい。」訪れた学校の生徒が言った時、衝撃を受けました。その生徒の持っている可能性、エネルギーを強烈に感じました。流されて、夢どころか自分の可能性を見出そうとしない生徒ばかり目についた、いや、自分がそういう風に生徒を見ているせいか余計にそう感じました。

プログラムに参加されていた自尊感情について語られている先生の話を聞いていると、自尊感情という言葉も忘れないことに気付きました。支援学校に勤務して、障害者の置かれている厳しい現実の中で過ごしているうちに、視野が狭くなっていたのでしょうか。支柱のようによると支援していくのではなく、空を飛んでいくように、成長していくように、下から螺旋状に風をおこすように支援していく、そういう気持ちを持って教育活動していきたいと痛烈に感じました。

このプログラムは、自分が忘れないものを思い出させてくれ、また新たな活力を与えてくれる一面も持つていると思いました。

---

## これからが本番！ B-18 佐々木 哲弥

今回の研修の目的は 2 つあった。

1 つ目は勤務校の ESD・ユネスコスクール担当として交流先を見つけることであった。今回、KNCU や ACCU の方々とのかかわりから、今後の交流の具体的なチャンネルを得ることができた。また教員との交流はとてもよい学びとなった。今後の課題は、具体的に交流を進めていくため、関係機関と連携をとりながら、ESD カレンダーを活用して教育計画に位置づけ持続的な取り組みとしていくことだ。

2 つ目は韓国の ESD の取り組みを学び、自校の活動に生かすことであった。韓国人間性教育やキャリア教育を中心に行う ESD の取り組みは、現実的であり、現状の課題に対応していた。そのよさを我々の ESD 活動に取り入れながら、これで積み重ねてきた私たちの取り組みを交流活動も加えて、活発にしていきたいと考えた。

日韓の学校文化には共通点が多い。今後、地域的問題のみならず、地球規模の問題を解決していくためのパートナーとなれるよう、直接かかわった我々がその担い手になり、世界に広めて行きたい。これからが本番だ！

---

## 美しさの発見 B-19 菅原 理恵

「日本は美しい国」、「○○は美しい国」。

昔観た映画の中で戦争のさなか、ある小学校の女性教員が子どもたちに板書して見せながら、どこの国も美しいものをもっている、と語るシーンで見た言葉である。今回このプログラムに参加させていただいた私の感想は、まさに「韓国は美しい国」「日本は美しい国」である。

このプログラムに参加する前、私は 3 つのことを目的にこのプログラムに臨みたいと考えていた。1 つは、韓国の教育事情を見聞きし、ESD や学力向上への取組を学んで、現任校の ESD の取組やそれと関連させた校内研究の教科である国語科の学習へと生かすことはできないか探ること。2 つめは、地球市民教育(GCED、シチズンシップ教育)とはどういうことか以前から興味があり、韓国での具体的な取り組みを学び、現任校や地域の教育に役立てることはできないか考へるということ。3 つめは、東日本大震災で私たちは韓国の方々にもたくさんのご支援をいただいているので、感謝の気持ちを伝えるとともに、韓国という国を見つめ直しもっと理解を深めたい

ということである。

実際に韓国を訪問し、プログラムが進んでいくと、韓国の方々の心遣いや真摯な姿勢に感動することが多く、当初の目的は忘れていたような気がするが、振り返って見ると目的以上に学ばせていただいたという思いが強い。

まず 1 つ目の教育事情であるが、鞍峴小学校・ソウル大学校師範大学付設女子中学校・京畿自動車科学高等学校・京畿道教育庁・ホームビジットなどの活動で教育改革を行い、「全人教育」を実践していることを十分に見て取ることができた。そのときはっきりと感じたことは、韓国の教育は目的がはっきりしているということである。どこの学校の子どもたちも皆可愛らしく素直でよく話をしてくれた。その中でも忘れられないのが、「授業」を通して子どもたちと触れ合ったことである。どこの国でもやはり私たち教員の仕事は授業であること、「授業」を通して、学力とともに人間としての生き方も学ばせているのだということを強く感じた。今回授業では、敢えて日本文化の紹介だけでなく、「日本の言葉」を使った遊びや言葉のリズムを楽しむ活動を取り入れて「日本語」のもつ美しさや響き・リズムの楽しさを味わってもらいたいと考えていたが、逆に子どもたちから私が「韓国語」の美しさや響き・リズムの楽しさを教えてもらったように思う。1 人ひとりの子どもにも自己紹介してもらって「すてきな名前ですね。」と伝えながら握手したときの子どもたちの嬉しそうな照れくさそうな表情に、名前を大切にすることが自尊感情へとつながる行為の 1 つだということはどこの国も同じなのだと改めて感じたりました。折しも、夜の歓迎晩さん会のテーブルで一緒に京畿道教育庁の方が、私に「あなたの名前はなんと読むのですか。韓国では『RIHE』と発音します。とても美しい意味があります。」と話しかけてくださった時、それまで緊張していた距離がぐっと縮まった気がした。その後、韓国でも日本と同じように、昔ながらの家庭では何世代も続く家族での暮らしを大切にしているということ、韓国の若い世代にも伝えていきたいということ、京畿道では日本の教育学者である佐藤学氏を招いてこの教育改革に取り組んでいるということなど、様々な話をすることができたことは忘れられない出来事である。

2 つ目については、ホームビジット先の長女の方が不在だったのだが、理由は中学校での「ボランティア活動」で、地域のためにできることを考えて色々活動しているというお話をから、子どものときから日常的に自分のできることを考え実践する活動を行っているのだなと思った。そして、出会った方々の温かい心遣いや思いやりに溢れ

た行為に、相手との違いを認め、相手のことを思いやり、自分が何をするべきなのか考えて行動する「地球市民教育」の具体を見たような気がする。5・6 年生の「私たちの道徳に「行為の意味」という詩が載っている。「中略～確かに心はだれにも見えないけれど、心遣いは見えるのだ。同じように胸の中の思いは見えないけれど、思いやりは誰にでも見える。温かい心が温かい行為になり、優しい思いが優しい行為になる時、心も思いも初めて美しく生きる—それは人が人として生きるということだ」日本でも道徳や各教科・諸活動の中でもっと実践していくけるに違いない。

そして3つ目については、韓国という国への理解についてまだまだ課題があると思うが、自分にとってまさに「近くて遠い国」であった「韓国」を身近に感じ、その美しさを見つけるとともに、改めて日本の美しさを見つめ直すことができたと思う。東日本大震災についてまだまだ復興の途上にある気仙沼だが、大分人々の記憶が薄れつつある昨今、ホームビジットしたご家庭では「子どもたちにもぜひ聞かせたい」と話を聞いてくださり、深い同情の言葉を頂いたことに思わず胸が熱くなった。「百聞は一見にしかず」このプログラムの中で幾度となく聞いてきた言葉である。百の知識よりも実際「見て・聞いて・さわって・感じて」きたものだから実感として捉えることができたのだろう。そして、それこそが私たち教員が子どもたちに行う教育なのだろう。

私たち B グループのテーマのソングともいえる「アルムダウンセサン(美しい世界)」は、まさにこの活動の目的だったのではないかと思う今日この頃である。韓国語の美しさ、お世話になった方々の美しい行為、韓国で出会ったたくさんの美しさと再確認した日本の美しさを今後もう一度しっかりと分析していきたい。

「韓国は美しい国」「日本は美しい国」

そして学校での学習や活動を通して、地域での社会教育活動などを通して伝えていけたらと思う。

### 人に対する優しさ

#### B-20 谷脇 光

「世界を変えるのは人。人を変えるのは教育。」韓国でのこの言葉を聞いたとき、教育に携わることの責任の重さを感じた。そして、その責任の重さは、日本だけではなく、教育に携わる世界中の人にかかる共通の責任だと感じた。

韓国では、全力で歓迎してくださる先生方や児童・生徒に出会った。鞍峴小学校のオカリナクラブの児童の演

奏には涙した。真剣に演奏する姿。この日を迎えるまでにどれだけ練習をしたかと思うと頭が下がる。児童を指導されたであろう先生方が児童を見守る目は、私たちが普段の学校生活で生徒に対して向ける目と同じであった。様々な場面で、日韓の共通点と相違点を考えながら見学をしていたが、児童生徒に関わる先生方の姿勢や熱意に日韓の相違点は全く存在していない。私たちと同じ思いで指導していることがよく分かった。この共通点は、日韓の教員を結び付けるために一番の強みになると感じた。

韓国で出会った方々の優しさに触れて、世界を変えるのに必要なのは、何よりも人に対する優しさかもしれないということに気づくことができた。

---

### 日韓の交流を通して

#### B-21 田之上 寿宏

はじめに、本年度、日韓国交正常化 50 周年という節目の年に本プログラムに参加できたことを大変光栄に思います。一部のマスコミ報道などを目にすると、誹謗中傷する記事もあり、両国の関係はよくない状態にあることはわかっていました。しかし、実際に訪問してみて、日本に好意を寄せている人も多数おり、学生の中には日本のアニメを通して我が国に興味をもち、自力で日本語を学び、将来は日本の企業に就職したい、行ってみたいと夢を語る者も少なからずいることが確認でき、日本人としてうれしくなりました。もっと夢をもってもらえるような国にしていかなければならぬと思いました。

レセプションでは、下村博文文部科学大臣が「今年は 50 年の節目です。また同時にますますの発展のためのスタートもあります。手を取り合ってがんばりましょう。」とあいさつされました。私はこの言葉を真摯に受け止め、教育実践をしていくつもりです。

---

### 共通点と、感性による国際理解教育

#### B-22 山本 瑞絵

今回のプログラムでは、予想以上に韓国と日本の教育の共通点を多く見出したように感じる。韓国の教育が競争教育から人間の尊厳を重視した教育へと変換した背景が大きいだろう。子どもたち主体の活動、子どもたちの知的好奇心を満足させるためには教員が変わらなければならない、という考え方など、日本の教育と通ずることが多かった。だからこそ、現在の韓国と日本の教員の抱える教育の課題も似通っており、教員同士の交流に

大変意義があるように感じた。

いくつかの「革新学校」を見学させていただいたが、どの学校からもこれ以上ないくらいの「おもてなし」を受けた。こうした先生方の気遣い、子どもたちの心配りによって、たくさんの感動が生まれた。この感動を味わうことが、理論や理屈では教えられない、“感性”による「国際理解教育」なのだと改めて感じる。私はこの現場で感じた感動を日本の子ども達にも肌で感じられる場を作りたいと考える。

最後に、日韓国交正常化 50 周年の記念すべき年に韓国を訪れることができたのは非常に感慨深いものがあった。今後も両国の平和を願い、お互いの国に行きたいと思える国づくり、教育をしていきたいと感じる。

# 6. 今後の 活動予定

## 伝える

### ◆職場・職員に伝える

- ・職員会で韓国の教育事情について、その他授業で語った内容について報告する。
- ・校内で行われる管理職による運営会議で、施設設備、カリキュラム、予算など学校運営に関するを中心とした報告を行う。
- ・自校の教職員に韓国の教育事情を紹介する。また、日本との共通点や相違点から、有効と思われるものを積極的に取り入れ、活用する。
- ・まず、教職員に対して報告会を行い、これから韓国との交流に対しての理解と協力をお願いする。
- ・自校の教職員に、韓国の教育現状について研修を行う。
- ・本プログラムで学んだことを、全教員に報告する。学校として今後取り組んでいくことを提案し、計画案を作成する。決定事項を進めていく。
- ・訪問について教職員に伝える機会を設定してもらい、「ユネスコスクール」について、教職員の理解を促進したい。
- ・この研修で得た事柄を職員で共有し、今後の可能性について議論したい。自校の国際交流は現在、特定の国に限られているので、その辺りの視点を改善することから提案していきたい。
- ・職員に韓国の教育事情や ESD の推進についての報告会をすることで、自校での教育の充実を図る。
- ・本プログラムの全日程について報告する機会を持ち、ユネスコスクールや ACCU 事業、ESD や GCED の理解啓発を促したい。
- ・職員研修会で、韓国の教育のシステムなどを中心に紹介する。その際、自由学期制などを中心にして学校訪問した実例を交えて成果や課題について討論する。
- ・報告会を開き、韓国での ESD の実践や教育政策について報告する。また、学校で取り入れられそうな取り組みを教員にシェアし、各担当で取り入れる。
- ・韓国で見たもの、感じたものを授業で子どもたちに伝えるだけでなく、機会を見つけ、教職員にも伝える。

### ◆児童・生徒に伝える

- ・経験の共有や報告を校内プレゼンテーションにより行う。
- ・日々の授業で今回のプログラムの報告をする。特に、韓国と日本の共通するところ、違いについて、教育面だけでなく、生活面や環境面でも伝えたい。
- ・授業においても、訪問の報告をし、生徒の興味・関心のきっかけとして活用する。
- ・韓国の学校生活や学校給食など、総合的な学習の時間などを使って、写真などを活用していきながら紹介し、韓国の良さや素晴らしいところを伝える。また、日本との共通点や相違点を見つけ、近くで遠い隣国である韓国に関心をもつことができるよう指導する。
- ・本プログラムで学んだことを、全生徒に伝える。
- ・授業や HR の時間を使って生徒に韓国の文化や教育事情について伝える。言葉の壁のもどかしさや、公用語である英語の重要さ、言葉のみに頼らない心の交流の大切さを伝えたい。

- ・授業において、韓国の教育事情や、文化について紹介することで次世代がもっと積極的に交流をはかるよう促したい。
- ・本校児童へ韓国の様子(学校、生活の様子など)を児童朝会で報告をする。
- ・今回の訪問の成果を、学内にブースを作り、生徒に伝えいく準備を進めている。お隣の韓国という国の、自分たちと同じ学生がどのような教育を受け、興味関心を持っているのかを積極的に伝えていきたい。
- ・韓国の紹介コーナーを作り、キャッチ方式で子どもたちに韓国のことを使えていく。
- ・児童に韓国の子ども達の様子を伝え、異文化理解に役立てる。
- ・学校に韓国の本を紹介するコーナーを設置する。授業や全校朝会で韓国についての写真や資料を紹介する。
- ・「日韓国交正常化 50 周年」をキーワード(タイトル)に掲げ、韓国の文化や言葉などを校内新聞に記事として掲載することで、理解を深められるようにし、児童に還元していきたいと考えている。
- ・各学年へ、異文化理解の授業を実践する。また、自身の担当する総合的な学習の時間、家庭科の時間に、韓国と日本の食文化の違いについて調べる活動を取り入れる。
- ・情報を客観的に捉える資質や能力の育成に力を入れる。韓国滞在の経験を基に、部分的な情報だけでは本質的な部分が見えてこないことを、様々な教科学習の中で伝える。
- ・校内では全校朝会でこのプログラムの大まかな内容と自分が体験したことを全校児童、全教職員に報告する。
- ・児童に写真を提示しながら、学校の生活や学習の様子を紹介する。事前に、学んだ韓国的基本情報と照らし合わせてもなお分からぬところや質問点をとりまとめておき、交流時に韓国の学校に質問する。
- ・職員会議では「交流計画」を提示し、全職員・全児童で韓国との交流を図っていきたい。その後、本校の国際交流コーナーに本プログラムの様子を掲示する。

#### ◆保護者・PTA に伝える

- ・PTA 活動の中で、韓国の文化や生活について伝える機会を考えている。

#### ◆その他の公共の場で伝える

- ・今年度自校が大学との連携で行っている研究グループにも報告をし、韓国の学校事情、授業交流の可能性などを考えていきたい。
- ・市内小学校校長会で報告する。
- ・「生活文化」について研究をしているグループで、韓国の生活文化(おもに衣食住に関わる部分)の報告を行い、授業実践へつなげられないか検討する。武藏野市国際交流協会の教員ワークショップで交流内容を報告し、情報共有を行う。
- ・教頭会において、韓国の教育事情および ESD の推進について報告し、大牟田市の教育の充実を図る。
- ・町内や安芸郡内で報告する機会があれば報告したい。
- ・現在自分が所属しているアクティヴ・ラーニング研究会で、他校の先生や近隣の小学校、中学校、大学の先生に、グローバル意識を持ち、教育活動に専念していくことがとても重要であることを含めた今回のプログラムの報告をする。
- ・TOSS(教育技術法則化運動)という民間教育団体で、小・中・高・特別支援学校と多岐に渡る教職員に、今回のプログラムから学んだことを伝えていきたい。

---

#### 改善・新しい取組みに生かす

##### ◆ESD 活動に生かす

- ・韓国で学んだ異文化理解教育・外国語教育・環境教育・多文化共生教育などを教科指導や「総合的な学習の時間」、国際交流などに取り入れ、国際理解教育を軸とした ESD に取り組む。
- ・自校の姉妹校であるオーストラリアの高校との交流活動に、韓国で学んだ ESD の概念を取り入れる。

##### ◆教科授業に取り入れる

- ・韓国の中学校 6 年生との交流を行っていきたい。内容としては、手紙や絵・習字などの交換、ビデオレター、可能であればインターネットを活用してのビデオ会議等が考えられる。初めはクラス単位で交流し、最終的には児童 1 人ひとりがお互いに卒業後も交流を続けることができればと思っている。

- ・現在の小学生がグローバルな世界で活躍する機会は多いと思われる。そのため、学校での「外国語活動」を行う意味を児童にしっかりと伝えたい。
- ・韓国の学校を訪問し、ICT教育の展開の仕方のヒントを掴み、2学期からすぐにICT教育に取り組んでいきたい。
- ・授業の組み立てにESDの観点を盛り込んでいきたいと考えている。教科書とは違い、自分の住んでいる地域の歴史は、親近感を持ちやすく、また地域社会とのつながりという点で、ESDの概念に沿うものであると考える。
- ・ビジュアル教材や、あるいは「音(例えば正倉院宝物の楽器の音色など)」をともなう教材の活用を図り、「五感に訴える」授業をしたいと思う。
- ・私が担当する英語の授業において様々なテーマ(例えば環境問題や人権問題等)について考える場を設定したい。
- ・2年生の社会科の授業で外国について学習する時間があるので、その際社会科教員と連携をとって韓国の実体験の話をすることを計画している。
- ・英語の授業を通じて、私の町自慢の英語のポスターを作り、交換をしたり、中学校の1日を英語で説明して、ビデオレターにしたりする。
- ・社会科「世界の中の日本とわたしたち」と関連させて、総合的な学習の時間に訪韓中の写真や資料を、子ども達の学習に生かしていきたい。韓国の人たちの様子を知った感想や自分たちの学校生活の様子を知らせる絵等を描いて送ったりすることで、国際交流活動を計画したい。
- ・外国語活動や総合的な学習の時間を使って韓国について知るための学習を進めたいです。
- ・現地で撮った学生インタビューを国際理解教育×キャリア教育に使用する。

#### ◆教材・設備・指導計画に活かす

- ・学校のICT環境を、予算に基づいて計画的に整備するとともに、ICTを活用して指導できる教員を増やすため、教育センターにおける研修を充実させ、さらにそこで研修を受けた教員が校内で多くの教員にその成果を伝える校内研修体制を構築していきたい。
- ・国際理解教育、また外国語活動に力を入れ、子ども達の他国への興味、関心を高めさせる。
- ・環境政策を担当する部署、福祉担当の部署等にも働きかけ、柏江市がESDのムーブメントを作り出せるよう、働きかけていく。
- ・家庭支援や教育相談、読書活動の推進については、今回の訪問で多くの示唆が得られた。本県で取り組める形に落とし込み、施策展開していく予定である。
- ・本校の環境学習(多摩川学習)を、ESDの視点に基づいてカリキュラムを見直し、再構成する。
- ・「地球市民を意識して人や環境とのつながりを大切にした取り組み」や「自国の伝統を学ぶ実践」などの内容に、総合学習の時間の中で取り組み、全学部(小、中、高)で実施できるような教育計画を作成したい。
- ・韓国で見せていただいた「ICTを効果的に活用した授業」を、本校での外国語教育や国際理解教育でも生かせるように、教育の質的向上に向けて教科内研修・実践に取り組む。
- ・教科会や校内研修会を通して、今回のプログラム内容や韓国およびESDについての共通理解を図り、本校職員がそれぞれの立場でESDに取り組めるような指導法や指導技術を研究・確立する。
- ・教育委員会として、ESDを教育施策として推進し、各学校の教育課程に位置付けられるようにする。のために、ESDを学校に対して説明していく必要がある。

#### ◆その他の取組みに活かす

- ・韓国の自由学期制は、日本で進めようとしているアクティブラーニングにつながるものである。本県でも、韓国での取組やその成果を注視し、その良い部分を取り入れながら、体験を重視したキャリア教育や課題探求型の学習を教育現場で充実していきたい。
- ・ユネスコ協会が主催するさまざまな行事に生徒を参加させたい。そして、国内外のユネスコスクールと連携し、そのような活動を行っているのか情報交換を行っていきたい。

## 今の活動を継続する

- ・受入を継続的に行うとともに、教育課題克服の視点として、近隣諸国の教育施策を積極的に取り入れ、反映していくたいと考えている。

## 韓国との交流を実施する

- ・現地でコミュニケーションがとれた学校や教職員、生徒とメールなどで交流を続けていきたい。そして、現地の学校や生徒とのやり取りを通して連携性を高め、関係性の構築に努めていきたい。
- ・美術の授業で韓国語を交えたポスター作りを行い、韓国の学校で展示してもらい、ビデオメッセージなどで意見交換をする。
- ・日本のことでも韓国に紹介することができれば、お互いに深く理解することができると思う。もし可能ならば、子ども同士での手紙や作品などの交流をしてみたい。
- ・韓国の生徒と自校の生徒で、スカイプなどによる生徒同士の交流を図りたい。最初は、互いの高校生活の紹介や自分の町や国の紹介をし合えたら良いと思う。
- ・今回得られたネットワークを活用することで、今まで手薄であった韓国との交流を深めていきたい。
- ・鞍峴小学校の4年1組の児童に、自己紹介の手紙と学校紹介の動画を送る。
- ・絵や習字、日本の歌のビデオレターの作成し、韓国側と交流する。
- ・韓国の子どもたちからの手紙を見せ、手紙の返事を書く。
- ・絵や手紙などの簡単なコミュニケーションを通じての関係づくりを進め、将来的には同じテーマについてお互いに意見交換を行ったり、協働で活動できるようにしていきたいと考える。
- ・スカイプで互いの文化を紹介し、異文化理解を促進する。伝統文化クラブでの相互の文化交流、菜園活動における韓国との意見交換をしたい。
- ・韓国の同じ学年の子どもたちと作品交流や自分たちが学んでいる事など、日本の紹介を含めた情報の交換ができるればよいと考えている。
- ・特別支援学校の教員、児童生徒の交流がしたい。具体的には、日本で実施している作業科目の紹介、韓国で実施している作業科目との交流、高等部卒業後の進路などの情報交換、また、グループでの手話による歌などの映像交換などの交流を考えている。
- ・同じ曲を練習して、吹奏楽部や合唱部がビデオレターで演奏を見せ合う。
- ・本校で実施する学習発表会に向けて、学年の取組みとしてキャリア教育(将来の夢設計)を日韓共同で展示できるようにする。
- ・今回一緒に参加した日本の教職員や韓国の教職員(特に同じ校種である高校の教職員)の学校との交流活動や、共同プロジェクトを実施し、国際交流・異文化理解・国際理解の深化を図る。
- ・子ども達に和食についてレポートさせ、それについて名刺交換した韓国の教職員と連絡を取って、その教員の学校と韓国料理について紹介していただいた物と交換できればと考えている。
- ・今回の訪問についての校内新聞の記事を韓国語に翻訳し、訪問先であった学校に配布をして、NIE (Newspaper in Education) 教育の一環として、韓国の学校の教職員や児童生徒と交流を持っていきたい。
- ・各学年のESD の取り組みの様子や学習への取り組み(例:道徳や学級活動での話し合いの様子、合唱・合奏の様子)のビデオレターなどを作成し、韓国の小学校と交流していく。

## 受け入れに生かす

### ◆次回(2015年2月)の韓国教職員招へいプログラムにむけて

- ・中国教職員招へいプログラムにより来日する中国教職員の受け入れを行ったことがあるので、ACCU の招へい事業の韓国教職員の受け入れも行い、交流をもちたいと思っている。
- ・韓国の教職員の方々に永田台小学校を訪問していただき、あたたかな歓迎へのお返しをしたい。
- ・2月に予定されている受け入れで、今回受けたおもてなしを、韓国教職員に返していきたい。

◆◆その他の取組み

- ・ユネスコスクール登録を目指して準備し、ESD活動に力を入れていきたい。
- ・1週間共に過ごした日本教職員は皆各機関、学校で活躍している。その教職員と今後の活動について意見交換や実践報告交換などを行っていく。
- ・ACCUとの繋がりを強化し、韓国の教職員や児童の受け入れ体制を整備したい。その為に校内での話し合い、さらには町で受け入れてもらえるように申し出ていきたいと思う。国と繋がる様々な機会に積極的に関わっていきたい。
- ・韓国の特別支援教育に携わっている教員に、本校の情緒障害学級(通級)の授業、指導場面を参観してもらい、認知トレーニングなどの教育効果を知っていただきたいと思う。

## ◆資料 1.

### 韓国政府日本教職員招へいプログラム (2015年8月25日～8月31日：韓国) 実施要項

#### 1. 背景

2000 年 3 月、戦後の文部大臣として初めて、中曾根弘文文部大臣(当時)が訪韓し、文龍鱗(ムン・ヨンリン)韓国教育部長官(当時)との会談でなされた招請に基づき、文部科学省の協力のもと、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)は、2001 年より韓国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。当初は「ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業」として、2003 年からは「ACCU 国際教育交流事業」として国際連合大学の委託を受け、これまで 1,766 名の韓国教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日韓両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきましたが、これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価されることとなり、2005 年からは、韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして参加人数を 20 名へ倍増し日韓教職員相互交流が実施されました。2008 年のプログラムからは、招へい人数がさらに倍増され、さらなる交流の発展を目指すことになりました。

#### 2. 目的

- (1) 韓国の初等中等教育における教育制度および教育課題への理解を深める。
- (2) 学校および地域社会における持続可能な開発のための教育(ESD)と地球市民教育(GCED)の好事例を探る。
- (3) 教育経験を交換する機会を提供し、日韓両国の教育の質を高める。
- (4) 日韓教職員のネットワーク構築・強化に寄与する。

#### 3. 活動内容

- (1) 小・中・高・特別支援学校や教育施設訪問を通じて、持続可能な開発のための教育(ESD)や地球市民教育(GCED)を含む韓国の最新の教育政策・現状の視察
- (2) 訪問先における韓国の教職員・児童生徒との交流、日本の文化や ESD の紹介
- (3) 世界遺産見学やホームビジットを通じた、韓国文化の理解

#### 4. 日程概要

2015 年 8 月 25 日(火)～8 月 31 日(月) (7 日間)

※8 月 24 日(月)に東京近郊にて事前オリエンテーションを実施

各自参加にむけて準備			
8 月 25 日(火)	第 1 日	東京/ 仁川(インチョン)、 ソウル	仁川到着後、ソウルに移動 オリエンテーション(KNCU) 韓国の教育制度紹介 歓迎交流会
8 月 26 日(水)	第 2 日	ソウル	ユネスコスクール訪問
8 月 27 日(木)	第 3 日		（ソウルから地方へ出発） 教育委員会へ表敬訪問
8 月 28 日(金)	第 4 日	全羅南道 (チヨルラナムド) ・京畿道 (キヨンギド)	ユネスコスクールおよび教育施設訪問 韓国の教員、児童生徒との交流
8 月 29 日(土)	第 5 日		地域遺産訪問 情報共有会 ホームビジット
8 月 30 日(日)	第 6 日	釜山(プサン)	（地方から釜山へ移動）

			報告会、閉会式
8月31日(月)	第7日	釜山(プサン)/ 東京、大阪	出発準備 東京、大阪へ帰国

## 5. 参加者

下記の教職員、随行員併せて50名を参加者とする。

- (1) 2014-2015年韓国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会または受入れ校が推薦する教職員
- (2) 2015-2016年韓国教職員招へいプログラム受入れ予定の教育委員会が推薦する教職員
- (3) 公募により選抜された教職員
- (4) 国際連合大学、日本ユネスコ国内委員会を含む文部科学省、およびACCUの職員

## 6. 参加資格

- (1) 日本国民であること。
- (2) 所属する学校等から推薦を受けた初等中等教育教職員(教育行政職員を含む)であること。
- (3) ユネスコスクール、持続可能な開発のための教育(ESD)または地球市民教育(GCED)の活動に携わっている者、または高い関心を持っている者。
- (4) プログラム参加前の準備、プログラム中ならびに参加後も継続して、ESDに関連した韓国との具体的な交流の推進に寄与できること。
- (5) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (6) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。
- (7) 過去の本プログラムに参加がないこと。

## 7. 評価と報告

- (1) 派遣期間中
  - 評価票記入(日本語または英語で記入し、韓国ユネスコ国内委員会へ提出。)
  - 情報共有会(日本側参加者のみによる)への出席。
  - 韓国教職員を交えての報告会への出席・発表。
- (2) 帰国後
  - 所定の期日までに、各自、プログラム参加の報告をACCUに日本語で提出する。  
(ACCUによる編集の後、実施報告書へ掲載予定)
  - 所定の期日までに、各グループの報告をACCUに日本語で提出する。  
(ACCUから韓国ユネスコ国内委員会に送付後、韓国ユネスコ国内委員会による実施報告書へ掲載予定)

## 8. 旅費等諸経費

- (1) 韓国ユネスコ国内委員会が下記について負担する。
  - 往復航空運賃:日本と韓国の国際空港間のエコノミークラス航空券
  - 韓国内の移動に係る経費、宿泊、食事:但し、公式行事のない日の夕食については、支給される夕食代から参加者が支出することとする。
  - 夕食代:1日当たり20,000ウォンを支給。ただし、公式行事のない日のみ。
- (2) ACCUが下記について負担する。
  - 日本国内交通費:自宅最寄駅からオリエンテーションの会場(東京)までの交通費、出発日の空港までの交通、および帰国日の到着空港からの自宅最寄駅までの交通費の定額(ACCUの規程に準ずる)。
  - 日本滞在費:オリエンテーション前日の宿泊が必要な参加者について宿泊費の定額、出発前日の宿泊。
- (3) 各参加者は、下記について負担する。
  - 海外旅行損害保険:各参加者は、プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において、海外旅行損害保険に加入しておくこと。
  - 上記(1)、(2)以外の諸経費
- (4) 旅券と査証について

- 旅券(パスポート)：入国時に 3 ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- 査証(ビザ)：一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

#### 9. 通訳

韓国国内でのプログラム期間中は日本語と韓国語間の通訳を配置する。

#### 10. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) 人物交流部 (担当: 有菌・齋藤、部長: 米島)

〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館  
TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510  
E-MAIL: accu-exchange\_ml@accu.or.jp

◆資料2.

韓国政府日本教職員招へいプログラム  
(2015年8月25日—8月31日:韓国 ソウル市、全羅南道・京畿道、釜山市)

**プログラムのスケジュール/ Programme Schedule**

**グループ A&B (ソウル) 2015年8月25日**

**Group A&B (Seoul) 25 August 2015**

1 日目 /Day 1	8月 25日 (火) / 25 August (Tuesday)
9:25	東京成田空港出発(KE706) Departure from Tokyo-Narita Airport (KE706)
11:50	仁川国際空港到着 Arrival at Incheon International Airport
13:00-14:00	昼食 /Lunch
14:00	ソウルへ移動 / Departure for Soul
15:00	ホテル到着及びチェックイン (世宗ホテル) Arrival and Check-in at Sejong Hotel
16:00-16:40	プログラムに関するオリエンテーション及び開会式 (ユネスコ会館 11階 ユネスコホール) Programme Orientation and Opening Ceremony(UNESCO Hall)
16:40-17:20	韓国の教育についての講義 / Lecture on Korean Education
17:20-18:00	韓国の ASPnet 紹介 / Introduction of Korean ASPnet
	夕食(自由) / Dinner

**グループ A (全羅南道) 2015年8月26日-29日**

**Group A (Jeollanam-do) 26 - 29 August 2015**

2 日目 /Day 2	8月 26日 (水) / 26 August (Wednesday)
9:00	ホテル出発 / Departure from Hotel
9:30-13:00	龍江中学校訪問(ユネスコスクール)(お弁当) Visit to Yonggang Middle School (ASPnet) (Lunch box)
13:30	ホテルへ移動 / Departure for Hotel
14:00	休憩 / Break time
3 日目 /Day 3	8月 27日 (木) / 27 August (Thursday)
8:30	ホテル出発/ Departure from Hotel
13:00-14:00	昼食及び休憩(木浦現代ホテル) / Lunch and Break time

15:00-16:00	全羅南道教育庁訪問 / Visit Jeollanamdo Office of Education
16:00-17:00	全羅南道教育研究情報院訪問 Visit Jeollanam-do Educational research and information Institution
18:30	ホテル到着及びチェックイン(唯心川スポーツホテル) Arrival at Sports Tourist Hotel Yusimcheon and Check-in
	夕食(自由) / Dinner
<b>4 日目 /Day 4</b>	<b>8 月 28 日 (金) /28 August (Friday)</b>
9:40	ホテル出発 / Departure from Hotel
10:00-13:30	順天旺之小学校訪問(ユネスコスクール)(学校給食) Visit to Suncheon Wangji Elementary School (ASPnet) (School Lunch)
14:00-17:00	順天八馬高等学校訪問(ユネスコスクール) Visit to Suncheon Palma High School (ASPnet)
18:00-20:00	歓迎晚餐会(順天エコグランドホテルコンベンションホール) Welcome Reception at Convention Hall, Ecograd Hotel Suncheon
20:20	ホテル到着 / Arrival at Hotel
<b>5 日目 /Day 5</b>	<b>8 月 29 日 (土) /29 August (Saturday)</b>
8:45	チェックアウト & ホテル出発 Check-out and Departure from Hotel
9:00-10:30	順天湾庭園見学 / Visit to Suncheon Bay Garden
11:10-12:10	松広寺見学 / Visit to Songgwangsa
12:40-14:00	昼食及び休憩 / Lunch and Break time
14:30-15:50	グループディスカッション(ホテル別館 1 階「イエダム」) Group Discussion at Hotel Restaurant Iedam
16:00-20:00	家庭訪問 / Home Visit

グループ B (京畿道) 2015 年 8 月 26 日-29 日

Group B (Gyeonggi-do) 26 - 29 August 2015

<b>2 日目 /Day 2</b>	<b>8 月 26 日 (水) /26 August (Wednesday)</b>
9:00	ホテル出発 / Departure from Hotel
9:30-13:00	ソウル大学校師範大学付設女子中学校 (ユネスコスクール)(学校給食) Visit to Seoul National University Girl's Middle School (ASPnet) (School Lunch)

13:30	ホテルへ移動 / Departure for the Hotel
14:00	休憩 / Break time
<b>3 日目 /Day 3</b>	<b>8月 27日 (木) /27 August (Thursday)</b>
9:00	ホテル出発 / Departure from Hotel
10:30-11:30	京畿道教育庁北部庁舎訪問/Visit Gyeonggido Office of Education
12:00-13:00	昼食 / Lunch and Break time
13:15-16:00	国立樹木園見学 / Visit to National Forest Park
18:00	ホテル到着及びチェックイン(イビス・アンバサダー・水原) Arrival at the Hotel and Check-in (Ibis Ambassador Suwon)
<b>4 日目 /Day 4</b>	<b>8月 28日 (金) /28 August (Friday)</b>
8:15	ホテル出発 Departure from Hotel
9:30-13:00	鞍峴小学校(ユネスコスクール)(学校給食) Visit An Hyun Elementary School (ASPnet) (School Lunch)
13:30-16:00	京畿道自動車科学高等学校(ユネスコスクール) Visit Gyeonggi High School of Automotive (ASPnet)
16:30-17:30	休憩 / Break time
18:00-20:00	歓迎晩餐会 / Welcome Reception
<b>5 日目 /Day 5</b>	<b>8月 29日 (土) /29 August (Saturday)</b>
8:30	華城へ出発 Departure for Hwaseong
9:00-12:00	華城見学/Visit to Hwaseong
12:00-13:30	昼食及び休憩 / Lunch and Break time
13:30-14:30	鞍峴小学校へ移動 / Departure for An Hyun Elementary School
14:30-15:50	グループディスカッション (鞍峴小学校図書室) Group Discussion (Library, An Hyun Elementary School)
16:00-20:00	家庭訪問 / Home Visit

**グループ A&B (釜山) 2015 年 8 月 30 日-8 月 31 日**

**Group A & B (Busan) 30 -31 August 2015**

<b>6 日目 /Day 6</b>	<b>8 月 30 日 (日) /30 August (Sunday)</b>
8:00 9:30	Group B チェックアウト & 釜山へ移動 Group A チェックアウト & 釜山へ移動 Checkout from Hotel and departure for Busan
12:30	ホテル到着及びチェックイン (海雲台グランドホテル) Arrival at Haeundae Grand Hotel
13:00-14:00	昼食 (海雲台グランドホテル) Lunch at Haeundae Grand Hotel
14:30-15:40	報告及び閉会式 (海雲台グランドホテル) Debriefing Session & Closing Session (Haeundae Grand Hotel )
16:30-19:00	日韓国交正常化 50 周年記念教育交流サミットおよび小宴 (海雲台グランドホテル スカイホール) Educational Exchange Summit for the 50 <sup>th</sup> Anniversary of Normalization of Japan-ROK Relations & Reception (Sky Hall, Haeundae Grand Hotel )
19:00	休憩 / Break time
<b>7 日目 /Day 7</b>	<b>8 月 31 日 (月) /31 August (Monday)</b>
	帰国準備 / Preparation for Return
6:30	チェックアウト & 金海国際空港へ移動 Check-out from Hotel and Departure for Gimhae International Airport
9:00-10:25	大阪-関西行き(KE731) / 大阪到着 Departure from Busan for Osaka-Kansai (KE731) / Arrival at Osaka-Kansai Airport
9:15-10:05	福岡-福岡行き(KE783) / 福岡到着 Departure from Busan for Fukuoka (KE783) / Arrival at Fukuoka Airport
9:30-11:35	東京-成田行き(KE715) / 東京到着 Departure from Busan for Tokyo-Narita (KE715) / Arrival at Tokyo-Narita Airport

### ◆資料3.

#### 2014-2015年 韓国政府日本教職員招へいプログラム 参加者リスト

<Aグループ>

##### 1. 参加教職員(22名)

☆グループ長:A-1 春原秋夫(SUNOHARA Akio)

☆A-01	春原秋夫	SUNOHARA	Akio	長野県教育委員会教学指導課	課長補佐
A-02	新子慶行	ATARASHI	Yoshiyuki	奈良市立都祁小学校	教諭
A-03	原彩乃	HARA	Ayano	さいたま市立春野小学校	教諭
A-04	針谷健太	HARIGAYA	Kenta	自由学園男子部中等科・高等科	教諭
A-05	細谷俊太郎	HOSOYA	Shuntaro	柏江市教育委員会	統括指導主事
A-06	石田恒平	ISHIDA	Kohei	聖徳学園中学・高等学校	教諭
A-07	地引千尋	JIBIKI	Chihiro	千葉県立千葉東高等学校	教諭
A-08	川崎恵子	KAWASAKI	Keiko	長崎県立諫早商業高等学校	教諭
A-09	宮田里枝	MIYATA	Satoe	和歌山県教育委員会	指導主事
A-10	水野鉄也	MIZUNO	Tetsuya	長野県中野西高等学校	教諭
A-11	中川とも子	NAKAGAWA	Tomoko	神奈川県立有馬高等学校	教諭
A-12	中嶋たや	NAKAJIMA	Taya	奈良教育大学附属中学校	教諭
A-13	榎府暢子	NARAFU	Nobuko	東京大学教育学部附属中等教育学校	主幹教諭
A-14	野木雅生	NOGI	Masao	八千代市立村上北小学校	教諭
A-15	淋慎一郎	SOSOGI	Shinichiro	柏江市立和泉小学校	主任教諭
A-16	田頭賢太朗	TAGASHIRA	Kentaro	関東国際高等学校	教諭
A-17	高橋松雄	TAKAHASHI	Matsuo	白石市立白川中学校	教諭
A-18	田中福人	TANAKA	Fukuto	ノートルダム清心学園 清心中学校清心女子高等学校	教諭
A-19	内海まゆみ	UTSUMI	Mayumi	大田区立大森第六中学校	主任教諭
A-20	和田恵子	WADA	Keiko	兵庫県立北須磨高等学校	教諭
A-21	山地陽子	YAMAJI	Yoko	千葉県立国分高等学校	教諭
A-22	柳川真弓	YANAGAWA	Mayumi	熊野町立熊野第一小学校	教諭

##### 2. 文部科学省同行(1名)

A-23	西川太郎	NISHIKAWA	Taro	文部科学省	国際統括官付企画係
------	------	-----------	------	-------	-----------

##### 3. 国際連合大学同行(1名)

A-24	岩佐敬昭	IWASA	Takaaki	国際連合大学	大学院事務局長
------	------	-------	---------	--------	---------

##### 4. 事務局(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(1名)

A-25	高松彩乃	TAKAMATSU	Ayano	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	総務部
------	------	-----------	-------	----------------------	-----

**2014-2015年 韓国政府日本教職員招へいプログラム  
参加者リスト**

**<Bグループ>**

**1. 参加教職員(22名)**

★団長:B-1 樋口豊隆(HIGUCHI Toyotaka)  
☆グループ長:B-2 川崎貴志(KAWASAKI Takashi)

★B-01	樋口豊隆	HIGUCHI	Toyotaka	柏江市立柏江第一中学校	校長
☆B-02	川崎貴志	KAWASAKI	Takashi	柏江市立柏江第六小学校	校長
B-03	青鹿吉洋	AOSHIKA	Yoshihiro	恵泉女学園中学高等学校	教諭
B-04	新井真理	ARAI	Mari	横浜市立永田台小学校	教諭
B-05	堂代正道	DOSHIRO	Masamichi	和歌山県立たしばな支援学校	教諭
B-06	原野公輔	HARANO	Kosuke	大牟田市立高取小学校	教頭
B-07	寶迫浩二	HOSAKO	Koji	熊野町立熊野第四小学校	教諭
B-08	池田康人	IKEDA	Yasuto	八千代市立西高津小学校	教諭
B-09	神藤恭光	JINTO	Yasuteru	和歌山県教育庁学校教育局県立学校教育課	指導主事
B-10	加藤健次郎	KATO	Kenjiro	千葉県立特別支援学校市川大野高等学園	教諭
B-11	小出一也	KOIDE	Kazuya	長野県飯山高等学校	教諭
B-12	町田直美	MACHIDA	Naomi	東京都北区立滝野川小学校	主任教諭
B-13	槇田雅江	MAKITA	Masae	多摩市立愛和小学校	教諭
B-14	三田村剛	MITAMURA	Tsuyoshi	北海道教育大学附属札幌小学校	教諭
B-15	室井明	MUROI	Akira	長野県中野西高等学校	教諭
B-16	大平淑恵	OHIRA	Yoshie	市川市立中山小学校	教諭
B-17	大西義浩	ONISHI	Yoshihiro	大阪府立泉北高等支援学校	教諭
B-18	佐々木哲弥	SASAKI	Tetsuya	多摩市立多摩第二小学校	教諭
B-19	菅原理恵	SUGAWARA	Rie	気仙沼市立面瀬小学校	主幹教諭
B-20	谷脇光	TANIWAKI	Hikari	八千代市立大和田中学校	教諭
B-21	田之上寿宏	TANOUYE	Kazuhiro	北九州市立南丘小学校	主幹教諭
B-22	山本瑞絵	YAMAMOTO	Mizue	立命館宇治中学校・高等学校	教諭

**2. 文部科学省同行(1名)**

B-23	山本剛	YAMAOTO	Tsuyoshi	文部科学省	初等中等教育局 初等中等教育企画課 専門官(併)教育公務 員係長
------	-----	---------	----------	-------	---

**3. 事務局(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(2名)**

B-24	木曾功	KISO	Isao	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	理事
B-25	斎藤 盛午	SAITO	Seigo	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部

## ◆資料4.

### 2014-2015年国際教育交流事業 韓国政府日本教職員招へいプログラム 関係機関連絡先 (2015年8月現在)

#### 1. 全体プログラム

##### ◆ユネスコ国内委員会/Korean National Commission for UNESCO 政策事業本部教育チーム Education Team, Division of Policy & Programmes

住所：ソウル特別市中区明洞通り（ユネスコ通り）26 〒100-810  
 Address: 26 Myeongdong-gil(UNESCO Road), Jung-gu, Seoul 100-810 Korea  
 URL: <http://www.unesco.or.kr/>  
 Tel: 82 (0)2 6958 4157 / Fax: 82 (0)2 6958 4254  
 E-Mail : unescoteacher@unesco.or.kr

事務総長 Secretary-General 閔東石(ミン・ドンソク) Mr.MIN Dong-seok

事業部部長 Assistant Secretary-General 林賢默 (イム・ヒョンムク) Mr. LIM Hyun-Mook

教育チーム長 Director / Division of Education 趙佑眞(チョ・ウジン) Mr. CHO Woo-jin

教育チーム担当者・A グループ担当 Programme Specialist 洪輔江(ホン・ボガング) Ms. HONG Bogang

教育チームB グループ担当 Programme Officer 李智銀(イ・ジウン) Ms. LEE Ji Eun

教育チーム Programme Assistant 権珠賢(クォン・ジュヒョン) Ms. KWON Joo hyun

教育チーム Programme Assistant 権ノウル(クォン・ノウル) Ms. KWON Noh Eul

##### ◆教育部/Ministry of Education

国際協力官国際教育協力担当官  
 International Education Cooperation Division, International Cooperation Bureau  
 住所：世宗特別自治市ガルメ路 408 政府世宗庁舎 14 棟教育部 〒339-012  
 Address: Central Government Complex, 209 Sejeong,408 Galme-ro, Sejong 339-012, Korea  
 URL: <http://www.moe.go.kr>  
 Tel: 82(0)2 6222 6060/ Fax: 82(0)2 2100 6133

#### 2. グループプログラム受入れ教育庁

##### ◆Group A 全羅南道教育庁/ Jeollanamdo Office of Education

住所：全羅南道務安郡三郷邑オジンヌリキル 10 〒58564  
 Address: 10, Eojinnuri-gil, Samhyang-eup, Muan-gun, Jeollanam-do, Korea, 58564  
 URL: <http://www.jne.go.kr/eng/index.jne>  
 Tel: 82-61-260-0114, 0115/Fax: 82-61-260-0117, 0118

教育長/Superintendent : 張萬彩(ジャン・マンチェ) Mr. Jang, Man-Chai

プログラム担当/Programme Coordinator : 崔瓊化(チエ・ギヨンファ) Ms. CHOI Kyung Hwa

##### ◆Group B 京畿道教育庁/ Gyeonggido Offfce of Education

住所：京畿道議政府市東一路 700 〒11759  
 Address: 1287, Hoguk-ro,Uijeongbu-si, Gyonggi-do  
 URL:<http://www.goe.go.kr/index.jsp>  
 Tel:82-(0)31-249-0114

第二副教育長/The 2nd ViceSuperintendent : ムン・ビヨンソン Mr. MOON Byoung Sun

プログラム担当/Programme Coordinator : ミン・ギヨンフン Mr.MIN Kyung Hun

### 3. 受入れ校

#### Group A

##### ◆龍江中学校/ **Yonggang Middle School**

住所：ソウル特別市龍山區二村路 65 街 91  
Address: Ichonro 65 ga-gil 91, Yongsan-gu, Seoul  
Tel: 82-02-790-1857/Fax: 82-(0)2-795-5707

校長/Principal : 韓奉熙 (ハン・ボンヒ) Mr. Han Bong Hee  
プログラム担当/Programme Coordinator : 朴贊姫 (パク・チャンイム) Mr. PARK Chan Im

##### ◆順天旺之小学校訪問/ **Suncheon Wangji Elementary School**

住所：全南順天市蓮洞南 3-8  
Address: 8, Yeondongnam 3-gil, Suncheon-si, Jeollanam-do  
Tel: 82-(0)61-724-9506/Fax: 82-(0)61-724-9508

校長/Principal : 金聖烈 (キム・ソンヨル) Mr. Kim Sung Youal  
プログラム担当/Programme Coordinator : 裴日淳 (ペ・イルスン) Mr. Bae Il Soon

##### ◆順天八馬高等学校訪問/ **Suncheon Palma High School**

住所：全南順天市三山路 140  
Address: Jeollanamdo Suncheonsi Samsanro140  
Tel: /82-(0)61-804-2210/Fax: 82-(0)61-754-8317

校長/Principal : 許順行 (ホ・スンヘン) Mr. Hur Sun-hang  
プログラム担当/Programme Coordinator : 李永光 (イ・ヨングゥアン) Mr. LEE Yong Kwang

#### Group B

##### ◆ソウル大学校師範大学付設女子中学校/ **Seoul National University Girl's Middle School**

住所：ソウル特別市鍾路區大学路 64  
Address: 64 Daehak-ro Jongno-Gu Seoul  
Tel: 82-(0)2-762-5252 /Fax: 82-(0)2-745-0664

校長/Principal : 卜璇根(ボク・ハンクン) Mr. Bock Whankun  
プログラム担当/Programme Coordinator : 姜永眉 (カン・ヨンミ) Ms. KANG Young MI

##### ◆鞍峴小学校/ **An Hyun Elementary School**

住所：京畿道光明市道德公園路 5  
Address: 5, Doduckgongwon-ro, Gwangmyeong-si, Gyeonggi-do 423-061  
Tel: 82-(0)2-899-7670 /Fax: 82-(02)-899-7672

校長/Principal : 金善惠(キム・ソンヘ)Ms. Kim Sun Hye  
プログラム担当/Programme Coordinator : 陳裕璇(チン・ユソン)Ms. JIN Yoo Surn

##### ◆京畿自動車科学高等学校/ **Gyeonggi High School of Automotive**

住所：京畿道始興市金梧路 103  
Address: 103, Geumo-ro, Siheung-si, Gyeonggi-do 429-110  
Tel: 82-(031)310-9000/Fax: 82-(031)315-5106

校長/Principal : 韩周熙 (ハン・チュヒ) Mr. Han Ju hee  
プログラム担当/Programme Coordinator : 洪材薰 (ホン・チェファン) Mr. HONG Jae Hun

**◆資料5.**

過去のプログラム実績

実施期間	訪問地	訪問人数
2003年3月16日～20日	ソウル、慶州、釜山	11名
2004年6月13日～18日	ソウル、慶州、釜山	16名
2005年9月5日～13日	ソウル、慶州、釜山	24名
2006年6月11日～18日	ソウル、光州、釜山	25名
2007年6月10日～17日	ソウル、大田、清州、慶州、釜山	29名
2008年8月19日～28日	ソウル、慶州、釜山	52名
2009年8月26日～9月4日	ソウル、統営、安東、釜山	53名
2010年8月25日～9月3日	ソウル、原州、清州、釜山	53名
2011年8月26日～9月4日	ソウル、昌原、順天、慶州、釜山	53名
2012年8月29日～9月7日	ソウル、水原、大田、論山、公州、釜山	53名
2013年8月22日～8月29日	ソウル、清州、春川、原州	50名
2014年8月26日～9月1日	ソウル、春川、楊口、高城、清州、忠州、丹陽	50名
2015年8月25日～8月31日	ソウル、全羅南道、京畿道、釜山	50名
		計 519名

●国際連合大学 2014-2015 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

**実施報告書**

2015 年 9 月

編集・発行

国際連合大学

〒150-8925

東京都渋谷区神宮前 5-53-70

URL <http://jp.unu.edu/>

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by WACO Inc. [200]

©2015 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)